

---

# 魔法少女リリカルなのはvivid 銀の左手

楚良

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのはvivid 銀の左手

### 【Nコード】

N0590V

### 【作者名】

楚良

### 【あらすじ】

第2騎士王の末裔であるアレン。  
聖王のクローンであるヴィヴィオ。  
覇王の血統であるアインハルト。  
3人の王は一体どんな物語を作り出すのか。

## プロローグ（前書き）

今作品にきていただいております！  
作者の楚良<sup>ソウ</sup>です。

今回はプロローグです。

## プロローグ

「ハッ、ハッ、ハッ」

髪の毛は白、左目が灰色、右目が紅のオッドアイで、左手が真っ赤な少年は病院へ向けて走っていた。

12月25日。世にいうクリスマスの夜。  
病院から唯一の肉親である母親の容体が悪化したと連絡を受け、自分の名を呼んでいると言われ飛び出してきた。

「母さん！」

ガララツッ！！！！

横開きのドアを勢い良く開けて少年は母親がいる病室へ入った。  
息切れをすぐさま治して、苦しそうに胸を押さえている母親の元へ駆け寄る。

「母さん、しっかりして！」

「ハア、ハア・・・」

母親は苦しそうにもしながら少年の真っ赤な左手をそっと握り、心配しないで、と小さく呟やいた。

その後に少しでも握る力を強め、右手で少年の左手に黒い手袋を付けてあげた。

「母さん？」

「誕生日、おめでとう・・・アレン・・・」

「　　っ」

手袋を付け、しっかりとボタンを閉めると少年　アレンの左手は普通の人と同じように、真っ赤ではなく肌色になっていた。だけど、そんな驚きの気持ちは一瞬で悲しみに変わった。

左手に添えられていた手がだらんと崩れ落ちるように倒れた。それは、母親が力尽きたのをアレンにわからせるには十分だった。

「　　かあ・・・さん？」

だらんと落ちた腕をアレンは掴んだ。  
しかし、腕からはさつきみたいぬくもりは失われており、酷く冷たくなっていた。

「・・・う、うあああああー！！！！！！！！」

アレンはその場で泣きだした。

12月25日。クリスマスの夜にその鳴き声は夜空へ響き渡った。

## プロローグ（後書き）

最後まで見ていただいております。ありがとうございます。

今作品は勢いとノリと気合いと根性で完結へ向けて書いていきたい  
と思っていますので応援よろしくお願いします！

次回はキャラ紹介をしたいと思います。

誤字脱字、感想もあればお願いします。

## キャラ紹介

名前：アレン・クラージ アレン・カミタ

年齢：12歳

性別：少年

容姿：白髪で紅と灰色のオッドアイ。

髪型は『D - Gray man』のアレン・ウォーカー同様

性格：基本優しい。ゲームなどの時などは腹黒くなる

レアスキル：騎士ノ剣 ナイト・アームズ

備考：左手の手の甲に赤い十字架が埋め込まれている。

発動状態は『D - Gray man』に出てくる十字架。

非発動時は左手が真っ赤に染まっていて最初のころはみんなに気持ち悪いと言われている友達が出来ていなかった原因の一つ。

騎士王のレアスキルでもある。

術式：古代ベルカ式

趣味、特技：読書、体を動かすこと、イカサマ、お金を増やすこと

好き：食べ物全部、動物

備考：本作主人公。第2騎士王の末裔。

左手が騎士王のレアスキルのせいで真っ赤に染まっており、St・ヒルデ魔法学院中等科に編入する前はこの左手のせいで友達が出来

なかったとう黒歴史がある。

誕生日は12月25日で、9歳の誕生日母親を亡くすと同時に黒い手袋を貰う。貰った黒い手袋を付けると左手が普通の人と同じになる。

レアスキルで巨大化した銀の爪は殺傷設定のオン、オフが効く。アインハルトと同じように武装形態と大人モードが使える。

デバイスは補助型の『ティムキャンピー（愛称ティム）』

小さい頃から父親が残した借金を返済するため、母親の入院費を稼ぐために博打をし始める。勝つためには何でもするのでイカサマを覚えた。普通のゲームでもよく勝ちを偽ったりもする。

最近ようやく借金返済が終わり、お金をどうしようかと考えているらしい。

外見に似合わずものすごい大食漢。

量で言うならスバルやエリオが比じゃないほど。

好きな食べ物のみたらし団子。

最近のマイブームはチェスらしい。

ICV：小林沙苗（アレン・ウォーカー、初代リインフォースなど

IC：アレン・ウォーカー（D・Gray-man

武装形態時イラスト

> i 2 7 7 9 1 — 2 0 5 4 <



名前：ユウ・カミタ

年齢：24歳

性別：女性

容姿：青と緑のオッドアイ

青みがかかった緑で長髪

性格：優しく、心配性でちょっとだけ過保護

アレンにはちょっと厳しいが母親のように優しい

術式：古代ベルカ式

趣味、特技：料理、教導、読書

好き：アレン、休日に思いっきり寝ること

備考：アレンの保護者代わりで教導隊所属の管理局員で第1騎士王末裔。

なのはと同じ教導隊で階級も同じく一等空尉。スバルとティアナとも知り合い。

アレンが9歳のころに出逢い、天涯孤独と言う事を知り引き取り、それから3年間共に生活を送ってきた。後にアレンを正式に養子として引き取り母親となる。

少しばかり古代ベルカの事についての知識もあり、アレンに昔の事を話すこともあったりする。

デバイスはインテリジェントデバイスで脚部装着型。

空中戦、陸戦、水上戦共に難なくこなせ、本気でリミッター無しの

なのはと戦って勝ったことがあるほどの実力の持ち主。  
アレンの師匠でもあり、アレンの良き理解者でもある。  
好きな食べ物はイチゴのショートケーキとチーズケーキ。  
最近のマイブームはアレンを愛でることらしい。

ICV：伊藤静（リナリー・リー、桂ヒナギク、オットー&ディー  
ド他

IC：リナリー・リー（D・Gray-man

## キャラ紹介（後書き）

アレン君左手は『神ノ道化』ではありませんよ？  
初期のころのあのおっきな手ですからね。

それと騎士王とかの設定をちょこつと。

- ・ 騎士王は数人いた。
- ・ 第2騎士王のレアスキルは人体の武器化がメイン。
- ・ 第2騎士王は聖王と霸王の2人ともつとも縁がある。

こんなもんですかね。

追加とかが有ればその都度言いたいと思っています。

というわけで次回から本編開始！

誤字脱字、感想あればお願いします。

## 第01話 3人の王（前書き）

第01話です！

今回はいきなりアインハルトとヴィヴィオと出逢います！

## 第01話 3人の王

「ハッ！セイツ！ハア！」

ある日の夜。

ミッドチルダ、公共魔法練習場。

そこで白髪で左手が巨大な銀の爪を振っている黒と白の服を身にまとった少年は鍛錬に明け暮れていた。

「？　なんだ、この感じ・・・」

魔力反応ではない何か。

少年は何かを感じ取ったのだ。

何かはわからなかった。

だけど自分はこれを知っている。

「クラウン・クロス  
神ノ十字架　解除」

バリアジャケットらしき黒い服を消し、巨大な銀の爪を戻してから真っ赤になっている左手に黒い手袋を付けた。

赤かった左手は手袋を付けたと同時に普通の人と同じようになる。

少し握ったりひらいたりを繰り返し、異常がない事を確かめてから少年は感じ取ったものの方へ向けて走り出した。

「大丈夫ですか！？」

「うう・・・」

「今、警察とか呼びますから

っ!？」

現場へ着いた時には、1人の格闘家らしき男性が倒れていた。目立った外傷はみられないが、一応念のために警察を呼ぼうとする。だがそんな彼の眼に1人の少女が映った。

「君は・・・」

「・・・」

バイザーを付けた碧銀の髪を持つ少女は、その髪を揺らしながら背を向けて何処かへ行ってしまった。

少年はただその背中を見つめ続けるしか出来なかった。

side out

「ナカジマ陸曹」

「はい？」

「昨晚、最近の連続襲撃事件の容疑者と思われる少年を確保したので、事情聴取をお願いしたいと思ひまして」

「わかりました」

陸士108部隊。

そこに所属するギンガは事情聴取の依頼をされていた。

事件、と言っではいるがまだ被害届が出ていないので事件ではないらしい。それでも物騒でもあるので調べてはいたようだ。

「失礼します」

「ああ、ナカジマ陸曹」

「えっと、この子が容疑者の疑いがある子ですか？」

「はい。名前はアレン・クラージ、12歳。St・ヒルデ魔法学院中等科に編入を明日に控えていて、昨晚駆け付けた時には変身魔法で大人の姿になっていた彼がいました。それと・・・」

資料を読み上げていた隊員とギンガがアレンへ目を向ける。特に問題はなさそうだが、何があるのだろうか。

「ちょ、やめて下さい！これだけは本当にやめてください！」

左手につけている黒い手袋を外そうとするものすごく否定する。絶対にとらないぞといわんばかりに右手で押さえている。

「あのように、左手の手袋を取らないんですよ。少し怪しいんですがどうでしょう」

「わかりました。後は任せてください」

「お願いします」

ギンガにその場を任せて他の隊員達はその場を後にする。

そこに残ったのはギンガとアレンだけだった。

「えっと、アレン・クラージ君でいいんだよね？」

「はい」

「その左手の手袋だけど、どうして取りたくないのかな？」

「言わなきゃダメですか・・・？」

「うーん、無理に聞こうとは思わないけど、出来るなら聞かせてほしいな」

「・・・わかりました、取ります」

ちよつと考えてからアレンは決意したようだ。

左手の手袋のボタンを外し、手から外す。

すると、さっきまで肌色だった腕が少し間をおいてから一気に真っ赤に染まった。しかも手の甲には赤い十字架が埋め込まれてもいる。言葉で言い表すなら、気持ち悪いやグロテスクがぴったりかもしれない。

「気持ち悪いでしょ。だから外したくなかったんです」

「ご、ごめんね。も、もう、付けて良いよ」

「はい」

ギンガの許しを得てようやく手袋をつけなおしたアレン。それに対してギンガは少し悪寒に襲われていた。



あんな子供の腕が真っ赤に染まっているなんて思わなかったからだろう。背中にゾクリと寒気が走っていた。

「本題に入るけど、本当に君が連続襲撃犯なの？」

「だから違いますって！そりゃ、確かにあの場所にはいましたよ。でも僕はやってませんし、連絡したのも僕です！普通犯人って自首しないもんじゃないんですか！？」

「あれ？そうなの？なら、犯人の顔は見た？」

「見てません。というか、バイザーを付けていたので見れませんでした」

「そう……。わかったわ。君はもう釈放よ」

「本当ですか！？」

「ええ、明日から学校なんですよ？」

「はい、本当にありがとうございます！」

問題ないと見たギンガは資料の下のあたりに「問題なし」と書いた。こうしてアレンは無事釈放されることとなったのだった。

s i d e o u t

その日の夜。

昨日と同じく公共魔法練習場で、アレンはまた鍛錬をしていた。

「クラウン・クロス  
神ノ十字架 発動、武装形態」

左手の手袋を外して巨大な銀の爪へと変え、バリアジャケットを身にまとう。そしていつも通り、素振りやジャブ、いろいろな通りやっていく。

やってる際には左手がブンッ！ブンッ！と風を切る音がしていた。

（あの感じ、僕に縁のある王の末裔たちが近くに居る時に感じるものだった。だからきつと彼女も王なんだ）

昨晚出逢ったあの少女。

碧銀の髪を揺らして、何処かへ行ってしまったがまたいつか会える気がしてならないアレンだった。

「！ また、この感じは」

再び、昨日と同じように感じ取った。

武装形態のまま辺りをきょろきょろと見回し、見つけた。

緑と紅のオッドアイの少女。

アレンの記憶が正しければ、それはまさしく聖王の証だ。

「あ、こんばんは」

「こ、こんばんは」

最近、王の末裔達によく会うなあ。  
そつ心の中で呟いたアレンだった。

## 第01話 3人の王（後書き）

アレン君の左手、『神ノ十字架』はレアスキルで作られた武器です。  
『騎士ノ剣』で作られた武器には個々で違う名前がつくのです。

ちなみに最初に出てきた時は大人モードです。

次回はヴィヴィオとちよつとお話し。  
その後にアインハルトと出逢います。

誤字脱字、感想あればお願いします。

## 第02話 聖王と霸王と騎士王と（前書き）

アレン君の武装形態時イラストをキャラ紹介に追加しました！

## 第02話 聖王と霸王と騎士王と

「え、えつと・・・」

目の前にいるのは、緑と紅のオッドアイの少女。

僕の記憶が正しければ、彼女は聖王の末裔なのかもしれない。

ちなみに、彼女は僕の左手を凝視している。

そりゃ、確かに珍しいし興味がわくかもしれないけど、どうしたらいいのかなあ・・・。

「左手、すつごいですね」

「え、あ、ああ。レアスキルだから」

銀の爪となっている左手を凝視していた彼女はようやく口を開いた。これ、解除してもいいのかな。なんかすつごく微妙なんだけど。

「クラウン・クロス  
神ノ十字架 解除」

とりあえず、解除して真つ赤な手を即座に隠す。

たぶん見られたと思うけど、出来るだけ見せないように下からいいだろう。最速で手袋を付けて色を戻す。

「武装形態解除」

武装形態を解除してバリアジャケットも消す。

子供の姿になったから僕の方が目線が低くなってしまった。

「じゃあ、僕はこれで」

「あ、待って！」

「？」

彼女に呼び止められ、足を止めた。

何かと思い振り返ると、彼女は僕と同じ目線でたっていた。ってあれ？小さくなった？

「私、高町ヴィヴィオ。えっと・・・」

「・・・アレン。アレン・クラージ」

「アレン君、また今度ね」

「うん。じゃ、お休み」

ヴィヴィオに別れを告げてその場を後にした僕だった。

side out

翌日。

朝に目が覚めたら時間はもう8時を回っていた。

今僕は全力疾走で編入先の学校へ向けて走っていた。

「ハア、ハア、ハア・・・ん、はあ」

なんとかギリギリセーフ。

教室の前で待機と言われたので息を整えながら待つ。

『クラージ君、どうぞー』

「はい」

横開きのドアをガララと音を立てながら開け、前の方まで歩いて行く。こういう時は最初が肝心なんだ。笑顔だ笑顔。

「アレン・クラージです。みなさんと1日でも早く仲良くなれたらいいと思っていますので、よろしく願いします」

「クラージ君は、一番後ろの席。ストラトスさんの横に座って下さい」

「わかりました」

自分に指定された席へ向かい、机の横に荷物をかけてから座る。隣には、つい先日みた碧銀の髪と同じ色の髪を揺らした僕と同じオッドアイの少女がいた。名前は確か、ストラトスって言うだけだったぶん名字だろう。

「アレン・クラージです。よろしく」

「アインハルト・ストラトスです。よろしくおねがいします」

本名はアインハルトらしい。

それにしても何処かで会った事があるように見えるのは気のせいかな？気のせいだよな。

「つかぬ事をお聞きますが、騎士王の末裔の方ですか？」

「え？ああ、よくわかったね。僕は第2騎士王の末裔だよ。どうしてわかったの？」

「いえ、ただ記憶の中に白髪で灰色と紅のオッドアイは騎士王だと言うのを覚えていまして」

「へー、そうなんだ。もしかしてベルカの歴史とか詳しいの？」

「そこまで詳しくはありませんが、知っている分には知っています」

「そっか。じゃ、改めてよろしく、アインハルト」

「よろしくおねがいします」

また新しい友達が増えた。

今日はそれだけで十分に嬉しかった。

side out

無限書庫。

次元世界のあらゆる情報がそこにある。

中には古代ベルカの事もあったりする。

今日、僕はこの前会った碧銀の少女の事について調べるために来た。



「えっと、古代ベルカ戦争の文献とかは・・・あ、あった」

それらしき本を見つけ手に取る。  
ペラペラとめくり、これが探していたものだと思われる。とゆっくり見始めた。

「碧銀の髪を持つこの人は・・・霸王？隣に居るのは、女性だけど、僕と同じ髪と目の色をしている。もしかして、霸王と第2騎士王は親しかったのかな？」

ぶつぶつと独り言を喋りながらいろいろと考える。

今のところわかっていている事は、霸王と第2騎士王、そして聖王は歴代の王の中でも最も親しかったらしいこと。

そして、霸王と第2騎士王は主従の関係。戦場では彼らのコンビネーションに敵う者はいなかったそう。

「・・・霸王と、戦ってみたい。この左手が、僕の力がどこまで通じるか試してみたい」

ふと思った事を口にしてしまった。

それに、彼女を見たときに心のどこかで思ってしまったのかもしれない。彼女と話がしてみたい、お互いにわかり合ってみたいと。

「アレン君？」

「？ あ、ヴィヴィオ」

呼ばれて振り向けばそこには昨晚出逢った聖王、ヴィヴィオがいた。

## 第02話 聖王と霸王と騎士王と（後書き）

次回はついにアレックスアインハルト！  
一体勝つのはどちらだ！

誤字脱字、感想あればお願いします。

### 第03話 2人の騎士王（前書き）

今回は初挿入絵を入れました！

え？どうせへたくそじゃないかって？

そうですよ！へたくそですよ！でも、描きたかったからいいんです！

### 第03話 2人の騎士王

「ヴィヴィオ達も同じ学校だったんだ」

僕は今、無限書庫に居る。

そこで昨晚出逢ったヴィヴィオと、その友達のリオとコロナの3人と話をしていた。

まさか同じ学校とは気がつかなかった。  
初等科4年生だっけ？

「アレン君は何の本見てたの？」

「僕は古代ベルカ関連のものだよ。気になることがいくつかあってね」

「そっか。アレン君ってそう言うの好きなの？」

「好きって言うか興味はある、かな」

頭をポリポリ掻きながらちよつと誤魔化す。  
興味があるじゃなくて、戦ってみたいだからね。

「あ、もう時間だ。じゃ、また今度ね」

「うん、じゃあね」

side out

「お、来た来た」

住宅地の中の一軒家。

そこに住む女性は、玄関のドアにつけたベルが鳴ったことで同居人が帰ってきた事に気づく。

すぐさま立ちあがり、ちょっと小走りで玄関まで行き同居人へ飛びついた。

「おっ帰り〜、アレンくん」

「うわっ!？」

ドシャツ!!

ものすごい音を立てながら、女性とアレンは玄関で倒れた。  
正確には女性がアレンを押し倒した、だが。

「ちょ、ユウさん、重いです・・・」

「む？女性にそんなこと言ってもいいのかな？アレン君」

押し倒された状態でアレンは女性　ユウ・カミタに向かって呟いた。それを聞き逃さず、ユウはさらに力を入れて体重を掛ける。

「うあああ!!ごめんなさい!ごめんなさい!嘘です!冗談です!」

「ホントかな？」

「本当です!」

「嘘だね」

「気のせいです!」

必死で退いてもらおうと近所迷惑にならない程度に叫ぶ。

しばらく同じことを繰り返していると、ようやく諦めてくれたか、ユウはアレンの上から離れすくつと立ち上がった。

「で、なんだっけ?」

ぶちっ!!!

アレンの頭の中で何かがキレる音がした。

だがアレンもそこまでバカじゃない。どうせ向かったって敵わないんだからと思いとどまる。

「霸王の事についていろいろ聞きたいです」

「という事は霸王とあったんだね。第1騎士王の末裔である私の予想は大当たりだ」

「わかりましたから、早く教えてください」

「はいはい。中でお茶でも飲みながらゆっくりお話ししよう」

そう言いながらリビングへ向かうユウ。

正直、アレンはお茶とかどうでもいいから早く知りたいと言う本心があったが、やはり逆らっても敵わないので言葉にはしなかった。

リビングへ入るとそこは普通に、いやすごくきれいな部屋だった。特別何かが施されてるわけでもなく、彼女の綺麗好きのせいでこん

なにかきれいな屋へになっているのだ。

自分も住んでいるが、やはりきれいすぎて落ちつかないと言つのがアレンの心の声だ。

「どうせ無限書庫行つたけど、まともな情報得られなかったから来たんでしょ」

「正解です。まあ、霸王と第2騎士王の関係ぐらいはわかりましたけど」

「はい、ココア」

「ありがとうございます」

「なら、どこから話そうかな。とりわけ、そこまで重要ってわけじゃないでしょ?」

「いや、でも、その……。思っちゃったんですよ」

「何を?」

「霸王と僕の力、どちらが強いかな。霸王と戦って、話して、わかり合いたいって」

「つまりは戦ってみたくて友達になりたいって事だね」

「ずずと音を立てながらコーヒーを飲むユウに対し、アレンは静かに自分の思いを打ち明けた。

ユウはアレンの事をよく知っていた、というより保護者代わりだから別に何かを言うわけではなかった。だからこそ、静かに見守って

あげようと思っていた。

「明日の夜、仕掛けてきてもいいですか？」

「うーん、それはアレン君の勝手だけど、絶対に他の人へ迷惑かけちゃダメだよ？」

「ありがとうございます」

「ところで、話は変わるけど今晚何食べたい？」

「・・・」

「遠慮しないでって、毎日言ってるでしょ」

「な、なら、オムライスとハンバーグとチキンとサラダとスパゲツ  
ティと            e t c e t c            が食べたいです」

「なら、買い物行こうか」

「はい」

2人で買い物に出かけ、その日は特に何もなく終わりを告げた。

s i d e o u t

翌日。

休日であるため今日はアレンが朝の食事当番だった。



ユウは朝にめっぼう弱い。

頭痛がするーとか、お腹が痛いーとかではなく、何でか朝に弱い。

きつと頭の中が整理できていないんだろう。

頭の中にいろいろと情報がダウンロードされてきて、だいたい10時ぐらいでまともになるぐらいだ。

「ユウさん、起きて下さい。朝ですよ」

「うう・・・まだ、寝る・・・」

「朝食出来てますから。覚めちゃいますよ」

「や・・・」

「ええ、でも　　うわっ」

寝返りを打とうとしたユウの手を掴んでいたアレンはそのまま遠心力でユウの横へ転がりこんでしまった。

目の前にはユウの寝顔。別に毎日一緒に寝ているから見慣れてはいるけど、朝と夜では何かが違った。

だが、そんな彼女をいち早く起こしたアレンはすぐさまベッドから降りて再びユウの体をゆする。

「スー、スー」

「あ、また寝ちゃった」

はあ、とため息をつきながら1人朝食を済ませようとリビングへ戻

るアレン。

1人庭で鍛錬をしていて、ユウが完璧に目覚めたのは遅めの12時ごろのことだった。

side out

その日の夜。

アレンは武装形態ではないが、大人モードで夜道を歩いていた。

目的は霸王を見つけ出すことと、霸王と戦うこと。

見つかるかどうかはわからないけど、会える気がする。

ただそれだけの理由で探し回っていた。

「っ、こっちか」

先日感じたものと同じものを感じ取れた。

そちらの方へ少し早足で向かうと、目的の人物　霸王がいた。

不意打ちを仕掛けるつもりはない。

堂々と正面から仕掛けるつもりで、武装形態となり神ノ十字架を発動させながら歩み寄る。

「ストライクアーツ有段者、ノーヴェ・ナカジマさんとお見受け

「こんばんは、霸王」　っ

「誰だ、お前」

「初めましてじゃありませんよね」

$$\begin{array}{r}
 > \\
 & i \\
 & 2 \\
 & 7 \\
 & 8 \\
 & 7 \\
 & 7 \\
 \hline
 & 2 \\
 & 0 \\
 & 5 \\
 & 4 \\
 <
 \end{array}$$

## 第03話 2人の騎士王（後書き）

次回こそアレンvsアインハルト。  
挿入絵もあります。

ちなみにユウの名字『カミタ』は神田<sup>かんだ</sup>をちょっとだけでもじってみただけです。

誤字脱字、感想あればお願いします。

## 第04話 天に立つ霸王 地に伏せる騎士王

「こんばんは、霸王。始めましてじゃ、ありませんよね」

「あなたは・・・」

「僕のはグレイヴ・A・C・アーサー。第2騎士王末裔、アレン・クラージです。霸王、イングヴァルト」

「おい、ちょっと待てよ」

すっかりやる気満々になっていたが、隣に居る女性によって止められた。一瞬いたのかわからなかったが、思い返してみればいたのでそれでよしとする。

「なんか2人してやる気満々みたいだけど、アタシをおいて話を進めてもらっちゃ困るぜ？」

「あゝ、で？なんですか？」

「だから、お前ら何なんだよ！」

「だからさっき言ったじゃないですか。僕は第2騎士王末裔のアレン・クラージだって」

「目的は？」

「あ、そうだった。霸王、単刀直入に言わせてもらいます。僕と手合わせをお願いしてもよろしいですか？」

「・・・わかりました。その勝負、お受けしましょう」

「おいおい、だから勝手に話を進める　「すいません」　がつ  
!？」

ちよつとうるさかったから殴って気絶させた。

本人いわく、軽くやったから大丈夫なはず、だそつだ。

「これで、心おきなくやれますよね？」

「はい」

「では　行きます！」

風を切る音とともに、霸王へと走り出すアレン。  
それに対し霸王は構え、迎え撃つ。

まずは横薙ぎの一撃。  
それを空中へ飛び、軽くかわす霸王だがアレンは焦らずさらなる追撃を仕掛ける。

大振りな左腕の攻撃をかわしきつた霸王は、すぐさま着地してアレンの腹部へ渾身の一撃を叩きこんだ。

「ぐっ、がはっ・・・!!」

腹部への痛みを我慢しつつ、追撃に備えるために左腕を巨大化させガードできる状態にし後ろへと退きながら距離を取る。

> i 2 7 8 7 8 — 2 0 5 4 <

「ぐ、う……」

「あなたでは、私には勝てません」

「……ふう、こんなんじや負けませんよ。いくら勝てそうにない相手でも、絶対に諦めるなが師匠の教えですから」

息を整え、再び構えなおすアレン。

一瞬強制解除された神ノ十字架を再び発動させ、爪を霸王へ向けた。

「今度は本気でいきますよ。この怪力と音速を誇る 神ノ十字架の力を見せてあげます」

「いつでも、どうぞ」

「……クロス」

「っ!？」

左手を掲げ、次の瞬間アレンが姿を消した。

霸王はすぐさまアレンを見つけるが時はすでに遅かった。

「グレイヴ!!!」

横薙ぎと振り下ろしの二つの攻撃を同時に浴びせるクロス・グレイヴ。今のアレンにとって最強の一撃はクリーンヒットした。

クリーンヒットしたはずだった。

「え!?!」

体が動かなかった。

左腕に絡みついた魔力のチェーンを見てすぐにバインドだとわかる。

「(う、嘘だ……。ま、まさかカウンターバインド……。?こんな捨て身であんなの、一歩間違えてたら死んでたのに……。!?)」

「今度は、こちらの番です。霸王」

右手を上げ、全身の力を込めて最大の一撃を繰り出す。

「断空拳」

「ぐうあ……。!!!!あ……。さ、さすが……。良い拳、です……」

「

霸王の一撃をくらい、全身から力が抜ける。

そしてその言葉を最後にアレンは意識を手放した。

side out

翌日。

アインハルトは1人目を覚ました。

だがいつもとは違う部屋だったので少し驚いている。

さらに、横には見覚えがある少年が寝ているが少し様子がおかしい。



左手の方から下が真っ赤になっていた。  
しかもつなぎ目みたいな部分が見られ、一瞬気持ち悪くなってしまった。

「起きたみたいだな」

「あ、あの・・・その、ここは・・・」

アインハルトが起きたのを確認した女性　ノーヴェは呼んでいた本にしおりをはさみ、おどおどとしているアインハルトに近づく。

「う・・・あ・・・」

「お、こつちもかつて、なんかおかしくないか？」

「うう・・・！あ、ああ・・・！」

アインハルトの横で寝ている少年　アレンは汗に大量の汗を流しながらうめきだした。顔色が悪いのはみてわかるが、それが異常だった。しかも左目からは血が流れ出していた。

これを見て完璧に危険な状態だと確定したノーヴェはすぐさま知り合いを呼ぶためにその部屋を後にする。

だが、次の瞬間

「うあああああああ！！！！！！！！！！」

「何！？どうしたの！？」

「ああ、スバル！なんかアレンがうめきだして！」

「と、とりあえず抑えなきゃ!」

暴れ出す前に止めようと、ノーヴェの姉であるスバルがアレンの両腕を掴みベッドに押さえつけるようにして抑える。

ベッドの上で暴れ、叫んでいるアレンは手を強く握りすぎ、その手からは血がにじみ出していた。目を開いてはいるが、スバルは目に入っ  
つてはいないだろう。

「うう!うう!うああああ!!!!」

「大丈夫、大丈夫だから!私達は、敵じゃないから!」

「て・・・き?」

「スバル、危ない!」

無意識の内に発動させた神ノ十字架でスバルを背中から引き裂こう  
としていたアレン。

ギリギリのタイミングで、スバルの親友ティアナが銃型デバイスク  
ロスマイージュでアレンの左手を撃った。ダメージを受けたこと  
により神ノ十字架は強制解除されてしまう。

「あ、あ、ああ・・・あ・・・」

意識の紐が切れ、アレンは血の涙を流したまま再び眠りに落ちた。

**第04話 天に立つ霸王 地に伏せる騎士王（後書き）**

次回はまだ未定。

誤字脱字、感想あればお願いします。

## 第05話 第1騎士王の思い

目が覚めたアレンが一番最初にとった行動は全力での土下座だった。

1にノーヴェを殴って気絶させたこと。

2に路上でのアインハルトとのバトル。

3に暴れ出したこと。

その3つをふまえて全力の土下座で謝った。

「本当にすみません」

「アレンが暴れ出しちゃったのはしょうがないよ」

「でも、路上での喧嘩は頂けないわね」

数年前に事故にまぎれて死のうとしていたアレンを助けた防災士長スバルと、その親友の本局執務官ティアナ。

そしてスバルの妹であるノーヴェと、クラスメイトで自称霸王を名乗っていたアインハルト。

計5人で朝食を取りながらもアレンは未だに謝っていた。

「思ってたんだがなんで暴れ出したんだ？」

「えっと、神ノ十字架が僕の体に馴染もうとするからこうなるんですよ。まだ完璧に使いこなせてるわけじゃないんで、当然痛みが来ちゃうわけで。その痛みが尋常じゃない程痛いんで不安になってあんなっちゃうんです」

「なるほど」

ノーヴェの質問に出来る限り丁寧に答えるアレク。まとめると、神ノ十字架が馴染もうとすると体が痛くなって、その痛みが不安を呼んで暴れてしまうと言ったことだ。

「あ！」

「どうしたの？」

「ユウさんに連絡してない・・・」

「え？」

「やばいな、今日帰ったら殺されるんじゃないかな・・・？」

「大丈夫。ユウさんには私から連絡しといたから」

「ティアさん・・・」

アレクの眼にはティアナが女神のように見えた。アレクのあの怯え様から見てユウは怒ると怖い。

本当の母親のように怒ってくれる辺りは心配してくれているのだが、怒った時の静かさが怖いのだ。

通常であれば怒鳴るなどと言ったように騒がしくなるのだがユウは違う。騒がしくなる所が静かになり、アレクの修行のメニューを5倍だったり10倍にだったりする。

さらにはそれに説教を数時間程を正座させられたまま聞かされるからアレクはユウを怒らせるようなことはしないのだ。

だからこそ、アレンの窮地を救ったティアナはまさしく女神だったのだ。

「とりあえず、食べ終わったら近くの署に行きましょう。まだ被害届が出てないみたいだし。もう路上で喧嘩しないって約束したらすぐ帰してくれると思うから」

「食い終わるのにすごい時間かかると思うけどな」

「大丈夫。アレンはその数倍の量を１０分で食べきるから」

「はい」

「マジか！」

side out

「た、ただいま帰りました・・・」

その日の夜。

家に帰ったアレンは恐る恐るユウの元へ向かった。

「お帰り、アレン」

そこにはめちやくちや笑顔なユウがいた。  
怒っている様子がないからはあと肩の荷を下ろすアレン。

（あれ？さっきアレンって・・・いつもは君付けなのに・・・）

ふと思つた疑問。

だがそんなことはどうでもよくなるぐらいの殺気をアレンは感じ取つた。

その殺気を放つていたのはもちろんユウだ。  
笑顔なのは良いのだが、後ろの方に黒いオーラが見える。

だけどそんな黒いオーラと殺気から一転。  
突然アレンはぎゅっと抱きしめられた。

「???? ユ、ユウさん？」

「まあ、心配したんだからね！ティアナから連絡貰ったけど、昨日帰ってこなかった時にはもしかしたら何か大変なことに巻き込まれてるんじゃないかって思ってたんだから！！」

「・・・ごめんなさい」

涙を流しながら、さらに抱く力を強めるユウ。

今のユウは今までに見たことがないくらいアレンを心配していて、まさしく本当の母親のように見えた。

アレンも自分が悪かったと思つているところもあり、正直に謝ったがどうしたらいいかわからなかった。

「ユウさん、ちょっと苦しいです・・・」

「ダメ。もう少しだけこうさせて」

「・・・はい」

きつと、寂しかったんだ。

そう思いながらアレンはユウに抱きしめられていた。

（数分後）

ようやく離れてくれたユウの眼はちょっと赤くなっていた。涙を流していたからだろう。

でもそんなことは気にならず、アレンは少し反省しながら俯いていた。

「そうそう、ちょっと大切な話がしたいんだけどいい？」

「は、はい」

「もう気にしないでいいよ。私的にはアレンが無事で何よりだから」

「本当に、怒ってませんか？」

「それ以上気にするなら、本当に怒るわよ？」

「いえ、それならいいんです。それなら」

ユウの言うことには逆らわず。

アレンは素直に気にせず、だけど心の中では反省していた。

「私とアレンと一緒に暮らし始めてもう3年になるわよね」

「えっと、そうですね」



「だから、そろそろアレンを養子として引き取ろうかなって。保護者としてじゃなく、親として」

「え・・・」

正直、驚きしかなかった。

今まで一緒に住んでいて、母親のようだなあとは思った事はあった。保護者代わりになってくれた時も、本当にうれしかった。

それでも、ユウを母親としては見れなかった。

母親がいると、また失いそうで怖かった。

前の母と同じように、ユウを失いたくはなかった。

その思いからアレンはユウとは一線をおいて、敬語を使い、敬いながら一緒に生活を送ってきた。

「アレンがイヤなら、今のままでもいいよ。でも出来るならOKしてほしいかな」

「・・・ユウさんの事は大好きですよ。僕に優しくしてくれて、心配してくれて。本当に母親みたいで」

「じゃあ　「でも」　？」

「でも、失うのが怖いです。前に母さんを失ったみたいに、ユウさんを失うのが」

大好きだからこそ、戸惑ってる理由をアレンは打ち明けた。

ユウが自分を大切に思ってくれているのはわかるけど、大切に思っ

てくれるから戸惑ってしまうのだ。

「・・・大丈夫。私は何処かに行ったりしないから。ずっと家でアレンの事を待っててあげるから」

「・・・」

「それじゃあ、ダメかな？」

「・・・いいえ、もう最高です。」 母さん」

その時、ユウは思いつきりの愛情をこめてアレンを抱きしめたのだ。  
った。

## 第05話 第1騎士王の思い（後書き）

ユウさんとアレン君の出会いにはスバルさんがアレン君を助けた時です。

その時にユウさんが引き取る形で共同生活が始まりました。

次回はまだまだ未定。

誤字脱字、感想あればお願いします。

それと今更なのですがヒロインはアインハルトです。

## 第06話 騎士王と騎士（前書き）

今回はオリキャラが登場！  
男ですよ？

ちなみに今更ながらサブタイトルに絶対に「王」という字を入れています。

アレン 騎士王or第2騎士王

ユウ 騎士王or第1騎士王

ヴィヴィオ 聖王

アインハルト 霸王

みたいな感じです。

あと「王」だけなら上記の誰かと言っ事になります。

## 第06話 騎士王と騎士

「ふあゝ、んゝゝ。今日は仕事かぁ・・・」

早朝、体を起こして伸ばして体を起こすユウ。

通常日のユウの朝は休日と違い結構速い方だ。

金曜と土日を除いた日はほぼ毎日早起きして朝食を作り、アレンを起こすのがユウの毎朝だ。

「んう・・・母さん・・・」

「ふつ、相変わらず服の裾を握りながらじゃないと寝れないところとかは可愛いわね」

未だに寝ているアレンはユウの服の裾を掴んでいた。

出逢ったところ、不安そうにしていたアレンを安心させるためにユウは毎日一緒に寝てあげていた。

それが何でか今まで続いている、ユウの中で『アレンは寂しがり屋』という印象がついてしまった。

だが意外とそれが可愛いと思えるらしい。

「んうう・・・」

「ふふふ」

アレンの手を放し、ベッドから出るユウ。

掴んでいたものが無くなり、ちょっと不安になったアレンは軽く手を動かしてユウを探すがない。

その日の朝はいつもと変わらず、ちょっとさびしく始まった。

side out

「おはようございます、ユウさん・・・」

「おはよう、アレン」

寝巻きのまま目をこすり、リビングに入ってくるアレン。  
朝で寝ぼけてるためか、話し方が敬語になりユウの事を『母さん』  
ではなく名前で呼んでいる。

「お腹すきました・・・」

「ご飯出来てるよ。でもその前に顔洗ってきたら？」

「はい・・・」

洗面所に行き、冷水で顔を洗う。

さっきまで寝ぼけていた頭は目覚め、髪の毛についた寝癖を軽く治して行く。

自室に戻り制服に着替えてから、改めてリビングへ入る。

「いただきます！」

「召し上がれ」

超特盛りに盛られた朝食にがつつくアレן。  
スバルが食べる量の数倍の量のそれは、見る見るうちに量を減らして行く。

食欲旺盛、それだけでは済まないかもしれない。

それを食べているアレןをユウは笑顔で見守っていた。

「そう言えば昨日は何回やったの？」

「んぐ、500回。おかげで右手が悲鳴を上げてるよ」

「そんなに。無理はダメって言ったでしょ」

「母さん、限界にチャレンジはどうしたの・・・」

「訓練とかよりもアレןの方が大切なの」

「ありがとう。ごちそうさま！行ってきますー！」

「行つてらっしゃい」

バッグを持ち外へ出る。

学校へ向けて走り出すアレןはいつにもまして笑顔だった。

side out

「放課後、と言つかこの後ノーヴェさんとこ行くんでしょ？」

「はい。ノーヴェさんが格闘技をやっている友人を紹介してくれるそうです。たぶんその人が聖王なのでしょう」

「僕も一緒に行っていていい？その聖王の子と友達だからさ」

「そうなのですか？」

「うん」

この前の路上バトルの一件からアレンとアインハルトはそこそこ、いや結構仲が良くなっていた。

休み時間に話す、授業中に何か聞く、一緒に昼食をとるなどといった行動をよくするためクラスの一部から『あの2人って付き合ってるの？』的な噂が流れでしりもしっていた。

一緒に居ることが多く、さながら大昔の古代ベルカ時代の霸王と第2騎士王のようにも見えた。

「じゃ、行こうか」

「はい」

2人並んだまま廊下を歩く。  
ちよつとの会話しかないが、それだけでも十分仲がいいように見えた。

side out



「あの、アレンさん」

「んむ？はみ？（何？）」

紙袋一杯に詰まったパンを持ち、口に一つ入れていたアレンにアインハルトは問いかけた。

まあ、当然の疑問と言えばそうなるだろう。

「それは、少し食べ過ぎなのでは・・・？」

「んぐ。そうかな？僕的には少ないと思うんだけど」

「ええ！？すごい量を食べるんですね」

「うん。腹が減ってはなんとやらってヤツかな？あーむ。うん、旨い」

笑顔でまた一つパンを口に入れるアレン。

そんな笑顔のアレンを見ていてアインハルトは少し考えていた。

（何ででしょう。何で私は彼がそんなに気になるのでしょうか。それにもっと話していたいけど、会話が・・・）

アレンの趣味とかがわからないから会話が続かな。

それに仲が良くなったと言ってもなんだかまだどぎまぎしてしまう。

気になる＝好きなのかもしれない。

アインハルトは頭の中でそう考えるが、どういうのが好きと言う事なのかよく判らない。

そんなことを考えているとアレンが声を出した。

「あ、いたいた。おーい、スバルさん！」

「アレン！それにアインハルトも！」

「アインハルトがノーヴェさん達のところ行くなって言ってたから、僕も同行しました。あ、食べます？」

「食べる食べる！ここのパン屋美味しいよね」

「おいお前ら、食べてないでこっち混ざれよ」

「あ、そだった。ごめんごめん」

ノーヴェの声でスバルとアレンは自分たちの世界（軽い食事）から抜け出してくる。

ヴィヴィオとアインハルトはもうすでにお互いの挨拶を済ませていたみたいだ。

「アレン君、久しぶり」

「久しぶりだね、ヴィヴィオ。久しぶりだっけ？」

「1週間ぶり〜」

「あれ？そんな？僕の中では数日前だったんだけどな」

「ヴィヴィオ、そいつ誰だよ」

アレンとヴィヴィオの会話に入ってくる少年。

ヴィヴィオの友達らしいが、アレンはまだ一度も会ったことがなく、誰かはわからなかった。

そこでちよつと困り気味なアレンを見て、ヴィヴィオがその少年をアレンに紹介した。

「アレン君はまだ会ってなかったよね。私の友達のジャン君だよ」

「ジャン・イナトだ」

「僕は第2騎士王末裔のアレン・クラール じゃなくて、アレン・カミタ。よろしく」

「ん」

右手を差し出し、握手を求めるアレン。

一瞬睨まれたような気がしたが、ジャンはすぐに握手してきた。

アレンより少し背の低いジャンは見上げるようにしてアレンを見ている。その目は若干だが敵意が混ざっていた。

## 第06話 騎士王と騎士（後書き）

今回出てきたジャン君は敵じゃないです。

ただ最初の方はアレンの事を敵対視しています。

理由はまあ、その内。

ちなみにタイトルの「騎士」はジャン君の事を指しています。

誤字脱字、感想あればお願いします。

## 第07話 悩む騎士王と奇妙な従者（前書き）

キャラ紹介にユウさんの欄を追加しました！  
それと今回は挿入絵あります。

## 第07話 悩む騎士王と奇妙な従者

アレンとジャンが挨拶を交わした後、全員は区民センターへ向かった。その中のスポーツコートでスパリングをするのだろう。

ちなみに何故かジャンは先ほどからアレンに敵意を向けている。

アレン自身は何でこんなに敵意を向けられるかわからないが、最初は警戒されてもおかしくないかと1人納得していた。

「んじゃ、スパリング4分、1ラウンド。射砲撃とバインドはなしの格闘オンリーな。レディー・ゴー！」

お互いに構え、そして合図と同時に動き出した。

ヴィヴィオは攻撃の連打を繰り出し、アインハルトへ反撃をさせようとしないうとしない。

対するアインハルトは受け止め、流す。

ヴィヴィオの出方を見て反撃をする気なのだろう。

長く続くと予想が出来た試合だが、決着はすぐ付いた。

ヴィヴィオの猛攻の中、一瞬だけできた隙をつきアインハルトは渾身の一撃を繰り出す。

その攻撃をもろに受けたヴィヴィオは後ろ側へ飛ばされてしまう。

「大丈夫？ヴィヴィオ」

「ア、アレン君、ありがとう」

オットーとデードが受け止めに入る前にアレンはすぐに動き出し

てヴィヴィオを受け止めた。  
ヴィヴィオが無事なのを確認すると、アインハルトは背を向けてしまった。

「お手合わせ、ありがとうございました」

『!?!』

それは終わりの言葉。

その場に居る全員、いやアレン以外が驚く。

すぐさまヴィヴィオは謝った。

何か失礼なことをした、気を悪くさせてしまったと思ったのだ。

だがアインハルトはそんなことじゃなかった。

この子は自分が戦うべき『王』じゃない。

自分とは違うから、もういいと思った。

「（主の間違いは従者が正せ……か。僕にはまだ無理かもしれないな。でも）アインハルト」

「はい」

「もう1回だけ、今度で良いからスパーじゃなくて練習試合としてやったら？お互い変な状態で終わるのイヤでしょ？」

「……はい」

「なら、決まり。場所は……（チラッ」

「時間と場所はこっちで指定すつから。決まったら連絡するよ」

「ありがとうございます」

こうして、ヴィヴィオとアインハルトの再選は決まった。  
アレンは上手く行って良かったと胸をなでおろしていた。

しかし、それをあまりよくないようにみている人物がいた。  
ジャンだ。アレンがああいう行動を取ったのが気に入らないみたいだ。

「じゃ、僕もこれで？　どうかした？　ジャン」

「・・・お前、むかつく」

キレそうになったアレンだが、ユウを心配させるわけにもいかず、しょうがなく諦め全く気にしてなさそうにして帰ることにした。  
だが、今の振舞い方がさらにジャンの気にさわったか、さらにジャンに嫌われることになったのはアレンは知らないだろう。

side out

「ただいまー」

「お帰り。もう少しでご飯出来るから、着替えてきたら？」

「うん、そうする」



無事帰宅したアレンを、夕食を作っている最中のユウが出迎えた。  
テーブルにはいくつか料理が出来あがっているが、アレンはつまみ  
食いせずに自室へ向かう。

鞆を机の上に置き、手袋を外してから制服を脱ぎだす。

着替えが終わると再び手袋をつけなおした。

「よし、完成！さあ、食べよう！」

「いただきます」

朝と同じように特盛り盛られた夕食にがつつくアレン。  
今日の事を少し振り返りながら食べていた。

（アインハルトは僕にとってなんだろう・・・主？いやいや、なん  
かおかしいでしょ。確かに昔のベルカ戦争時代は主従の関係だった  
よ？でも、今も同じなんて・・・）

昔の場合は逆。

霸王が男で、第2騎士王が女だった。

男が女に守られる、と言う事はおかしかったがその逆は普通だ。

なら僕がアインハルトを守るの？

全然強くもなんともないのに？

アレンはちょっと手を止めた。

アインハルトが気になるって事はどういうことだ？

まさか、好きなのか・・・？

疑問が頭をよぎる。

気になる「好きかもしれない。

そうなのかどうかわからないからどうも言えない。

ユウに相談する？

なんか言い出しづらいから言えない。

悩みは深まるばかりだった。

「アレン、どうかしたの？」

「ん？ああ、いや、なんでもないよ。ちょっと考え事」

「そ。なら、いいけど」

「ごちそうさま。じゃあ、行ってくるね」

「ああ、ちょっと待って」

「？」

「アレン、まだデバイス持っていないでしょ？」

「ま、まあ」

「だから、はい、これ」

ユウがアレンに手渡したのは黄色の羽を生やした丸いもの。第一印象では「何これ？」としか言えないがなんなのだろう。もしかするとデバイスかとアレンは考えた。

「母さん、これ何？」

「アレンのために作ってもらったデバイス『ティムキャンピー』だよ。そろそろアレンに渡してもいいかなって思ったから」

> i 2 8 6 4 2 — 2 0 5 4 <

「ティムキャンピー・・・じゃあ、愛称は『ティム』だ」

そう聞いたティムは羽をパタパタさせて喜びの表現をする。  
たぶん気に入ってくれたのだろう。  
だけどアレンはちょっと思った。

これ、何を元にしたの？  
鳥じゃあ・・・ないよね？

ティムは鳥のような羽をもっているが鳥じゃない。  
なら何なのだろうか。  
謎は深まるばかりだった。

## 第07話 悩む騎士王と奇妙な従者（後書き）

今回はアインハルトとヴィヴィオが対決！  
そしてその後アレン君対ジャン君！

誤字脱字、感想あればお願いします。

## 第08話 王と王の戦い 騎士王と騎士の戦い

「せっかくだし、バリアジャケットも新しくしちゃおうか」

ティムをアレンに渡したユウは一つ提案した。

新しいデバイスを貰ったから、どうせならバリアジャケットも新しく作ってしまおうと言うことだ。

今までアレンが武装形態時使っていたものは、アレン自身が適当に作ったものだった。

だが今回はユウがアレンのためにバリアジャケットをデザインしてくれるらしい。

「どうせ新しくするなら、いろいろ便利だといいよね・・・って、アレン？」

「・・・母さん」

「何？」

「ティムって、何を元にしたの？」

「え・・・」

「羽が生えてるけど、鳥じゃないよね。何なの？」

当然と言えば当然の疑問だった。

金色の球体に翼と尻尾が生えた生物なんてアレンはみたことも聞いたこともなかった。

そうならば当然ティムをくれたユウが元となった生物を知っているはずだ。

「ティムキャンピーは、大昔の古代ベルカ時代に居た『ゴーレム』って種の生物を元にしてね。ティムキャンピータイプは騎士王達が連絡役に良く使ってたらしいの」

「そうなんだ・・・」

「で、アレン。さっきの話なんだけど」

「え、えっと・・・なんだっけ？」

「新しいバリアジャケットを作ろうかって話」

「あ、うん。ありがとう」

「・・・何か悩んでることがあったら、ちゃんと相談してよ。私はアレンの味方だから」

「うん、わかってる。大丈夫だから、心配しないで」

そんなことを言っているがアレンの表情は上の空。考え事はたぶんアインハルトの事だろう。

ユウに言い出しづらい。誰かに相談するにも勇気がいる。そんな状態が結構続いていたのだ。

「（この事は一旦頭から外そう。今は新しいバリアジャケットの製作とかを優先しよう）初陣が楽しみだね、ティム」

s i d e o u t

1 週間後。

ヴィヴィオとアインハルトの再戦の日がやってきた。

ティムを連れて学校に行き、アインハルトと会うがいつもと変わらず、いやいつもより少ない会話で終わってしまった。

お互いがお互いの事を考えていてあんまり話しかける事が出来なかったからだ。

それに反比例するかのようにはアレンは訓練の量を増やしていた。

ティムは補助型だが微調整がまだだ。だからそこを速くなくすため、学校から帰るとユウが帰ってくるまでやり、帰ってきても続けた。

現在、2人は対戦中。

どちらが優勢と言うわけではなく、一進一退の攻防が続いていた。

「ノーヴェさん」

「ん？」

「ここ、いくら壊してもいいんですよね？」

「まあ、廃棄倉庫だからな」

「地面に穴とか空いても平気ですか？」

「たぶんな。ま、空いてもあんま気にしないだろ」

「そうですか」

攻防一体の試合が続いていた時だった。

ヴィヴィオの渾身の一撃を防いだアインハルトの反撃。

断空拳を叩きこみ、ヴィヴィオを力いっぱい吹き飛ばす。

だがそれでも防護を抜かぬよう調整をして。

ドガアアアンツッ！！！！

ヴィヴィオがものにぶつかる音が響く。

煙がたちこみ、それと同時にノーヴェが試合終了の合図をした。

「ヴィヴィオ！」

「陛下！」

デイドや他のみんながヴィヴィオを心配する。

駆け寄ろうと煙の方へ近づく。

煙が晴れると、大人モードが解除され制服姿に戻ったヴィヴィオが、巨大な銀の爪の上で背中を預けていた。

「ふう、危なかった」

駆けよらなかったアレンは左手の『神ノ十字架』を発動させ巨大化、  
そして地面の下を突き破ってヴィヴィオを受け止めていた。  
コンクリート

無事なのを確認し、発動を解除する。

だが、こんな時にもジャンはアレンを睨んでいた。

そしてアレンの元へ行き、ある事を言った。



「アレンさん、俺とやりませんか？ちよつどこならドンパチやれますし」

「え？」

「あんた、この前からすげえむかつく。だからぶつ潰してやる」

「・・・っ、いいよ、やろつか。ノーヴェさん」

「ん？なんだよ」

「僕らも、ちよつとだけやってもいいですか？時間ありますし」

「ああ、いいんじゃないか。さっきのみててやりたくなっただんたろ？」

「まあ、そんな感じです」

頭の上からパタパタと羽をはばたかせアレンの周りを飛び回るティムキャンピー。まるで初陣が嬉しそうだ。

それに対してジャンも自分のデバイスを出していた。

黒く小さな棒のような待機状態なため、機動状態がどういうのかまだ分からない。

「行くぞ、六幻」

お互いに向き合いセットアップ。

ジャンは白と赤がメインの騎士甲冑を身にまとい、黒い刀型デバ

ス『六幻』を手に持ち構える。

それに対しアレンは大人モードで、前のバリアジャケットよりも動きやすそうな身軽な黒い服に、仮面のついた白いマントを羽織る。左手を発動させ、巨大な銀の爪へと形を変えた。

「さあ、行くよティム。初陣だ」

## 第08話 王と王の戦い 騎士王と騎士の戦い（後書き）

ちょっと短めですいません。

今回出てきたアレン君の新バリアジャケットは『神ノ道化』を想像していただければわかりやすいと思います。

でも左手は巨大なまんまです。

黒くてシャープな形になるにはまだまだ先ですかね。

ジャン君のデバイス『六幻』はそのまんまです。

騎士甲冑はシグナムさんっぽい感じかな？

誤字脱字、感想あればお願いします。

## 第09話 騎士王の求むもの

「やるぞ、六幻」

『yes』

黒い刀型デバイス『六幻』

ジャンの相棒であるそれはカートリッジシステムを内蔵したタイプのデバイスだ。

カートリッジをロードし、大きく跳躍。

空中で構え、そして刀身に魔力をまとわせていく。

「六幻 災厄招来 雷衝

『一幻』！！」

空で待機したまま風を切り裂く。

残った魔力の斬撃から、無数の雷がアレンへ迫る。

だがアレンはそれに臆することなく、ただ平然としていた。目の前まで迫り、あと少しで当たる。その瞬間だった。

「な！？」

ヒュウツ・・・

一瞬だけ風を大きく斬る音が聞こえる。

アレンが左手を大きく一振りし、迫りくる無数の雷をかき消したのだ。

「僕のこの左手は怪力と音速を誇る。そんな攻撃じゃ、僕は倒せない

いよ」

「あつそ！だけどな！」

地上に降りたジャンは六幻を抜刀の構えにし、走り出す。そしてアレンの攻撃をかわし、一気に懷まで入り込んだ。

「そんな大振りの攻撃が当たるわk

」

バキッ！！

ジャンの言葉は最後までは続かなかった。

アレンの右手で思いっきり殴り飛ばされたのだ。

右手が痛かったか、ぶんぶんと手首をならすアレン。

その表情はニコニコとした笑顔だった。

「僕の右手って飾りじゃないんだよね。それと、思いっきり殴ったけど大丈夫？」

「ざけんな！真面目にやれ！」

「・・・いいよ。でもその前に聞いてもいいかな？」

「なんだよ」

「君、ヴィヴィオの事好きなの？」

「ぶっ！！？」

「あ、当りっばいね」

アレンの頭の中での予想はこうだった。  
ジャンはヴィヴィオの事が好き。

何もなんの根拠もなく、ただ勘と言うわけでない。

今までアレンがやった行動に対しての言動からしてそうだなとわかった。つまり、ジャンはヴィヴィオが気になっていて、アレンに嫉妬していたと言うわけだ。

「な、何言ってたんだお前！」

「聞きたい事はそれだけ。さあ、続きだ」

顔が赤くなってるジャンはその状態のまま六幻を構えた。

なんであいつがそんなこと知ってるんだよ！！、と心の中で叫びながらもぶちのめす気満々で迎え撃つ。

（あの子は僕と同じ騎士だ。守りたい者のために強くなる。だから僕に敵意を向けていたんだ。だけど・・・）

左手を掲げ、構える。

そして自分にとって最強の一撃を使う。

「君じゃ、騎士には程遠すぎる・・・」

一瞬でジャンの懐に入り込み、クロス・グレイヴを決める。

この一撃、正確に言えば二撃だが、これで2人の戦いは幕を下ろした。

s i d e o u t

「おつかれ。代わろうか？」

「ありがとうございます。頼んでいいですか？」

気を失っているジャンを背負い、アレンはみんなの元へ戻る。  
ジャンをスバルに頼み、アインハルトのところへ行った。

「もう大丈夫なの？」

「はい。アレンさんは・・・」

「平気平気。一発もくらってないから。な、ティム」

アレンの頭の上でティムは頷いていた。

翼を開いたり閉じたり、尻尾をアレンの頬に当てたりして、まるで  
「その通り」と言いたそうにも見えた。

それを見てアインハルトは一安心。

笑顔のアレンは頭のティムを撫でていた。

（僕は、この子を守りたい。だからもっと強くなるんだ。誰よりも  
強く）

騎士は負けてはいけない。

ましてや大切な主の前で恥をかくわけにはいかない。

だから絶対に負けないようにするために強くなるんだ。

それにアレンは自分が第2騎士王と言うこともあり、余計にそう言

う気持ちが大きくなってしまっていた。

強さだけを追い求めても何の意味もない。

それはアレン自身ももわかってはいた。

だがそれでもアレンは強くなろうとしていた。

（何だろう、左手がうずく。速く戦いたいってうずいてる）

手袋で隠している左手に埋め込まれた十字架がうずき出した。  
速く戦わせろ！

そう言っているようにもみえた。

「（ま、今はいいか）そろそろ帰ろうかな」

「え!？」

「どうしたの？」

「い、いえ、なんでも。その、お帰りになるんですか？」

「うん。あんまり帰りが遅いと母さんが心配しちゃうから」

「そ、そうなんですか」

「ごめんね。じゃ、僕はこれで」

うずく左手をおさえながらアレンはその場を後にした。

その背中をアインハルトは少し寂しそうに見つめていたのだった。



s i d e o u t

「ただいま、母さん」

「おかえり」

アレンが帰宅したのは夕方だった。

少しばかり寄り道しながらだったので当然と言えば当然だ。

だがユウはアレンが怪我なく帰ってきてくれたので、ちょっとぐらい帰りが遅くなっても気にはしない。

それにいつになく上機嫌なので何かいい事があったのだろう。

「母さん、何かいいことあったの？」

「え？ ああ、うん。 ちょっとね。 あ、そうそう、週末にちょっと出かけるから予定入れないようにね」

「？ う、うん。 わかった」

やはり上機嫌なユウ。

何があったかはわからないが、それほど嬉しかったことだろう。その証拠にその日の夕食はいつにもまして気合いが入っていた。

## 第09話 騎士王の求むもの（後書き）

次回、出かけ先とは・・・。

オリキャラは出ません。原作キャラの所に行きます。

誤字脱字、感想あればお願いします。

## 第10話 騎士王親子vs烈火と鉄鎚（前書き）

ユウさんの容姿を若干変更しました。

セミロングから長髪にしました。

D・Gray-manの初期の髪を降ろしたりナリーを想像してくればわかりやすいと思います。

そして今回はユウの友人の家（八神家）へ！

騎士王親子のタッグの相手はタイトル通りもちろんあの2人。

アレン君の左手はいつの間にか違う姿になっていた！？

そして戦闘終了後、ついにアレン君に逆ペンタクルが・・・！

## 第10話 騎士王親子vs烈火と鉄鎧

何事もなく日が過ぎ、ついに週末。

現在ユウとアレンはあるところに向かつて移動中。

移動方法はユウが運転するバイクだ。

サイドカーに荷物を入れ、アレンがユウに背中から抱きつく様にしてしっかりとつかり、ティムキャンピーはアレンの服の中に入って飛ばされないようにして道路を交通法ギリギリ守ってるぐらいのスピードで爆走していた。

2人でちよつと遠くに出かける時はたいていこれなので、最初の方こそびびっていたアレンも今じゃすつかり慣れていた。

ユウ本人は「風が気持ちいいからすぐ慣れるよ」と言っていたがアレンが本当にすぐに慣れてしまい、ちよつとビックリしていた。

「母さん、これからどこに行くの？」

「友達の家だよ。泊りがけだって言っただけど忘れちゃった？」

「泊りがけは覚えてるけど、友達の家とは聞いてなかったかな」

「ああ、ごめんね。それと強い騎士の人がいるから、アレンは稽古つけてもらいな」

「う、うん」

side out

バイクを飛ばして約30分。

ついにユウの友人の家に着いた。

大きい家なので、お金もちなどをアレンは想像してしまう。

「ユウさん、いらっしやい。久しぶりやな」

「久しぶりね、はやて」

出迎えてくれた女性　八神はやてはこの家の主だ。

関西弁で年齢23歳だが、10代後半を思わせる容姿とスタイルの持ち主で、魔導書『夜天の書』の主。

今は守護騎士ヴォルケンリッター達と共に暮らしていて、ユウが管理局に入って一番最初に仲良くなった人物でもある。

「君がアレン君やね。八神はやてや、よろしく」

「あ、えっと、アレン・カミタです。よろしくお願いします」

「カミタって事は、ユウさんが正式に母親に？」

「うん。少し前にね。とりあえず、今日から3日間よろしく」

「美味しい料理とか期待しとってな」

「はい！」

はやてに対して笑顔で返すアレン。

その後、家の何かに案内されて来客用の部屋に荷物を置く。

一瞬大きすぎてアレンが迷子になりそうだったのは、本人とティムキャンピーだけの秘密だ。

「そうだ、シグナムとヴィータいる？」

「ん？いるよー。模擬戦でもするん？」

「ううん、アレンの稽古付けてもらおうと思ってね」

「アレン君って確か第2騎士王やったね。どっいう戦い方するんや？」

「それはお楽しみって事で　ってアレンは？」

「あれ？さっきまで後ろに・・・」

「これって、まさか・・・」

「「迷子」」

迷いそうではなく迷子になっていた。  
急いで探しに出たのは言うまでもなかった。

s i d e o u t

一方その頃。

アレンとティムキャンピーはというと。

「・・・」

あるものをみて、足を止めていた。  
頭の上に乗ったティムキャンピーもおとなしく眺めている。

その視線の先には2人。

ピンク色のポニーテールをした女性と、赤毛で三つ網の少女が模擬戦をしていた。

騎士甲冑をきているところから騎士なのだろう。  
アレンが見入る理由もわかる。

「ん？」

「どうした？」

「あそこの白髪の少年。今日来ると言っていたユウが預かっている  
と言っていたヤツじゃないか？」

「あゝ、たぶんな。迷子か？」

「わからん。待っている、見てくる」

「了解」

模擬戦をいったん中止し、ポニーテールの女性　シグナムが、自身の愛用の剣『レヴァンティン』を鞘に納めてアレンへ歩み寄る。  
白髪でオッドアイ、金色のゴーレムを頭に乘せたアレンは、近づいてくるのがわかり、首だけ向けていたのを直し体もシグナムへ向けた。

「私はシグナム。お前の名前は？」

「アレン・カミタです」

「カミタ・・・ユウの息子と言うこと　　「あ、見つけた！」  
ユウ」

シグナムの言葉が終わる前にユウがアレンを見つけて声を出す。  
すぐさま近くまで行き、アレンの心配をしていた。

「まあ、ダメだよ。ちゃんとしてこなきゃ」

「ごめんなさい。えっと、見てたら足止まっちゃって」

「でも心配したんだから、念話くらいしなさい」

「は、はい」

怒鳴るまでとは言わないが、アレンを軽く叱るユウ。

アレン本人は「やってしまったな・・・」と頭の上に乗っているアイテムキャンピーとともに反省する。

「そうだ。ちょうどいいし、模擬戦やろうよ」

「4人ですか？」

「うん。私とアレンのペア、シグナムとヴィータのペアで」

「え？」



「良いだろう、面白そうだ。アレンの実力も見てみたいだな。ヴィータ」

シグナムは、いつの間にかこちら側へ来ていた赤毛の少女　ヴィータに声をかける。

近くで見ると自分と身長がほとんど変わらず、アレンはすごい勢いで驚いていた。

「聞こえてたから早速やろうぜ。ちょっと楽しみだ。ユウと久しぶりに戦えるからな」

「負けないわよ。今回はアレンもいるんだし」

「そ、そんなに期待しないでくださいね？」

s i d e o u t

5分間の作戦会議。

互いのペアは準備を終え、ついに模擬戦開始だ。

「おお、すつげえな。あの左手」

「第2騎士王固有のレアスキルだ。人体の武器化らしいが、ここまでは」

騎士ペアの2人はアレンの左手、発動状態となり銀の巨大な爪とな

った『神ノ十字架』を見て驚いていた。  
最初の真つ赤な腕にも驚いたが、どちらかと言つとこちらの方が驚きが大きい。

あんな大振りな武器を使い、どこまでやれるのか。

あのユウが師匠となつていたのであれば、相当強いんじゃないかと予想し、気合いをさらに入れていた。

一方、騎士王ペア。

ユウのバリアジャケット姿をものすごく久しぶりにみたアレンは、ちよつとだけ懐かしさの中に居た。

3年前とデザインは変わらず、黒い服に白いラインにスカート。

足に着いたインテリジェントデバイス『シュバルツ』は黒光りしていて、少しばかり久しぶりなりミッター無しのマジバトルに向けて備えていた。

「緊張する？」

「うえ？ああ、うん、少し」

「あの2人、特にシグナムは強いから気を付けてね」

「了解。行こう、母さん」

「頑張つて勝とうね」

アレンの頭に乗っていたティムキャンピーは、翼を広げてパタパタと飛び始める。アレンの周りをぐるぐるしているところから、相当やる気満々のようだ。

両ペアがある程度の距離を置き、互いを正面にとらえる。  
そしてはやての合図で模擬戦が始まった。

『レディー・・・ゴー!!』

まず最初に飛びだしたのはアレンとシグナムだった。  
シグナムの愛剣『レヴァンティン』は、アレンの左手『神ノ十字架』  
をぶつかり合い火花を散らす。

ギリギリとその場で力比べをする2人。

だが今回の力比べではシグナムの負けのようだ。

（すごい力だな。こんな巨大な腕だ、当然だろうが半端じゃない）

ギャリリッ!! ブウンッ!!

剣の軌道をずらし、大きく横薙ぎをするアレン。

しかし、いとも簡単に避けられる。

これだけで終わるとは思ってもいないが、ちょっとショックだ。

「アレン!!」

「了解!!」

「円舞『霧風』!!」

ユウの蹴りから放たれる風は竜巻のようになり、シグナムへ襲いか  
かるように迫る。

だがヴィータがデバイス『グラーファイゼン』をギガントフォーム  
へ変え、竜巻を一振りでかき消した。

「アレン、手え伸ばして！」

「え？あ、はい！」

「じゃあ、行つてらっしゃーい！！！」

「うわああああ！！！」

戻ってきたアレンの手を掴み、ぶんぶん回してから再び2人へ向けてアレンを投げ飛ばす。

当のアレンは空中で投げ飛ばされながらも体制を立て直し、爪を寄せて突撃の構えに入る。

だがどうせ軌道は読まれているわけで、これもあっさりと避けられてしまい、アレンはその向こう側へとダイブしてしまう。

ズドオオオンツッ！！！！

土煙を上げながら思いっきり瓦礫の中へ飛び込んだアレン。

今がチャンスと言わんばかりにシグナムとヴィータはユウの方へ一気に距離を縮めながら迫る。

しかし、アレンを無視したことが仇になった。

「「！？」」

後ろからの突然の射撃。

瓦礫の煙の中からのことで当然回避ではなく防御となる。

だが、驚いたのは2人だけではなかった。

味方であるユウですら驚いていたのだ。

アレンは射撃なんかできない。出来るわけがない。  
出来たとしてもせいぜい斬撃を飛ばすくらいだろう。

まず射撃なんて出来る腕の形じゃないし、古代ベルカ式じゃ遠距離戦なんて度外視してるから大きい以外は使えないはず。

そんな考えだったのに、それが打ち破られたのだ。  
驚くのは無理もないし、驚くと言う方が無理だ。

アレンの銀の爪は形を変え、巨大な砲口を作っていた。  
さらにはその砲口の周囲に5枚の放射状に開いた花卉のようエネルギー体のようなものが発生していた。

「アレン、その腕何・・・？」

「え、えっと・・・なんて言うか、その・・・2日前ぐらいに、こうなっちゃって・・・で、でも！痛くもなんともないし、体にも異常はないから、大丈夫かなって思ってた・・・」

「まさか・・・・・・・・2人とも、一旦模擬戦中止！」

「・・・？あれ？<sup>コンバート</sup>転換してないのに、なんで勝手に」

左手が砲口から勝手に爪へと戻った。

そしてユウの眼の前で衝撃的なことが起こった。

左手が発動状態のまま勝手に動き、そして

「うあああああああ！！！！！！！！！！」

アレンの左目を自分で切り裂いたのだった。

## 第10話 騎士王親子vs烈火と鉄鎚（後書き）

アレン君の左目の能力をどうしよう・・・。

アクマなんて出す気ないし、ホントどういう能力にしよう。

期間はアレン君の眼が開くまでかな。

それまでに考えないと・・・。

あ、考えついた方は遠慮なく教えてください（本当に遠慮しなくていいですからね？）

次回は八神家でのお泊まり。

男1人（ザッフィーは除外）のアレンはどうなるのか。

誤字脱字、感想あればお願いします。

あ、後アイディアとかネタもある方はどうぞ遠慮なく。

第11話 第2騎士王（前書き）

今回はアレン君の秘密に迫る！

逆さペンタクルと左手の武器は一体何なのか・・・。

今回は挿入絵あります。



## 第11話 第2騎士王

「アレン！」

「うう・・・あ・・・！」

アレンは自分の左手に切り裂かれた左目を押さえていた。痛みで『神ノ十字架』は強制解除され、ティムキャンピーはものすごく焦っていてどうすればいいかわからないでいる。

「ヴィータ、シャル呼んできて！シグナムは包帯とか持ってきてちようだい！速く！」

「お、おう！」

「わかった！」

素早く2人に指示を出すユウ。  
現場慣れしているから出来ることだ。

「アレン、傷口ちょっとだけ見せてね」

左目を押さえている手をそっと退ける。  
額から頬にかけて大きな切り傷が一つ。

状態から見て、確実に左目はもう見えないだろう。  
だがユウはアレンの額にあるものを見つけた。

「これ、『逆さペンタクル』・・・？」

side out

数分後。

シャルを連れたヴィータと、医療箱を持ったシグナムが戻ってきた。

すぐさまシャルに傷を見せるが、どういふことかシャルは「傷がない」と言いだした。

しかも、失明したと思われていた左目の視力が少しずつだが回復してきているそうだ。

どういふことなのか全員さっぱりだ。

「左目、なんともない？」

「う、うん。開けないけど、痛くはない」

当のアレンも今じゃ普通。

傷口があつた頬の部分にはタトウのような模様が入り、左目の上部分には逆さペンタクルが描かれていた。

つまりは怪我が無くなつた理由がそれだと言ふことだ。

頭の上に居るティムキャンピーもアレンが無事でほつとしている。心配し過ぎて今ではアレンの頭の上でぐったりだ。

「そうだ、アレン。少しの間だけ席をはずしてくれないかな？ほんのちよつとでいいから」

「?・・・っ、うん」

「ごめんね」

ユウの言うとおり、部屋から退席するアレन。

心配してそうなユウの顔を見たが、自分にはどうにもできないと判断し、頭の上のティムキャンピーが落ちないように気をけながらその場を後にした。

とりあえず自室（寝泊まりする部屋）に向かう。

左目をぱりぱり人差し指で搔いてみるがやっぱり痛みはない。そんなことをしていると、窓に移った自分の顔が目に入った。

「あれ？何これ？」

窓に移った自分の顔にはタトゥーのような模様が入っていた。気になって前髪をあげてみるとそこには逆さまの星があった。

アレンは大きなリアクションこそ見せてはいないが、むしろ結構驚いている方だ。と言うか何でこんな状態になったのか混乱していた。

> i 2 9 1 6 9 — 2 0 5 4 <

「みんなになんて言われるかなあ・・・と言うかその前にいつ眼が開くかわかんないし、どうしょ・・・」

1人ため息をついてしまうアレン。

肩を落とし、頭を傾けてしまったせいでティムキャンピーが落ちて

しまいそうになるが、ギリギリのところアレンが受け止めた。

「はあ、早く治らないかなあ・・・」

side out

「と言う事なの」

アレンが席を外した後。

ユウによるアレンの左手、と言うより第2騎士王のことと今回ついた『逆さペンタクル』について説明していた。

簡単にまとめるなら、まず最初に第2騎士王は基本寿命が短い。戦死とかそう言ったものではなく、それはレアスキルのせいだ。

人体の武器化とはつまり、武器が寄生していると言う事。

武器に命を吸い取られると考えればわかりやすいだろう。

だからアレンがあんなにおぐらいなのが頷ける。

そして問題なのは武器が、寄生者自身が進化すると言う事だ。

寄生した武器は寄生者をさらに強くするために進化する。

その進化がどこまで行くかわからない上に、やっかいなことにいつ進化するかも未だ謎のままだ。

ただ、わかることが一つ。

ほとんどの第2騎士王とその末裔達は、武器の進化に耐えられず死んでいったと言う事だけだ。

次に『逆さペンタクル』だ。

これは王たちの間では呪いとされているもの。  
アレンの左目上についたのこれが呪いと言う証だ。

何の呪いで、誰の呪いかわからない。

一番有効な説は、その者の血縁関係の誰かのせい、と言うものだ。

だとすれば、アレンの血縁関係は母親か父親。  
それと自分の先祖である第2騎士王位だろう。

そしてこれは災いを呼ぶものとされていた。  
近々アレンの身に何かよからぬことが起きるんじゃないか。そうユウの頭に無理やり連想させた。

「アレンの左手の形、替っていたでしょ？あれが進化したと言う証  
拠よ。遠距離戦が出来ないから、遠距離戦が出来るような形になっ  
たの」

「だがまだ死ぬわけじゃないのだろう？」

「わかんない・・・私が知る限りじゃ、一番速くて20歳ぐらいら  
しいから、たぶんまだだと思う」

「大丈夫だろ。そう言う話っただけで」

「だからわかんないって言ってるじゃない！」

ヴィータの言葉につい怒鳴ってしまうユウ。  
それほどアレンの事が心配なんだ。無理もない。  
ユウはすぐさまはっとなり、ごめんと一言謝った。

昔の文献で読んだだけ。  
もしかしたら一部嘘かもしれない。

ユウはずっと願っていた。

出来ることなら呪いを消してあげたい。

あの真つ赤な腕だって、普通の子と同じように、普通の腕に戻してあげたい。

そう心の中で願っていた。

「とりあえず、そろそろ夕食だ。あんまりつらそうな顔をするなよ」

「わ、わかってるわよ」

「顔がそう言っていないぞ」

「え？」

ユウのその顔は涙でぬれていた。

顔は赤くなり、まさしく「泣いてました」と言っている顔だ。

こんな顔でアレンの前に出れば心配をかけさしてしまう。

すぐさま涙をぬぐい、いつもの顔に戻るユウ。

だが内面はまだ涙でぬれたままだった。

## 第11話 第2騎士王（後書き）

楚良「はい、今更ながらあとがきコーナー」

アレン「ホント今更ですね。もう10話以上になるって言うのに」

楚良「いやー、俺さ今まであんましあとがきで喋らないじゃん？主に次回予告的なのとか程度で。で、エドワード・ニューゲート様を見て俺もやりたくなったわけさ」

アレン「で、ここではどんなことするんですか？」

楚良「えっと、質問コーナー的なのか？」

アレン「何で疑問形なんですか。まあ、いいんじゃないですか？」

楚良「今のところはだからな。後々増やそうかと思う。あ、思いついた方は遠慮せず言ってくださいね」

アレン「そこは基本他力本願ですね」

楚良「まあ、俺じゃ思いつかないようなアイディアが思いつく人いるし、ダメってわけじゃないだろ。ダメって言われれば気合いと根性で1人で考えるけど」

アレン「そうですか。とりあえず、頑張ってくださいね」

楚良「何言ってたんだよ。お前、基本ここのレギュラーだから」

アレン「マジですか・・・？」

楚良「マジ。報酬みたらし団子」

アレン「快く引き受けましょう（キリ）」

楚良「言うことで、これからあとがきコーナーをやって行きたいと思います。今のところは質問コーナーですが、後々増やしたいと思います。後ゲスト（アレン以外のキャラ）がたまに（ほぼ毎回？）来ます」

アレン「質問がある方、アイデアが思いついた方は遠慮せずにお願ひしますねー（もぐもぐ）」

楚良「次回予告！！」

アレン「今回は再び模擬戦再開！騎士王親子vs鉄鎚烈火コンビ！勝つのはどっちだ！？」

楚良「では、また次回」

楚良&アレン「「まっ たね」」

アレン「ってこれ『桜の花が咲くころに』の初期のキャラ紹介の時のあれじゃないですか！」

楚良「良いじゃん別に。これ結構気に入ってたんだ」



アレ「そんなでいいんですか・・・」

楚良「良いんだよ」

第12話 再戦 騎士王・S VS 騎士・S（前書き）

今回は再模擬戦！

勝つのはどっちのペアだ！？

第12話 再戦 騎士王・S vs 騎士・S

八神家宿泊1日目の夜。

すでもう夜中となっているが、アレンは未だに眠れないでいた。

（母さん、僕に何か隠してる・・・）

寝る前までのユウの表情はいつもと違った。

何かを隠している、と言っても3年間一緒に過ごしてきたアレンだ。隠し事をしている時の表情はすぐにわかってしまう。

「アレン・・・」

「っ」

「死んじゃ、何処かに行っちゃいやだよ・・・」

「（寝言・・・？）」

寝ていたと思ったユウが、アレンの背中に抱きついた。

本当はアレン同様、眠れずに起きていたのだ。

アレンが寝ていると思い、ユウはアレンを起こさないように優しく、だがそれでも力強く抱きしめる。

寝言だと思っていた声は涙でぬれていて、小さいが泣き声も聞こえてきた。

「アレン・・・？」

そんなユウの泣いている声を、アレンは聞きたくなかった。  
だから寝返りをうつ振りをしてユウに向き合い、抱き返した。

「母さん・・・」

「っ・・・ありがとう、アレン。おやすみ」

その言葉を聞くと何故か不思議と眠くなった。  
すぐに睡魔が襲ってきて、アレンはそのまま眠りについた。

side out

翌日の朝。

ユウの表情はいつもと変わらない、隠し事もない笑顔だった。

何かを決心した。

そんなことが顔に書かれているようだ。

話を変え、アレンの左目は徐々に回復速度が上がってきているらしい。  
この状態なら数日後には完全に治って開けるそうだ。

何でこんなに回復力があるのか、治療もせずにこんな重傷が自力で  
再生しようとするのか。

医療系に強いシャルでもわからないでいる。

ユウいわく「呪いの影響」らしい。

『準備はええかー？』

「『『『いつでも』』』」

今日は昨日中止した模擬戦の続きだ。

アレンの左目が見えない、と言うハンディがあるが本人は大丈夫と言っているし、ユウもやらせてあげてほしいとの事でやることにした。

4人ともセツトアップ状態、武器を構えて準備は完了していた。そしてそれを確認したはやてが開始の合図をする。

『それじゃあ・・・レディー・ゴー!』

合図と同時にシグナムと、今度はユウが飛びだした。素早い足捌きと剣技がぶつかり合い火花を散らす。

最初はお互いが攻防を繰り返していたが、次第にシグナムがどんどん防御に徹して行くようになった。ユウのスピードについていけず、反撃の隙を見つけられずにずるずると押され、防御をするしか手が無くなっていたのだ。

「はあ!」

力を込めた右足の蹴りを入れるユウ。

シグナムはそれを防ぎ、一気に後ろに押されてしまう。

距離が出来たのを気に、ユウも一旦アレンの所まで退く。今度はアレンが攻撃に入ると思い、ヴィータが前に出る。

だがそれはフェイクで、アレンはその場にとどまり、巨大化させた左手の上にユウを乗せていた。

そしてユウを乗せたまま振りかぶり、ヴィータに向かって”投げた”

「い!？」

音速の左手が生み出すスピードに乗り、足を突き出した一氣に突っ込むユウ。そして投げた後、アレンは左手を砲口へ転換し、援護射撃をする。

さすがにこれをアイゼンのギガントハンマーで打ち返す、なんてことはできず、ヴィータは全力で防御に徹するしかなかった。

「残念、二段構え」

「は？」

「クロス」

猛スピードのユウは急に動きを止め、防御を無意味にする。さらにその後ろ、ユウの陰からアレンが一氣に距離を詰めてくる。そしてヴィータの眼の前で左手を掲げ、防御がずれた絶妙なタイミングで攻撃を入れる。

「グレイ　　っ!？」

「いい攻撃だ。だが、残念だったな」

振り下ろしの左手を、シグナムがギリギリのところまで防いだ。決まったと思った攻撃を防がれ、アレンには隙が生まれる。そこへ攻撃が出来ないシグナムに代わり、動けるようになったヴィータがアレンをアイゼンで殴り飛ばした。

殴り飛ばされ、瓦礫の中へ叩きつけられるアレン。  
煙を上げ、ユウが心配するがそんな暇もなく2対1の状況が出来あがってしまう。

「大丈夫だよ、ティム。さ、反撃だ」

瓦礫をかみ砕きまくってアレンを掘り出すティムキャンピー。  
口の中に入れたものがどうなるのかはわからないが、そう言う機能のようなものが付いている事に少し驚くアレン。

瓦礫の中から這い上がり、左手の砲口を閉じて槍の形態に替える。  
そしてユウを追い詰めているシグナムへ一気に迫った。

「シグナム！」

「!?!」

「不意打ち、ごめんなさい。クロス」

不意打ちになるが、しっかり謝り槍を一突き。  
全力の一突きは、突き刺すと同時に標的を十字に引き裂いた。

「スピアー!!!」

「ぐ、がはあっ!!」

この攻撃によりシグナムはダウン。  
残りはヴィータだけとなり、形成は逆転した。

左手を<sup>コンバート</sup>転換し、元の形に戻す。

そしてそのままヴィータと激しい攻防を繰り返し始める。

一方ユウは後はアレン1人でも大丈夫だろうと判断し、倒れているシグナムを介抱しだした。

もしアレンが負ければこちらの負けで良いつもりなのだろう。

「こんのおおおっ!!!!!!!!!!」

「へ？」

ブウォンツッ!!!!!!

ラケーテンハンマーがアレンの真横から迫る。

直撃かと思い振りかぶったが、手ごたえがなかった。

よく見てみると当たったのは白いマントだけでアレンの姿がない。  
姿を見失い、すぐさま姿を見つけようとするが少し遅かった。

「っ!?!」

「クロス・・・グレイヴ!!」

アレンの最強の一撃がヴィータを背中から襲う。

見事に決まったその攻撃で模擬戦は騎士王ペアの勝ちで終わった。

side out

時間は経ち再び夜。

今日の夕食はバーベキューとなった。



アレンが大量に食べると言うことで、張り切るはやてとリイン、そしてアギト。それを見ていてシャマルも手伝いたそうだったが、残念ながら断られたらしい。

「しかし、アレン。お前は強いな」

「いえ、不意打ちが上手く決まっただけで。あれが避けられたらどうしようかと思いましたよ」

「それでもアタシとタイマンで勝ったけどな」

「さすがはユウの弟師だけはあるな」

「そ、そんなに持ちあげないください。は、恥ずかしいですから」

今日は模擬戦の話で持ち切りだった。

シグナムとヴィータ、2人をダウンさせたのはどちらもユウではなくアレンだったのだ。

みんながアレンを褒めるのはわからないでもない。

ユウも師匠として鼻が高い、と言っている。

アレン本人は恥ずかしくて顔が赤くなっていた。

「これならミウラにも勝てんじゃないね？」

「確かに。お前らに勝つほどだ。実力はある上に、今年のインターミドルは良いところまで行くかもしれんな」

「そのミウラって子、強いんですか？」

「ああ。シグナム達と模擬戦が出来るぐらいな」

「へー。会ってみたいなあ・・・もぐもぐ」

「それなら明日、道場に行ってみる？」

「んぐ・・・道場？」

道場、という言葉に疑問が出てくるアレ。

「この近くに道場なんてあったんだ、と納得し、さらにミウラと言う子に興味がわいてきてしまった。」

「明日は日曜だ。他の子もたくさん来る。きてみるか？」

「・・・はい！」

第12話 再戦 騎士王・S vs 騎士・S（後書き）

楚良「あとがきコーナー」

アレン「今回で2回目ですね。お便りが来てないのが残念ですけど」

楚良「そんなの書き続けてればその内来るさ！今はコーナー案を考  
えることが大切だ！」

アレン「どういう案が出てるんですか？」

楚良「よくぞ聞いてくれた。実はな  
」

アレン「まだ決まってるじゃない、なんて言ったらぶち抜きますよ？」

楚良「・・・（考え中）」

アレン「凶星ですか」

楚良「いや、あるんだぞ！？でも、ただ焦らしてるだけって言うか、  
その・・・」

アレン「大丈夫ですよ。みたらし1年分で許しますから」

楚良「俺のこずかいがーーーー！！！！！」

アレン「と言うわけで、読者の皆様、あとがきコーナーのコーナー  
案が思いついたら遠慮せずに言ってくださいね。お願いしますよ」

楚良「現在は質問コーナーですが、そちらにもお便り待ってます」

アレン「さてさて、次回の『銀の左手』は？」

楚良「え？俺が次回予告言うの？」

アレン「はい」

楚良「（マジか）ごほん。八神家道場へと足を踏み入れるアレン。そこで出会うミウラと言う少女。彼女はアレンに一目惚れしてしまう。彼女が取った行動とは・・・！？」

アレン「僕も次回がすごく気になります。ミウラは何をしてくるんですか？」

楚良「ネタばれはしません」

アレン「それはまた次回のお楽しみです」

楚良「ではまた次回」

楚良&アレン「「まっ たね」」

現在お便り募集中！

今は質問コーナーだけですがお待ちしております。

コーナー案も思いついた方は遠慮せずお願いします！！

第13話 王の左目 第2騎士王暗殺（前書き）

パソコンが壊れましたw  
現在携帯でしか更新できませんw

## 第13話 王の左目 第2騎士王暗殺

八神家宿泊、最終日。

アレンの左目は未だに開いていないが、運が良ければ今日の夜には開くそうだ。

それともうひとつ。

何故だかはわからないが、アレンの左目上の逆さペンタクルが、最初は線だったのだけどいつの間にか塗りつぶされていた。

これも呪いの影響なのかもしれないが、どういったことなのかさっぱりだ。

話を変え今日は八神家道場へ行く予定だ。

ミウラという子を紹介してくれるらしく、アレンは少し楽しみにしていた。

「お、おお・・・」

八神家道場についての感想は驚きしかなかった。

大きすぎてそれしか言えないのはしょうがないことだろう。

とりあえず、ザフィーラの後に続き、道場内へ入っていく。

ユウもどいう子がいるか少し楽しみにしながら中へ入っていった。

「あ、師匠。おはようございます」

朝一番でザフィーラに挨拶をした少女の名はミウラ・リナルディ。ここ、八神家道場ではシグナム達が認めるほどの実力の持ち主だ。

「あれ？そっちは・・・」

すぐに後ろにいたアレンに気付くミウラ。  
すかさずアレンは笑顔で握手を求める。  
その時、ミウラの顔が突然赤くなった。

（か、かっこいい！）

まさかの一目惚れだったようだ。

白髪で片目を閉じてる状態だが、ミウラにとってはむしろドストライクだったようで、赤くなった顔が元に戻ってない。

「ぼ、僕、ミウラ・リナルディっていいます！ミウラって呼んでください！」

「僕も、アレンでいいですよ（元気な子だな）」

握手した手をブンブンと振るミウラ。

アレンは少し困惑きみだが、これがミウラのやり方なんだと二人で納得した。

そしてそこへザフィーラが割って入る。

「じゃ、早速試合するか」

「「はい！」」

side out

「お互い、準備はいいか？」

「はい！」

八神家道場、外。

中庭にあたる場所にて、八神家道場生徒と八神家メンバーとユウが見守るなか、アレンとミウラは向き合っていた。

ちなみに2人ともセツアップ済み。

ミウラは愛機『スターセイバー』を使い、フードのついた上着、シグナムのような騎士甲冑をモチーフにしたバリアジャケットに身を包み、両腕にはスターセイバーが形を変えて装備されていた。

対してアレンは黒いコートに白のライン、仮面のついたマントを見にまとい、巨大な左手を除けばさながら道化のように見える。だがそのアレンに異変が起きた。

「な、なに・・・これ？」

左目が、さっき開いたのだ。

しかし、その左目は奇っ怪だった。

ミウラと対峙したとき、左目に大小のスコープが2つ、突然現れた。見えたのは相手のステータス。魔力量、パワー、防御力、スキル。そしてバトルスタイル。

さらには相手の姿を障害物があっても、遠くにいても、相手のリンカーコアを見つけて関知できるようになった。

はつきり言って、フェアじゃない。



だが、それは左目が許してくれなかった。

たとえ左目を瞑っても、右目にも映っているのだ。  
両目を瞑って戦うなんてアレンには出来ない。  
出来るなら対抗策を練りたかった。

「では、初め！」

戸惑うアレンの思いは虚しく、ザフィーラが合図をした。  
合図と共に飛び出すミウラ。

ヴィータが「止まれバカ！」と叫んでるところをみると特攻癖があるように思える。

しょうがないと思い、左目をそのままにして応戦するアレン。  
ものすごい勢いで迫るジャブを、軽々とかわしていく。

左目の能力でバトルスタイルが見えているのだ。動きはある程度読める。

「ハンマー・・・」

「っ!?!」

「シュラーク!?!」

下からアッパーのようなパンチを繰り出すミウラ。

決まったと生徒達がどよめくが、技を繰り出した本人のミウラには手応えが感じられなかった。

ギリギリのところまで左手を体の前に持ってきて、手のひらでミウラの拳を受け止めたのだ。

さらに左手をコンバート転換し、槍の形へ変えてミウラとの距離をとるために無理矢理薙ぎはらった。  
左手の形が変わり驚くミウラだが、攻撃を喰らわないよう、しっかり避ける。

コンバート  
「転換」

左手を爪に戻し、再び向き合う。

ピシリと伝ってきた違和感があったが、あえて言わずに無視した。

「さあ、ここからは本気で行くよ！」

「はい！」

> i 2 9 4 9 8 — 2 0 5 4 <

s i d e o u t

アレ vs ミウラ

一進一退の攻防が続き、試合時間は15分を過ぎていた。

「っ!？」

突然のことだった。

キィン・・・

アレンの頭の中で何かが切れる音がした。  
そして左手が”はじけた”

左手が強制解除され、バリアジャケットが破れてさらされた真っ赤だった腕は真っ黒く染まっていた。

「あ・・・あああああ！！！！！」

突如、激痛が走る。

アレンは、左手を押さえて叫ぶしか出来ない。

試合は一旦中止。

ユウとシャマル、そして相手をしていたミウラがすぐさま駆け寄るが、何が原因なのかわからない。  
そして次の瞬間

ズ・・・パンツッ！！！！

繋ぎ目部分から左手が、今度は”左手ごと”弾けとんだ。

鈍く、肉片が落ちる音と共に、左手から大量の血が吹き出す。  
あまりの激痛に、アレンは意識を手放し気絶してしまった。

「アレン？アレン！」

「ユウさん、急いで病院つれてくんや！」

「う、うん！ザフィーラ、手伝って」

「ああ」

気を失っているアレンをザフィーラが担ぐ。

そんな中、ミウラは1人地面に腰を落としてしまっていた。それを見たシグナムが駆け寄る。

「ミウラ、大丈夫か？」

「ぼ、僕、何か・・・アレン君が、血がたくさん・・・」

「大丈夫だ。お前は何も悪くない。アレンは助かる」

慰めるシグナムだったが、ミウラは震えたまま。完全に自分のせいだと思い込んでしまっている。こっいうとき、シグナムはどうしたらいいかわからなかった。

第13話 王の左目 第2騎士王暗殺（後書き）

今回はあとがきコーナーはなしです。

誤字脱字、感想あればお願いします。

## 第14話 炎王と騎士王（前書き）

シリアスポックなってきた気がする。

それと左手がない状態がちょっと続きます。

ちなみにアレン君は少しの間大人モードのまま生活します。

## 第14話 炎王と騎士王

白髪で片目の周りに赤い模様が入っていて、左手がない少年　アレン・カミタ。

彼が眠っているここは、聖王教会と呼ばれる場所のとある一室だ。

一週間寝たきりのアレンは、実質一度死んでいる。

出血多量。一時的とはいえ、致死量を超える血を出したのだ。

急いで血を入れ、電気ショックで心臓を動かしたが、もう少し遅かったらアレンの命はなかったそうだ。

そんな死から逃れたアレンは1人、目が覚めるのだった。

「僕は、生きてる・・・？」

side out

一週間前。

アレンが病院に運び込まれた時のことだ。

「なんとか一命は取り留めたみたい」

左手から大量に流れ出た血。

病院にあったアレンと同じ血液型の輸血パックを大量に使い、何とか持たせたのだ。

先ほどのシャマルの言葉で胸を撫で下ろすユウ。だが、次の言葉で再び不安が出てしまう。

「アレン君の左手は、やっぱり無理みたい」

「そう、だよね・・・」

言いにくいことだが、アレンの左手はない。

くつつかない、などではない。左手自体がないのだ。

取れたはずの左手は姿形を変え、その場でみずらを粒子としたのだ。今は小さなビンに、ユウが苦労して集めた左手だった粉が入っている。

眠っているアレンのそばに置いてはいるが、今のところは何の変化も起きていない。

「気になったんだけどよ、なんでアレンの左手は取れたんだ？」

もつともな疑問をユウに問いかけるヴィータ。

いきなり左手がはじけ飛ぶ、なんて通常ありえないことだ。

「それは私にもわからない。手が粒子になったのもね」

ここ3日間、いろいろ起こりすぎてユウも滅入っていた。

急速的に進化を遂げていく第2騎士王の血を引く継ぐアレンと、逆さペンタクルの呪い。

どう対処していいのかわからないのは普通だし、滅入るのも普通だ。

「それにしても、あの手の取れ方はおかしかったな」

「ああ。まるで、破裂するような感じだった」



ザフィーラとヴィータが変なことを言い出した。  
手の取れ方、それがおかしいと。

アレンの左手は真黒になった後に繋ぎ目部分から少し大きく膨れ、  
そして次の瞬間血をまきちらしながらはじけ飛んだ。  
普通なら真黒になった時点で止まり、手がとれるまではいかない。  
取れたとしても、はじけ飛ばずにそのまま落ちるはずだ。

「誰かがアレンを狙ったってこと？」

「たぶんな。だが狙う理由がわからん」

「それなら、聖王教会に・・・」

「そやな。ひと段落するまで預けとこか」

side out

「なんで、僕は生きて・・・」

目が覚めたアレンは、自分が生きてることを不思議に感じていた。

左手が真黒になった瞬間、駆け抜けた激痛。

今までには感じたことがないぐらいの痛みと不安、そして恐怖が襲  
ってきた。

左手はもう使えないんじゃないか。そう思う程だ。

その後、また激痛が襲ってきた。

左手の感覚はなくなり、一気に血が噴き出すのがわかった。

あふれ出る温かい血は、アレンに確実に絶対的、あらがうことができない『死』を感じさせた。

それなのに、アレンは生きていた。

夢だと思っていたが左手の感触はなく、すぐに現実に引き戻された。

「なんで、なんで涙が出るんだよ・・・」

生きてて嬉しいのか、左手がなくて悔しいのか全然わからなかった。ただ体が震えだして、目からは涙があふれ出して止まらなかった。暫くの間アレンは泣くことしかできなかったから、ずっと泣き続けた。

右手だけで膝を抱え、前の母親　マナがいなくなった時のように。

「母さん、何処・・・」

右手に付いていた点滴の針を口で器用に外し、ベッドから出るアレン。

横で眠っている修道士らしき女性が起きないよう、気をつけながら部屋を後にした。

行先はない。

ただ歩き続け、いるかどうかわからないユウを探すのだった。

アレンが部屋から出て行って10分後。

アレンの寝ていたベッドに突っ伏していた水色の髪をした修道士見習い　セインはようやく目を覚ました。

「やば・・・寝ちゃってた・・・」

目を覚ますセインの前にアレンはいない。

警護を頼まれていたのに、見失った上に居眠りしていた、なんてバシたら大変なことになるだろう。

「セイン、入るよ」

コンコンとノックとともに声が聞こえてくる。

やばいやばいと思いながらも、セインはもう諦めていた。

そして頭の中で最速で言い訳を考えることに。

「あれ？アレン君は？」

「ごめん、油断した。トイレ行ってる間にいなくなっちゃったみたい」

「そんな悠長なこと言ってないで、早く探さないと！あの子、まだ動ける体じゃないんだぞ！」

「ええ！？わ、わかった！」

部屋に入ってきた少年　オットーの言葉で再びあわてだしたセインは急いで部屋から飛び出していた行った。

オットーは持っていた代えの点滴用の輸血パックを置き、アレンがいつ戻ってきてでもいいように準備を始める。

「これ、涙の跡・・・」

ベッドに涙の跡を見つけたオットー。

すぐさまアレンのものだとわかったが、それをみたオットーにはど

うすることもできなかった。

一方、部屋から抜け出したアレンは、ただただ歩き続けた。絶対に立ち止まらず、なんのあてもなくユウを探していた。

途中、貧血に襲われたが無視。

一週間前にミウラの攻撃をまとも以上にクリーンヒットされまくったことから、その痛みにも襲われるがそれも同じように無視した。

「ああ、またこの部屋か。それにこの感じも・・・」

道に迷ったか、何度も同じ道、同じ部屋の前を通っていた。

そのたびに、最近は無沙汰だった王が近くにいるときに感じられる何かをアレンは感じ取っていた。

何度かは無視していたが、少し気になってきたかアレンはその部屋の前で止まった。

左右を見て、誰もいないことを確認した後、唯一残った右手でドアを開けた。

その部屋には、ベッドに眠る一人の少女。

この少女の名前はイクス・ヴェリア。

古代ベルカの王の一人、冥府の炎王と呼ばれていて、今では目覚めることのない永遠の眠りに付いてしまっている。

イクスの姿を見るなり、アレンは近くにより手を取った。その手は暖かく、何かを感じられた。

「君は・・・そっか、イクスって名前なんだね」

イクスの手を取っているアレンは、イクスの言っていることがわかるのだろうか。

少し間をおいてイクスに話しかけていることから、会話をしているのだろう。

眠っている彼女と話ができる。それはそれでとてもすごいことだ。

はたから見れば独り言をしゃべっているアレンは、イクスのベッドの横にあった椅子に座り、手を握りながら話している。

そんな時、不意に後ろから声をかけられた。

「やっとみつけた、白髪ツ子」

「っ」

「勝手に部屋抜け出しちゃダメじゃん。ほら、部屋戻るよ」

「あ、はい。じゃ、イクス。またね」

イクスに別れを告げ、手を離してからセインのもとへ行くアレン。その表情は、落ち着いて安心している顔だった。

## 第14話 炎王と騎士王（後書き）

今回もあとがきコーナーはなしです。

というかパソコンが復活するまで、あとコーナーがしかりかたまつてからにします。

誤字脱字、感想あればお願いします。

## 第15話 涙の騎士王

イクスの眠る部屋を後にし、2人は再びアレンが寝ていた部屋に戻ることにした。

途中、また貧血に襲われたアレンだが、あえて黙っていた。

「あ、自己紹介まだだったね。あたしはセイン」

「アレンです。今はこの姿ですけど、本当は子供ですから」

「ああ、そこらへんは知ってる。アレンのお母さんから聞いているから。それと、感知するまでその姿を解除しちゃダメだってさ」

「え？ど、どうしてですか・・・？」

ちよっとおかしな忠告。

大人モードを解除したらどうなるのだろうか。  
気になったアレンは、恐る恐る聞いた。

「んー？なんでも、また激痛走ったりするからだって」

「そ、そうですか・・・（絶対に解除しない！）」

大人モードの解除＝死へ一直線。

アレンは大人モードを解除することに恐怖を覚えたのだった。

「そいえばさ、アレンってイクスと知り合い？」

「いえ、さっき知り合いました」

「あれ？じゃあ、なんで名前知ってんの？」

「イクスの手を握ったとき、声が聞こえたんです。そのときに名前を聞いて、さっきまで話してたんです」

「ふうん　　って、寝てるイクスと話せたの！？」

「まあ、なんとなく、ですけどね」

先ほどセインに見つかるまで、アレンはずっとイクスの手を握りながらしゃべっていた。

つまりは、手を握ってるときだけは話せるようだ。

ほえ、と驚きながらも歩き続けるセイン。

後ろのほうでドサツ、と音がして振り向いてみれば、そのにはさっきまで元気に見えたアレンが倒れていた。

s i d e o u t

同日午後3時。

貧血で倒れたアレンはようやく目を覚ました。

右手には最初に起きたときと同様、点滴の針が刺さっていた。

先ほどの夢じゃないかと思ったが、やはり最初に起きたときと同じように、左手の感覚がないことに気づき現実に引き戻された。

起きたばかりでアレンは頭が動いていない。



顔を横に向けてセインたちを見るが、ぼーっとしていてぼやけて見える。

そんなアレンの横顔をペチペチと叩く音が聞こえ、それでようやく頭が働きたした。

「ティム・・・？」

目だけを横にやると、そこには相棒ティムキャンピーがいた。名前を呼ばれると、ティムキャンピーはアレンの顔の上から退き、目の前でパタパタと翼を羽ばたかせていた。

右手だけで何とか体を起こし、頭を抑えるアレン。先ほどまでのことを整理し始めた。

「僕、貧血で倒れたんだ」

「いきなり倒れるからびっくりしたんだぞ。ちゃんと調子悪いなら言わないとダメじゃん」

軽くだが、アレンを怒るセイン。誰でも後ろで人が倒れればびっくりもするし、調子が悪いのに言わないなんて怒りたくなるものだ。

その後、ここが聖王教会だと聞いて驚いた。こんなに大きな建物なんだ、迷うのは普通だと。

説明をしてくれたセインとオットーの2人にお礼を言ったアレンは、少し気になっていた。ミウラのことだ。自分の目の前で左手が取れて、血を浴びたのだ。

もしかしたら精神面でダメージを受けてるかもしれないと心配して

いた。

「あ、そういえばアレンにお客さん」

「お客？」

疑問に思った。

こんなときにお客？

しかも自分が聖王教会にいることを知ってるなんて。

そんなことを考えていると、オットーが声をかけた。

入ってきた少女は見覚えがあり、先ほどまで心配していた子だ。

「ミウラ！」

「えっと、お見舞いに来ました」

「あ、ありがとう」

ミウラの手には花と果物。

左手だった粉が入った小ビンの隣にそれを置く。

「その、大丈夫・・・ですか？」

「うん、大丈夫。左手はないけど、命はあるよ」

「そっか。よかった」

他愛もない短い会話。

これだけだが、アレンの安否を聞いてミウラは一安心した。

一方アレンも同じだった。

お見舞いにこれる、ということとは精神面は心配ないということだ。それはまさしく安堵の一言に尽きる。

「左手、治るんですか？」

「んー、どうだろうね。まだわかんないかな」

「僕、治るって信じてますから！それで、治ったらもう一回！今度こそ！」

「・・・うん」

愛器『スターセイバー』を見て時間を確認するミウラ。  
するともう時間らしく、短いお見舞いは本当に短く、すぐに終わってしまった。

こういうときに誰かに励まされる。  
それが嬉しく、アレンは笑顔でミウラを見送った。  
このとき、小ビンの中の粒子が少し光っていたのを3人とも気づいていなかった。

side out

またも同日の夜。

夕食をとったアレンは、騎士カリムやシスターシャッハのところへ、遅すぎるが挨拶をしにいった。

「えっと、今回は助けていただき本当にありがとうございます」

「いいのよ。それよりも、命があって何よりだわ」

「はい、おかげさまで。それに傷が完治するまでおいてもらえるなんて」

「はやて達の頼みだもの、断れないわ。それに、こんな子供が死ぬのは大人としても見たくないし」

最初、というよりほとんどアレンはお礼しか言っていない。

それほど感謝しているということなのか、さすがに行動が早い。

そんなアレンをその話題から引き離そうとする2人、騎士カリムとシスターシャツハ。

一段楽したところで、アレンに聞きたいことがあった。

それは左手のことなど、他いろいろだ。

「その、変なことを聞くんだけど、誰かに命を狙われるようなことは身に覚えがある？」

「・・・ギャンブルでパンツ一丁にしたやつらはたくさんいるし。

でも、そんな程度で僕を恨むなんてばかばかしい。・・・心当たりはありません」

「そ、そう・・・ありがとう。ごめんなさいね（この子、今すつごく危ない発言しなかったかしら。ギャンブルでパンツ一丁ってどんな生活送ってきたのよ）」

小声の独り言のつもりだったか思いつきり声に出ていた。  
だがそんなのお構いなしでキリツと、ない、と言った。  
本当に心当たりはないんだろう。

「今日はもう疲れたでしょ。早めに休むといいわ」

「はい、そうさせてもらいます。では、僕はこれで」

静かに席を立ち上がるアレン。

悲しげな表情をしていたが、2人にはわからなかった。  
それほどボーカルフエイスだったのだろう。

部屋に戻ったアレンはその夜、一晩中泣き続けたのだった。

## 第15話 涙の騎士王（後書き）

誤字脱字、感想あればお願いします。

・・・感想がほしい・・・。

**第16話 形亡き王の左手（前書き）**

今回は挿入絵あります。

## 第16話 形亡き王の左手

「発動!!!」

霧に包まれた大きな部屋。

アレンの掛け声とともに、霧は勝手に動き始め、やがてはアレンの左手に集まって形を作っていく。

作るのは銀色の巨大な爪。

爪の先の部分から徐々に形を成していくが、次第にそのスピードは落ちていく。

そして終いには・・・

「うわっ!!!?」

何かが途切れたように、左手は一気に形を崩す。

手首ほどまでできたいたのに、それらはすべて霧に戻ってしまった。

アレンはその反動で体制を崩す。

思いつきり後ろのほうへ飛ばされ、部屋を出てしまい、階段を頭から勢いよく落ちて行った。

「いつて~~~~!!!」

階段の下まで行き、頭を抑えている。

頭を押さえながら、若干泣き目になっているのは秘密だ。

「アレン君?」



「ん？ヴィヴィオ？」

side out

2日ほど前。

怪我がほぼ完璧に治ってきたところだった。

「左手に義手はやっぱ無理見たいね」

「はい。医者にも、「左腕だけ人の細胞とは違う」って言われてるんで」

「ねーねー、3人とも」

カリムとアレン、シャツハの会話に混ざるセイン。  
何事かと聞ぐが、それは意外なものだった。

「アレンの左手って、そのビンの中に入ってんでしょ？」

「え、えっと、はい。そうですね」

「あたしさ、思ったんだよね。発動させて腕の形にしちゃえば後は解除してもそのまんまじゃないかって」

「「「・・・」」」

「あ、あれ？あたし、なんかまずった？」

「セ、セインが珍しくすごいことを言ってるわ・・・」

「今までの私の教えは間違っていなかったんですね」

「ちょ、二人ともあたしがそんなに馬鹿だと思つての!？」

「「違うの(ですか)?」」

「ひどい!」

セインの発言に驚くカリムとシャツハ。

苦笑しているアレンの横ではセインが必死に馬鹿じゃないと言っている。

だが意外といい線を行っていた。

形が変わっても左腕はそこにある。

ときどき微量の光を出してアレンに反応しているのだ。

やってみる価値はあると思える。

「じゃあ、まあ、やってみる?」

「えっと、はい。やってみたいと思います」

というわけで早速移動。

アレンは動きやすい格好に着替え、大きな部屋に入って行った。

特に何もなく、動くにはもってこいと言っていいくらい大きな部屋に、自分の左手だった粉を撒き散らす。

最初は何も動きはなかったが、しばらくすると突然風が吹き、粉は舞い上がって霧となった。

「じゃあ、行きます」

すー、はーと深呼吸をし、準備完了。

上を見上げ、霧が自分の左手だと再確認する。

「（頼む、発動してくれ）神ノ十字架！発動！！」

> i 3 0 5 2 2 — 2 0 5 4 <

掛け声とともに霧は渦巻き、左手に集まる。  
つなぎ目部分が若干不安定なようで、ぶれているが、大雑把な形は  
形成できてきている。

もう一步。あと一步だった。

もうひと踏ん張りで形ができていた。

だが、そう簡単にはいかなかった。

「やつ            つ！？」

発動した！

そう確信した時だった。

集中力は当たり前のように途切れ、振り上げていた左手は形を崩し  
霧に戻る。

「え、戻っ！？」

さらさらと崩れ去った左手は再び霧になって漂う。

成功した、発動できた、そう確信していた全員は言葉を失った。

なんで途切れた？

なんで霧に戻った？

どうして発動できない？

様々な疑問が浮かぶが、そんなのはアレンの心を乱すだけだった。  
ここで発動できなかつたら、二度と戦えない。

ヴィヴィオや、アインハルト。みんなと楽しい毎日が送れない。  
その思いで心がどんどん焦りだす。

「大丈夫だつて！えっと、そうだ、たまたまできなかったただだよ  
！ほら、もう一回！」

「・・・はい！」

セインの励ましで、再びアレンは左手を構える。  
そして先ほどと同じように深呼吸をし、叫んだ。

「発動！！！」失敗

「もう一回やってみようよ！」

「発動！！！」失敗

「発動！！！」失敗

「発動！」失敗

「発動！」失敗

「発動・・・！」失敗

計7回。全部が失敗に終わった。

アレンの体力もそろそろ限界が回ってきていた。

「なんで発動しないんでしょうね？」

「アレン君に反応して発動手前まで来てるけど、体から離れてるからうまくコントロールすることができないとか？」

「いや、もしかしたらもう戻らないんじゃない・・・」

カリムとシャツハがちょっと物騒な話をする中、セインはアレンに飲み物を渡していた。スポーツドリンクだが、何も飲まないよりは何か飲んだほうが楽だろう。

若干落ち込んでいるアレンだが、あきらめる気はなかった。

「諦めないぞ、諦めてたまるもんか！絶対発動させて、みんなのところに戻るんだ！」

side out

「と言う訳で、さっきみたいに左手を発動させようとしてたんだ」

先ほど、聖王教会に来ていたヴィヴィオに会ってしまい、隠すこともできなかったので今までのことを説明していた。

最初のほうこそヴィヴィオは左手がなく、大人モードになっていたアレンがちょっと怖かったが、今は慣れてしまい普通に接していた。

「ヴィヴィオ」

「なに？」

「このことは、誰にも言わないでほしいんだけど、いいかな？」

「えっと、いいけど、どうして？」

「こんなみつともない姿じゃ、僕が会いたくないしさ。それに左手がないって知ったらみんな心配するでしょ？だから、言わないでほしいんだ」

「うん、わかった」

ヴィヴィオは約束だよと付け足し、笑顔でアレンに返す。

それを見たアレンはありがとつと言いながらヴィヴィオの頭をなでた。

その後、今更だが、今日来た理由をヴィヴィオに聞いてみた。

「今日はイクスのお見舞いに来たんだ」

「ちなみに聞くけど、ヴィヴィオはイクスと話せる？」

「やだな〜アレン君、眠ってるイクスとお話はできないよ」

「やっぱ、そうだね（眠ってるイクスと話せるって、僕は何者なんだ？）」

一人自分が何者なのか疑問に思いながらも、諦める。

どうせ、このままやつても発動できる見込みがないので、今はヴィオと一緒にイクスのお見舞いに行くことにしたアレンだった。

第16話 形亡き王の左手（後書き）

次回はいまだに未定。

感想、誤字脱字あれば尾根がします。



## 第17話 王と王の約束（前書き）

ついに50000PV突破！

これからもがんばっていききたいと思います！

## 第17話 王と王の約束

「発動!!」

また聞こえてきた掛け声。

左手の復活はまだまだ先そうだ。

理由としては、左手が霧に戻るのがだんだん速くなってきているということだ。それとついでに集中力が持たない。

最初は肘の辺りまで集めることができていたのだが、今では手首はおろかその手前までしか集まらなかった。

「うわっ、とと、危な」

またはじかれて後ろのほうへ飛ばされそうになる。

ギリギリのところで踏ん張るが、左手はまた霧に戻ってしまった。

「やっぱり何度やっても駄目か」

「セインさん、そんなやる気をそぎ落とすようなこと言つのやめてくれませんか？」

「え、だってトータルで100回行ってんじゃないの？失敗した数」

「うっ!」

ヴィヴィオも見守る中、結局復活しなかった左手。

もしかしたらカリムやシャッハが言っていたように、もう元に戻ら

ないのかもしれない。

だが、それでもアレンは諦めていなかった。  
何度も何度も挑戦し、そのたびに失敗していた。

「あ、そうだ」

「今度は何ですか？」

「アレンがヴィヴィオと組み立ててやれば？」

「はい？」

「ほら、あれだよ。アレンがピンチになれば復活するんじゃないかな  
って」

意外や意外。

またセインが珍しいことを言った。  
しかも中々にいい発案でもあった。

とりあえず、どうする？とヴィヴィオと相談。

別にかまわないし、運動用の服はバッグに入れてあるそうだし。

イクスのお見舞いじゃなかったのかな？と勘違いしそうだったのは  
アレンだけだろう。

「大人モードのほうがいいかな？」

「どっちでもいいよ。やりやすい方で」

じゃあ大人モードと言って横に浮いていて、ヴィヴィオや他人の動

きをなぜか真似するデバイス『セイクリットハート』を使い、大人モードになるヴィヴィオ。

今まで何度か見たことがあるが、組み手などをするときの視線で彼女を見るのは初めてだった。

紅と緑のオッドアイに、金髪の再度ポニー。

母親であるなのはに似た姿だが、残念ながらアレンはなのはを知らない。それはわからない。

準備運動を終え、構えたヴィヴィオ。

それに反応し、最近ご無沙汰でもあった左目の前にスコープが現れ、目の色が黒と赤ので、変わる前の目の色が反転したような目になる。

もちろん、能力は健在。

魔力量他が簡易的に映し出される。

バトルスタイルは『カウンターヒッター』

相手の動きを読んで強力な一撃を入れるタイプだ。

この目の能力について、アレンはすでに諦めていた。  
今は絶対発動するなら、むしろ活用してやるといった勢いで使っている。

ちよつと卑怯かもしれないが、これがアレンの戦い方になったのだ  
しょうがないと言えましょうがないだろう。

「じゃ、追い込んで活路作戦、開始と行こうか」

「お互い、手抜きはなしだからね！」

side out

結果から言おう。  
結局は失敗だ。

一番最初にヴィヴィオのカウンターパンチがヒットしてアレンの中の何かに火がついたが、勝ち目はなし。  
いくら左目のおかげで動きが予想できるといっても、やはり左手がないから防御も何もない。全部右手だけなんて無理だ。

途中途中で左手を発動させて防御するが耐えきれず霧に逆戻り。  
アレンに反応することはあっても、やっぱり反応するだけで何も起こらず、結局は霧のまま漂ってるだけ。

「ふう、もう夕方か」

「あ、ホントだ。もう帰らなきゃ」

「それなら外まで送ってくよ。今日は組み手の相手をしてもらったからね」

外を見たヴィヴィオは大人モードを解除し、帰る用意を始めた。  
アレンも外を見るが日が落ち始めていて、きれいなオレンジ色の空になっていた。

違う部屋で着替えを済ませたヴィヴィオが戻ってくる。  
バチバチとティムキャンピーとセイクリットハート改めクリスはにらみ合っている。なんでデバイス同士なのに喧嘩してるのかがよくわからなかったが、何かあったのだらうと1人納得するアレンだった。

「じゃ、また今度」

「うん。あ、でももうそろそろテスト期間だから」

「ああ、そつか。ならテスト終わったとだね。それと、あの事は絶対に誰にも言わないでよ」

あの事とは左手のことだ。

テスト前なのにそんなこと言えば集中できなくてテストどころじゃなくなるだろう。それだけは本当に迷惑をかけてしまうので言わないでよかった。

ヴィヴィオは約束を破るような子じゃない。

そう思っていたから言わないでと約束したのだ。

少し話をしながら歩いているともう外だった。

アレンはヴィヴィオの姿が見えなくなるまで見送り、手を振っていたのだった。

「ん？黒い蝶？」

side out

『お前、騎士だな？』

「な、なんだお前は！」

真夜中の暗闇の中。

黒い物体の中から出てきた人影。

右手には蝶が止まっでいて、騎士甲冑のような姿。  
おかしな姿をしているものの、形は人だ。

『貴様の命、もらうよ』

「な！？ぐあああ！！！」

目の前にいる騎士らしい男性の心臓をひと突き。  
血が流れ出し、一瞬で彼の命はなくなり息絶えた。

黒い蝶はまた飛び始め、人影に何かを伝える。  
それを確認した人影はひとり笑いだした。

『ふはははは！！！！まさか死んでいなかったとはな！良いね、今度こそ殺してあげるよ』

『アレン・カミタ』

人影と蝶は再び闇に消えたのだった。

## 第17話 王と王の約束（後書き）

次回はまだ未定。

ちなみにもう少ししたら異世界合宿のターンです。

それと最後に出てきたあれ。

ぶっちゃければ犯人です。

先に公開している挿入絵を見た人なら容姿はわかりますよね。

あ、AKUMAじゃないですよ？普通にロストロギアです（あれ？これネタばれじゃね？ま、いつか）

誤字脱字、感想あればお願いします。



第18話 うっかりな聖王様 第2騎士王暗殺の黒幕（前書き）

今回も挿入絵あります。

ぶっちゃけたら次回も挿入絵あります。

## 第18話 うっかりな聖王様 第2騎士王暗殺の黒幕

「え？異世界合宿？」

定期的に来てくれるようになったヴィヴィオからの言葉に少しばかり驚くアレן。ちなみに今は前にセインが思いついた『追い込んで活路作戦』を実行中。

横ではまたもティムキャンピーとクリスがにらみ合って喧嘩中だ。

「うん。テスト明けの4日間を使って知り合いのいる無人世界まで」

今更だが、今の学校はテスト期間。

勉強も大事なはずなのに来てくれているヴィヴィオにアレןは本当に感謝していた。

本人は「ちゃんと勉強してるから大丈夫！」だそうだがちょっと不安。

自分のせいで赤点を取ったらどうしようかと思っていた。

「スバルさんやティアナさんたちも来るし、楽しいから。アレן君もどうかなくて」

「でも、僕は今左手ないから」

「みんな気にしないって。それにもかいたらだけど、行って模擬戦とかやったら復活しちゃった、とかあるかもしれないよ？」

「・・・考えておこうかな」

ヴィヴィオの勢いに押され、とりあえず保留にする。

みんな気にしない、と言っていたが気になるのはアレン自身だった。自分ひとりだけ何もできないなんていやだった。

模擬戦なんて左目の能力があっても、左手がなきゃ誰にも勝てるわけがなかった。それに復活するきざしもないのに、突然復活することはないだろう。

「そろそろ夕方だし、ヴィヴィオはもう帰んなきゃだめなんじゃない？」

「あ、ホントだ！じゃ、また今度ね！」

「うん。また今度」

side out

同日の夜。

今夜は数日ぶりにユウが来てくれた。

今まで仕事がたまってこれなかったらしい。

アレンは最近のことを話し、左手はまだ戻ってないことを伝える。

「そっか。まだ戻らないか」

結果を聞いて残念がるユウ。

確かに左手を何度も発動しても全部失敗はがっかりだ。

せっかくの『追い込んで活路作戦』も無意味に感じてきてしまう。

だがそれでもアレンは笑顔だった。

大丈夫、絶対復活させてみる、と意気込んでいて見ていて元気になった。

そんなアレンを見ていて、ユウはある提案をした。

「異世界合宿に行ってみない？」

「え？」

「職場での知り合いとか、スバルとティアナも来る。他にもその知り合いの娘さんとその友達とかが来るって。行ったら左手が復活するかもしれないから。ね？」

正直に言うと、アレンは驚いていた。

ヴィヴィオにも言われたことをユウにも言われた。

たぶんユウの言っている合宿と、ヴィヴィオの言ってる合宿は同じものだろう。

アレンはどう返せばいいかわからなかった。

行けば何か得られる。でも左手がない状態ではみんなとは会いたくなかった。

「母さんは、行くの？」

「うん。だから、アレンも一種に行こ」

「・・・僕は、いいかな」

アレンが出した答えはNO、つまりは行かないということだ。左手がない状態でみんなに会う。それはたまらなく嫌だった。

こんなみつともない姿で、何もしないで見てるのは嫌だった。

「母さんだけ行ってきたよ。僕はここで待ってるからさ」

その答えにユウは驚いた。

どうしても嫌なの？と聞くが、アレンは小さくうなずいた。

それなら自分も行かない、と言おうとしたがアレンが先にしゃべりだし、その言葉は発せられなかった。

「母さんが帰ってくるまでには左手復活してるだろうからさ。そしてたらお帰りって言うてね。僕もお帰りって言うから」

そういうアレンは笑顔だったが、目尻に涙が見えた。

本当は行きたい。行ってみないと合宿を楽しみたい。

でも今のままじゃ何もできず、何もやらずに終わってしまう。

それだけは本当に、絶対に、何と言われようと嫌だった。

その気持ちを理解してくれたのか、ユウもわかったと行ってくれた。本当なら自分も行かずにアレンのそばにいてあげたいと思ったが、本人の気持ちを考えると、それは逆にやってはいけないことだと分かった。

だからユウはアレンの願いを聞きいれた。

「じゃ、お言葉に甘えよっかな」

「僕に分まで楽しんできてね」

side out

あれから数日。

左手の復活はいまだに遠い。

テスト期間も終わりを迎え、ついに合宿出発となった。

向かうは無人世界カルナージ。

ミッドチルダとの標準時差は約7時間。

クラナガンの次元港からの臨時次元船で約4時間かけて向かい、合宿の始まりとしては中々に良い始まり方だ。

そして現在はその無人世界カルナージに到着している。

ここに住む住人、メガーヌ・アルピーノとその娘ルーラーことルーテシアと挨拶を交わし、4日間お世話になることに。

ちなみにユウがアレンの母親であることは最初の挨拶で言っていた。

アレンがこれない理由をちよつとごまかしながらであるが簡潔に言ったところ、みんな納得してくれたようだ。

「じゃ、大人組みは着替えてアスレチックに集合ね」

『はい！』

ユウとなのはの教導官2人の指示で動く大人組み。

ちびっこたちはノーヴェとルーテシアに続いて川へ向かった。

「アレンさんもこれたら良かったですね」

「アレン君は左手ないから行きたくなかったって言っていましたよ」

『え？』

「あ」

うつかり口を滑らしてしまったヴィヴィオだった。

side out

一方、ミッドチルダ聖王教会。

現在の時刻は午後7時ぐらい。

カルナージでの時間は12時で昼ごろだろう。

明かりのついたいつもの大きめな部屋でアレンは1人左手の復活を試みていた。

今のところ最高で手首までしか行かない。

やはり元には戻らないだろうかと思ってしまうが、諦めずに挑戦あ  
るのみだと自分に言い聞かせる。

だがさすがに疲れてきたので外の空気を吸いに休憩を入れた。

「今頃みんな楽しくやってるんだろうな。僕らはお留守番だね」

肩に乗っているティムキャンピーはアレンの顔を見る。

いつも通りの表情だが、少しさびしそうだっ

どうにか元気を出してもらおうと1人(?)で試行錯誤するが中々、  
というかまったく思いつかない。

パタパタと回っているがやっぱり何も思いつかなかった。

「あ、また・・・」

振り返り、戻ろうとした時だった。  
目の前を先日見かけた黒い蝶が通りかかる。  
その時だった。

ザワツ！

後ろから何かただならぬ気配を感じたアレンは反射的に振り向いた。  
空を裂くように現れたそれは、暗闇でも十分わかる形をしていて、  
そして物凄く黒く、闇に溶け込むような色をしていた。  
その頂から人の影が現れた。

「っ！？」

その姿を見るなり左目が反応する。  
スコープが現れてはいるが、何も映し出されない。  
魔力は感じられるが、それ以外、リンカーコアもバトルスタイルも  
何も見れなかった。

人影は手に蝶を止め、ぎょろりといくつもの目を開いた。  
騎士甲冑のような姿をしていて、人の形ではあるが、何かがおかし  
かった。

『やあ、こんばんわ・・・アレン・カミタ・・・』



**第18話 うっかりな聖王様 第2騎士王暗殺の黒幕（後書き）**

次回、ついにアレン君の左手が進化して復活します！

名前は次回出されますが、『神ノ道化』じゃありません（最終的にこれですが）

誤字脱字、感想あればお願いします。

## 第19話 第2騎士王復活（前書き）

今回も挿入絵あります。

そしてついにアレン君の左手が復活します！

## 第19話 第2騎士王復活

「ヴィヴィオ、それどういうこと!？」

「そんなの聞いてないよ!？」

アレンが黒い人影に出会う少し前。

ミッドの時間でいえば大体午後4時、カルナージなら朝9時ぐらいだろう。

川へ遊びに行く途中、うっかり口を滑らせ、アレンの左手がない状態がばれてしまいみんなに問い詰められるヴィヴィオ。

どうにかごまかせないかと必死に考えるが、考えつくより先にみんなから来る質問でさらに考える暇がなくなってしまう。

「アレンがどうかしたのか？」

「何か楽しそうな話？」

前の方でルーテシアと話していたノーヴェとルーテシアが後ろを振り向き、後ろ歩きしながら話に混ざってくる。

ヴィヴィオは笑いながらごまかそうとするが、残念なことにリオが言ってしまった、さらにこの2人にまでばれてしまった。

「左手がない・・・か」

「第2騎士王に関する資料あったかな？」

「でも、あいつはあいつで結構強いし、大丈夫なんじゃねえか？それに聖王教会にいるなら、オットーとデイドもついてるだろうし、

事故は起きないだろ」

ヴィヴィオの捕捉で話の内容を理解する2人。  
オットーもデイドも元ナンバーズ。  
実力はあるし、護衛としても心強い。  
安心して大丈夫なはずだ。

だが、それでもノーヴェは1人不安だった。

つい最近ギンガとスバルから聞いた話で、たくさんの騎士が重傷を負う、もしくは殺害されているという事件があった。

今のところ八神家から被害者は出ていないが、家族のほとんどが騎士なので狙われる可能性が高い。

そして、カミタ家もまたしかりだ。

第1騎士王末裔のユウ。

同じく第2騎士王末裔のアレン。

2人とも騎士だ。

それも王ということで、さらに狙われる可能性が高くなる。

今回アレンが左手を失ったのも同じ犯人がやったことではないのかと、ノーヴェは1人思っていた。

「ま、そんな簡単に見つかって殺されるとかはありえねえよな」

「? ノーヴェ?」

「ん? ああ、いや、なんでもねえよ」

side out

『ふむ、『白髪』に『奇怪な左目』そして『左手がない少年』。確認しよう、お前がアレン・カミタか？』

黒い人影はアレンの大まかな特徴をあげ、確認してくる。  
複数の開いた眼球はギョロギョロと動き回り、時に一斉にアレンをにらむ。

形は人。

全身を騎士甲冑のようなものを纏っている。  
そこはまだ”普通”だ。

違ったのは手には丸く短い筒のようなものがあり、胴が物凄く細く、普通なら2つしかない目がいくつも開き、灰色と黒で統一されていた。

「何者ですか？」

『おっと、これは失礼。我が名は『ナイト・ハンター騎士狩』古代ベルカのとある騎士嫌いの人物が作った自立型ロストログリアだ』

自己紹介を終えた人影　ナイト・ハンター（以降ハンター）は礼儀正しく、ペコリとお辞儀をする。

自立型ロストログリアなんて聞いたことも見たこともない。

古代ベルカの騎士嫌いなんてほとんどの人間を否定するようなものだ。

そして今のアレンの状態は最悪。

左手がなくて戦えず、逃げようとすれば捕まるだろう。  
勝ち目が限りなく、いや絶対的に皆無だ。

『さあ、私を楽しませてくれよ』

「っ!？」

突然辺りの空気が変わった。

ハンターが結界を張ったのだろう。しかも封鎖領域。  
これで逃げることも、誰かを呼ぶこともできなくなった。

『いくよ』

両手の手首に付いた筒から紫色の魔力刃を出すハンター。

その場から一気にアレンの懷まで”飛んだ”。

そしてにやりと不敵な笑みを浮かべながら最初の一撃を入れる。

「あああああああああ!!!!!!」

魔力刃で一突きではなく、スコープを貫きながら左目を”えぐった”。

右手で抑えるが痛みが減ることはない。むしろ増えていた。  
大量の血が出て、左目は完璧に使いものにならなくなる。  
よろよろと立ちあがるのがやっとだ。

『その左目、相手のステータスがわかるんだろう?そんな厄介なものがあると詰まんないじゃないか』

危険を感じたアレンは痛みを無視してその場から移動した。  
どこでもいい。どこか遠くへ。

今の状態じゃ勝つなんてできんないのは当たり前。捕まれば確実に殺される。

カチャカチャと足音を立てながら後を追うハンター。それほど余裕で、本当にこれを楽しんでいた。

「は、発動！」

恐怖から体の震えが止まらなくなるアレン。

必死に左手を発動させるが、集まるどころかちよつとも反応してくれない。

こんなに怖くて、こんなに冷たいのは初めてだった。だからどうすればいいかわからなかった。

「動け！動けよ！」

叫んでも何も起こらない。

どんどん近づいてくるハンターを見、また恐怖する。またその繰り返し。

やがては追いつかれ、殴られ、蹴られた。

「がはっ！」

『ほらほら、早くなんとかしないと死んじゃうよ？』

倒れたアレンの首を片手で持ち上げ、手に力を入れていく。気がつけばそこは聖王教会付近の川だった。

そこで、何を思ったかハンターは、持っていたアレンを川へたたきつける様にして沈める。

「くばっつ!!」

『このまま水の中で窒息死するか、首をへし折られて死ぬの、どっちがいい?』

アレンからの返事はない。

右手だけが水の外でもがいているが次第に意識が朦朧としてくる。酸素が足りない。空気がほしい。

もがいてももがいても力が出ない。

水が左目に入ってきてさらに痛みが増してもっと力が出なかった。

もう駄目だ・・・

そう思った時だった。

『何!?ぐわっ!!』

突然ハンターの腕が自分の首から離れた。

上半身だけを起き上がらせ、精一杯空気を吸う。

だけど何か違和感のようなものが消えていた。

「え、嘘・・・でしょ・・・?」

違和感があつた場所は左手が”あつた”場所。

その違和感が消え、あつたのは見覚えがあるようなないような十字架が描かれた真っ黒な左腕だった。

そしてもう1つ。

先ほどまでにハンターがいた場所に白い何かが浮いていた。バリアジャケットで作ったあの仮面のついた白いマント。

それが自分で勝手に動き、アレンを守っていたのだ。



「お前は・・・僕の・・・」

アレンに向き直り、顔を見つめる仮面。

それを見たアレンは黒い左手で仮面に触れた。

その瞬間、周りがまばゆい光で包まれる。

『な、なんなんだお前は!!』

ハンターは荒々しく叫ぶ。

こんなの想定外で、予想外だ。

こんな左手がなかった子供に負ける何んてあり得ない。  
そう考えていたからだ。

光が晴れ、アレンの姿が見えてくる。

左手は前の巨大な瓶の詰めではなく、黒くシャープな鉤爪。

仮面のついた白いマントをたなびかせ、えぐられた左目は何事もなかったように再生され、2つのスコープを出現させていた。

「僕は、道化・・・右は白、左は黒の2色の道化・・・今日からこの武器の名は」

> i 3 0 5 2 4 — 2 0 5 4 <

「  
クラウン  
黒白道化だ」

## 第19話 第2騎士王復活（後書き）

次回は戦闘描写から。

そしてその後意外なことに・・・。

誤字脱字、感想あればお願いします。

## 第20話 落ちる王

「ティム」

静かに相棒の名を呼ぶ。

その言葉にすぐさま反応し、ティムキャンピーはアレンの方へと止まった。

それを確認すると、アレンは白いマントだけを消した。

発動しているのは黒い左手と白い右手、そして仮面の部分だけだ。

「セットアップ。バリアジャケット再設定」

一瞬だけ光に包まれ、バリアジャケットを身にまとったアレンが出てくる。前のバリアジャケットとほとんど大差ない。だがアレンはちょっとした違和感を覚えた。

そう、髪型だ。

後ろの方を触ってみると跳ね上がってる。

前髪も軽くだが二つに分かれてしまっている。

『お前、本当に何者だ？道化？第2騎士王じゃないのか？』

「僕は僕だ。日常の中の僕も、白と黒の2色の道化としての僕も、第2騎士王としての僕も、全部まとめて僕だ」

『そうか、なら私は狙った獲物は絶対に逃がさない狩人だ。今度こそお前を殺す！』

「来い！さっきまでの怯えた僕じゃないってのを見せてやる！」

ハンターが一気に跳躍し、アレンに飛び掛かりながら魔力刃を展開して思いっきり振りぬいた。それを最小限の動きでかわすアレン。

復活した左目のスコープにはハンターのステータスが映し出されていた。

逆さペンタクルの呪いが強くなった証しとして、人じゃないものでも見えるようになったのだ。

『のお！！』

かわされた攻撃の後、すぐに追い打ちをかけるようにまた振りぬく。アレンはかわすではなく、左手で受け止めた。

ギリギリと力を入れてくるが、なぜだか押し返せない。それが不思議に思い、ハンターは困惑していた。

薙ぎ払い、いったん距離をとるアレン。

そして再び白いマントを展開させ、仮面をつけた。

「クラウン

」

マントを大きく広げ、それを身にまとった。

さらにそこから蜘蛛の糸のようなものをハンターに向けて大量に伸ばした。

「ベルト！！」

素早い動きで糸はハンターを襲う。

両腕で数本は薙ぎ払うことができたが、何分数が多い。

全部さばき切るには腕が2本じゃ足りなかった。  
最終的にはハンターの両腕を刺し貫き、もぎ取った。

これでは狩る前に逆に狩られる。

そう確信したハンターは、ある行動に出た。

それは逃亡だ。

今の状態では万に一つ勝ち目がない。

ならばいったん引いて体制を立て直さなければならない。

狙った獲物は逃がさないというプライドに反するが、今は仕方がないといえるだろう。

ここに来るとき出した黒い建造物。

それを再び出現させ、逃げようとした時だった。

「逃がさない!!」

その何ともわからない建造物にアレンが入り追ってきたのだ。

騎士狩、ということならば当然ユウが狙われる。

今逃がしたら行くすべのないアレンはどうしようもできなくなる。  
だからこそここで仕留めるため追いかけたのだ。

黒い建造物に入ると風景は一気に変わった。

暗かった周りは一気に明るくなり、どこかの町のような場所に出る。  
だが人の気配はちょっともない。

左目も反応しないし、無人なのだろう。

チラチラと左右を見て回すが、今は関係なかった。  
とどめがさせる状態ならば今がチャンスなのだから。

見逃すわけにはいかない。

「これで終わりだ！エツジ

」

『来るなああああ！！！！！！』

「 エンド！！！！」

とある家のドアを開けて逃げようとするハンターを一撃。  
まばゆい光を伴い、巨大化した左手で胴体を引き裂いた。  
ドアの外に出ると同時に、ハンターは爆発し跡形もなく無くなる。

やった！

そう思ったアレンだが、何かが変だった。

「え、緑？」

目の前には緑。

ところどころに違うものは見えるが、一番多いのは緑だった。  
それと屋根が見える。たぶん家だろう。

そして最後に落下してる感覚。

風が下から当たってくるあたり本当に”落ちているのだろう”。

「え、ちょ、落ちてる！！？」

アレンは現在落下中だった。

side out

無人世界カルナージ。

アルピーノ親子が住むこの世界でヴィヴィオ達は合宿に来ていた。

時間は大体12時のお昼頃。

ミッドで言うなら午後7時過ぎだろう。

川遊びを終えた子供メンバーも戻ってき、大人メンバーが昼食の料理をして、準備が整った。全員でテーブルに料理を並べ始めている時だった。

「ん？」

「・・・て！・・・どい・・・！どいて！どいて！どいてえええ  
！！！」

空から声が聞こえてきたのだ。

しかも聞きおぼえがある声。

だがまず空から聞こえるのがおかしかった。

気がついた数人は空を見上げる。

確かに人影が見えた。

白いマント。

左手は鉤爪が付いている。

ついでに言うなら近くに羽がついた何か。

「みんな、料理守って！」

なのはの掛け声でテーブルに置いてあった料理をすぐさまどける。  
落下中の少年はこのままでは確実に落っこちるだろう。  
何を思ったか、少年は”構えた”。

「へ？」

「クラウン・ベルト！」

ちょっと遠くだが、家の周りにあった木の一本に何かを伸ばした。  
そしてそのまま一気に伸ばしたものをまきとるようにするが、今度は木に思いつきり頭から突撃してしまった。

木はびくともしていない。

むしろ無傷だといつてもいいぐらいだ。

その少年は木の下で頭を押さえている。

「あ、頭が・・・割れる・・・父さんにばっくられたときのこと  
思い出しちゃうよ・・・」

爪のついた左手で頭を押さえる。

血は出てないから大丈夫だが、頭の痛みは相当なものだろう。

バリアジャケットを解除し、普通の格好に戻る。

だが左手は真っ黒だった。

「はあ、ここどこだ？なんか違う場所に来ちゃったみたいだけど。  
タイムキャンピーはどっか行っちゃうし、僕ここから動けないな」

そんなことを呟いている時だった。

心配で見に来たユウが後ろから声をかける。



「ア、アレン・・・？」

「っ！か、母さん？な、なんで母さんがここに　　い！？」

最後まで言い終える前に言葉は遮られた。

ユウが少年　アレンに抱きついたからだ。

こういうときはどうしていいかわからないアレンはテンパっていた。

「お帰り・・・」

「・・・た、ただいま」

泣きながらユウは抱きつく力を強めた。

正直言って心配してくれるのはうれしいが、痛い。

でもそんなことより、お帰り、と言ってくれてうれしかった。

それだけで痛いなんてどうでもよくなったのだ。

side out

再び昼食の準備を再開。

あの少年　アレンはユウに任せ、他はちょっと急ぎ気味だった。

「そう言えば、さっきのアレンの声に似てなかった？」

「そうね。でもあつちからこつちには普通これないでしょ」

スバルとティアナの他愛もない話。

アレンを心配するが、次元移動出来なければ何の意味もない。

そもそも空から降ってくる時点であり得ないのだから。

「あ、ユウさん戻ってきた」

「さっきの子もいるみたいね」

森の方からユウが戻ってくる。

その隣には先ほどの少年がいて、2人話している。

だけどその少年の左手は真っ黒で、少しおかしかった。

だが顔に見覚えはあった。

白髪の少年、なんてアレンしかない。

大きいのは大人モードだからだろう。

「あ、あれ？アレン・・・だよ？」

「そ、そうね。でも、どうしているのかしら？」

若干困惑する2人。

他の子供メンバーも気付き始めてそちらに目をやる。

もちろんすぐにアレンと気がついた。

「あ、あははは。な、なんていうか、事故でこっちに来ちゃいました」

苦笑いするその少年はまさしくアレンだった。

## 第20話 落ちる王（後書き）

ハンターが使っていた建造物「ノアの方舟です。使えるのはハンターが他のロストロギア『方舟の鍵』を持っているからです。

（後付けごめんなさい）

それと、他に使えるのはアレンだけです。

理由は・・・まあ、奏者ですから。

ちなみに、いまさらですがアレン君の今の状態（服装）はアジア支部にしているころのあれです。

動きやすさメインだったからこれがいいかなーって思いました。

誤字脱字、感想あればお願いします。

第21話 速き騎士と道化の騎士王（前書き）

今回はアレン君vsエリオ君。

好きな子にいいとこ見せようとかんばります。

## 第21話 速き騎士と道化の騎士王

「ということですよ・・・」

『あゝ、まあ、しょうがないわよね。事故で”次元移動”しちゃったんだから』

「本当にすいません。戻るにしてもどうしようもないんで」

あの後、昼食を取ってから次元通信でカリムと連絡。

謝罪他を言って、今に至る。

問題なのは来てしまった事や移動方法じゃない。

移動してしまったことだ。

無許可での次元移動は禁止、犯罪とされている。

その次元世界内だけでの移動であればまだ大丈夫なのだが、ミッドからカルナージに事故で来てしまったとはいえ犯罪は犯罪。いくら身内のユウでも目をつぶるかと言われれば難しい。

カリムも同じくだ。

いくら管理局に籍を入れていて発言力があると言っても無理だ。

そしてここにいるのはと執務官のフェイトもまたしかりだ。

友人の息子だから助けてあげたいが、見逃すことできない。

「そつえば、服とかどうするの？」

「あ、そこら辺は大丈夫です。ティムの内部空間にスぺアを入れてあるんで」

服の心配は大丈夫だ。

ティムは自分の中に少し小さいが内部空間を持っている。  
服のスペアと食糧を入れており非常時に対応できるようにしてあった。

ついでに言うとティムは自分が食べた物を服に入れている内部空間とは別の内部空間に入れている。

その食べたものがどういう原理かわからないが魔力に変換され、その魔力を貯蔵することができるのだ。

『じゃあ、今回は特別に見逃しましょうか』

『へ？』

カリムの言葉にアレンだけではなく他のメンバーも反応する。  
まさか見逃すという言葉が出てくるなんて思ってもなかったからだろう。

その言葉を聞いて一番うれしかったのはアレンとユウだ。  
ユウはアレンが助かったという意味で喜んでいる。  
アレンもみんなに迷惑をかけないで済むと一安心だった。

「ありがとうございます！」

『ところで、左手はもう大丈夫なの？』

「え、あ、はい。まだ感覚はボケてますが、もう大丈夫です。あ、でもイカサマはまだ無理かな」

そう言って左手を見せるアレソ。  
真っ黒くなり、埋め込まれていた手のひらの十字架はなくなっている。

その代わりに白い十字架が手のひらに描かれていた。  
普通の人との違いは色と指の形ぐらいだろう。

今までの赤い腕は接合部分がでこぼこしていたの比べ、今の状態は完璧に違和感なく接合されている。なぜか左肩の周りに模様が描かれているが気にしてはいけなさそうだ。

『では、後は大人みなさんによろしくお願いします』

「本当にありがとうございます」

カリムの言葉に礼を言うユウ。

なのはとフェイトもとりあえず今回は見逃すということに納得してくれたようだ。

「じゃ、私たちは午後の訓練と行こうか」

「アレソはどうするの？」

「どうするって言われてもなあ・・・川があるみたいだけど僕は泳げないし、訓練に混ぜてもらえるなら混ぜてもらいたいな」

「って言ってるけど、どうする？」

「ユウさんが教えてるんですよね？ならスバルとかと模擬戦してもらって実力を見たいです」

「気合で頑張らせていただきます！」

side out

そんなこんなで午後の訓練。

アップとして準備運動からランニング。

そこからいつものアレンの訓練メニューを一通りやってエリオと模擬戦という予定になった。

まず驚いたのはアレンの体力の多さ。

WFメンバーですら今でもアップで息を切らし始めるのに対して、アレンはけろりとしていた。さらに自分のメニューでやつと息を切らすといった感じた。

片手とう立腕立て500回。

もも上げ1000回。その他大量。

さすがはユウの息子で愛弟子といったところだ。

ユウも増やしすぎてたらこうなっちゃた、と本人もこうなるのは予想外だった。

とりあえずアップも終わり、準備は完了した。

セットアップしたエリオとの1対1の模擬戦。

ギャラリーが増えてきたのはしょうがないのだろう。

アレンはアインハルトに、エリオはキャロにいいところを見せようと気合が入ってきている。

しかもお互い騎士で、先輩後輩見たいな関係になっている。さらに負けられなくなってきた。



「そういえば、そのマントはどこから出てきたの？ バリアジャケット？」

「いえ、これは僕のレアスキルです。『黒白道化』は僕の魔力を使つての左手の武器化とこのマントの形成です」

「へえ」

「2人とも、そろそろいいかな？」

「はい」

「じゃ、始め！」

なのはの合図で模擬戦スタート。

左目の能力はやっぱりずるい気がするがもう気にしない。

それと、エリオのバトルスタイルは『スピード』を使ったものだ。

まずはエリオが様子見で強めに一撃を入れた。

それを左手でガードはせず、かわしてさらに動きを読もうとする。

動きは悪くないと思いつつもそこからさらに追撃。

今度はガードはせず、アレンは構えた。

そして左手のエッジを内側に斬った。

攻撃技が来る！

そう思ったエリオは、その攻撃が出される前に攻撃しようとするためさらに加速。だが、その突撃はなにかに”ぶつかってはじかれた”。

『！？』

それに全員が驚いた。

エリオがぶつかったのはがれきや建造物などではない。  
アレンが作ったシールドだった。

「クロス・グレイヴの進化版かな？」

アレンの最強の技『クロス・グレイヴ』は通常なら一度に横薙ぎと振りおろしを決める、当たれば一撃必勝の大技。それが防御用の技になっていたのだ。  
驚くのも無理はないだろう。

「じゃあ、今度は僕から行きますね！」

その場から一気に跳躍。

エリオの目の前まで行き、左手を駆使して武器をはじいて隙を作ろうとする。

だがエリオもやられっぱなしではない。

そこは先輩の意地で負けじと速さで翻弄しようとするが、アレンの左目がエリオの追いかけるせいで動きが読まれやすくなる。  
それを知らないエリオはなお大変だろう。

「開いた！」

一瞬のすきを突き、今度は左手を外側に斬った。  
今度は攻撃技。クロス・グレイヴの様だが一度しか腕は振っていない。通常なら2度振る動作が見られるはずだ。”前までの”クロス・

グレイヴならば。

ギリギリのところでは防御に成功したエリオの前には光る十字架があった。先ほどの防御のときとの違いは、十字架のデザインだろう。

「あれ？防御されちゃったか」

「ア、アレン、い、今何したの・・・？」

「え？一撃で二撃入ただけだよ？」

「どうやって!？」

「え？だから、こうやって」

近くの瓦礫に向けて軽く一振り。

すると瓦礫はいとも簡単に四等分されてしまった。

一瞬で、しかも呼び動作なしで2回の行動をしたアレン。

いろんな意味で手先が器用だと改めて思い知らされたユウだった。

**第21話 速き騎士と道化の騎士王（後書き）**

次回はまだ未定。

とりあえず今回の模擬戦の結果から始まります。

誤字脱字、感想あればお願いします。

## 第22話 王の子守唄（前書き）

今回は物凄く普通な回。

終盤にアレン君がピアノを弾きます。

もちろんあれ、14番目の子守唄です。

歌詞を載せたいですが載せたら消されるんで頭の中で流してくださいね。

## 第22話 王の子守唄

「ハア、もう・・・無理。全然勝てない・・・」

結局模擬戦はアレンの負け。

途中からエリオがソニックムーヴを使ってきたり、戦法を変えて肉を切らせて骨を断つ作戦にしたが威力的に耐えられなかったりと残念。

だがアレンはアレンで何かいいことがあったようで・・・。

「覚えた・・・」

何を覚えたのかわからないが発見ありの様だ。

その分左目を酷使しすぎたのか、先ほどから押さえている。

「大丈夫？」

「あ、はい。あれ覚えるのに左目じゃないと追い切れなかったんで」

「？ まあ、あんまり無理しないようにね」

ちよつとよくわからなかったが本人は大丈夫そうだ。

押さえている左目を外すと目は閉じたままだったがそのうち開くだろう。

いまだに大人モードを解除できないからバリアジャケットを解除しても外見は変わらず。別に解除してもいいと思うが、左手が体に完璧に馴染んでない状態で体の大きさを変えればまたひどいことになるだろう。

そう考えるとアレンはぞつとして解除できなかった。

「さて、模擬戦は終わったし。私たちはウォールアクトしょっか」

「僕は一旦休んでもいいですか・・・？もう、体力が・・・」

「もちろんだよ。お疲れ様」

休憩の許可をもらって早速休憩。

現役局員のウォールアクトを見て何か発見がないかと思うがあんなりなさそうだ。

いつの間にか左目も開いて、大分体力も回復してきた。

改めて左手を空に掲げ、眺める。

前の不安定な赤い腕よりも安定した黒い腕。

赤かった十字架は白に変わった。

まだ怖がられるかもしれないが、前に比べたらまだましだ。

姿かたち、全部が変わった。

大きく、堅く、速く、雄々しかった銀の爪から、普通の大きさ、前とは比べられないぐらいの堅さ、前なんか比じゃないぐらいの速さをもった黒い鉤爪になった。

「また初めからやり直しか」

side out

一方、ルーテシア達の方では。  
ちびっ子たちはルーテシアの古代ベルカ関連の資料を見ていた。

聖王に関する事。  
覇王に関する事。  
騎士王に関する事。

ユウが知っていること以外のことがたくさんあった。  
一番多かったのはやはり騎士王関連のことだろうか。

「うわあ、すごい。昔の第2騎士王とアレンの容姿がすごいに似てる。というか瓜二つだよ」

「ホントだ。顔の模様も全部同じだ。性別が違っただけみたいだけど、これは似すぎだね」

古代ベルカ最強の騎士の1人、第2騎士王『ネア』  
第1騎士王との違いは、コンビネーションの強さ。  
覇王『クラウド』とのコンビは古代ベルカ最強。  
勝てる者はなしとされたほどだ。

だがその生涯は悲しいほど短い。享年19歳。  
そんな若さでこの世を去ってしまうほど、彼女は弱かったわけじゃない。

アレンと同じ左手を持った彼女は、耐えられなかったのだ。  
左手の進化に、第2騎士王自身の進化に。

進化の最終地点はすべて死。つまり、ネアは左手に殺されたのだ。

そう考えると、アレンも同じ道をたどる可能性がある。



今の年齢から考えるとあと7年。  
もしかしたらもつと早いかもしれない。

「アレンさん、少し心配です」

「そうですね。でも今と昔は違うから大丈夫だと思いますよ」

「だといいいのですが」

先ほどやってきたアインハルトも心配気味。  
ヴィヴィオも心配はするもののプラス思考。

「ま、死なれちゃ困るのはみんな同じってことだろ」

「あれ？ジャン、もしかしてアレン君のこと心配してるの？」

「バツ、お前な！俺は負けっぱなしだから勝ちたいだけなんだよ！」

ジャンの発言にリオがちやかす。

予想通り、素直じゃないものの心配はしているようだ。  
それを見てヴィヴィオやコロナもくすくすと笑っている。  
このやり取りは意外とお決まりなようだ。

「あら？もう夕方？早いな」

「夕飯のお手伝いしなきゃね」

ふとルーテシアが窓の外を見たらすでに日が落ち始めていて、空は  
すでに綺麗なオレンジ色になっていた。

時間がたつのは意外に早いな、と感じながらも見ていた資料を棚

に戻し始める。そんな中でこんな話が。

「アレンのことすごく心配してるみたいだけど、アインハルトってアレンのコツ好きなの？」

「え、ええ!？」

「そうなんですか？」

「え、えつと、そ、その・・・!!」

「ものすごく動揺しちゃってるわね。図星ってやつ？」

女の子に似合っている会話だった。

side out

「眠れないな・・・」

同日夜中。

時刻は大体0時前ぐらいだろうか。

みんなもう寝静まっているが、アレンは眠れないでいた。

夜空に浮かぶ月は三日月。

見上げれば明るく、綺麗だった。

こんなに眠れないのはすごく久々だ。

昔、家で1人膝を抱えていたことを思い出す。

『子守唄を歌ってあげよう』

ふと頭に浮かんだその言葉。

手を差し伸べてくれていたのは前の母親ではなく、銀髪の女性。その場に誰もいないはずなのに聞こえてきた歌は優しかった。

どこからともなくピアノの音が響き、声は透き通っていた。

一度しか聞いたことがなく、今の今まで忘れいたが、今さっき思い出した。

「あ、ピアノ……」

ティムキャンピーを連れ、歩いていると月明かりに照らし出されたピアノを見つけた。部屋のドアは開いていて、引いてくれと言わんばかりだ。

だがアレンは生まれてこの方一度もピアノを弾いたことがない。大丈夫なのだろうか。

ポロン……

鍵盤に触れる。

綺麗な音が響き渡る。

頭の中に歌詞が、楽譜が浮かんでいった。

今なら弾けるんじゃないか。そう思いピアノを弾き始めた。

頭の中で誰かが歌う。

今弾いているメロディに合わせてくれている。

しばらく弾きながら歌っていると、声をかけられた。

「アレんさん・・・？」

「アインハルト？」

アインハルトだった。

アレんの弾くピアノの音と、歌声で起きてしまったのだろう。気にはしていないようだが、それよりも気になることがあった。

「泣いてるんですか・・・？」

「え？」

泣いてる。

そう言われ、すぐさまぬぐった。

確かに涙が流れている。何が悲しいのかわからないが涙は止まってくれなかった。

窓に映った自分の顔を見れば、左目の模様が細くなり、発動状態に似たようになっていいる。そしてやはり涙が止まらない。

「あの、続き、聞かせてもらってもいいですか・・・？」

「え？ああ、うん」

中断していた演奏を再開する。

メロディは風に乗れり、歌は透き通る。

優しい子守唄は、アレんの心に響いた。

そしてさらに涙が止まらなくなってくる。

歌声は徐々に涙ぐんでくるがやめようとはしない。  
涙で鍵盤がばやけてくるが、気にせず弾き続けた。

なんで涙が出るんだろう。

なんでこんなに懐かしいんだろう。

そう思っていた時だった。

突然アレンの後ろに白く光る” なにか ” が出てきた。

「これ、なに・・・？」

その夜は一旦放置して、寝よう。

朝になったらみんなに言えばいい。

そう思ったアレンとアインハルトは部屋に戻ったのだった。

## 第22話 王の子守唄（後書き）

最後の方がなんか適當すぎる？  
気のせいかな？

次回は方舟をどうにか消して陸戦エキシビジョン。  
アレンはティアナチームです。

## 第23話 陸戦エキシビジョン 01

「やっぱり眠れないなあ」

アインハルトが寝たのを確認したアレンは、またあのピアノがある部屋に足を運んでいた。ティムキャンピーはもう頭の上でぐったりだ。

たぶんだが、もう真夜中でみんな絶対に起きない。

突然出てきた”白い何か”はまだある。

どうにかして消せないだろうかと考えながら、またピアノを弾いている時だった。

「あ、消えた。もしかして、僕の思いに反応するとか？・・・開<sup>オープン</sup>」

ポロン・・・

試しに適当な音を出しながら「もう一度出てこい」と願う。すると、先ほど思ったようにアレンの言うことを聞くようだ。

とりあえず、もう一度消して、またピアノを弾き始めた。

なんでだか、ピアノを弾いている間だけは何も考えずに済んだ。

side out

翌朝。

みんな目を覚まし始めた。

大人メンバーが先に、子供メンバーが後に。  
だが1人足りず、違和感を感じていた。

「あれ？アレン君は？」

「昨日、寝る前はいたのに」

ヴィヴィオやコロナがアレンがいないことを言う。  
確かに、昨晚の寝る直前まではいたはず。  
寝た後はどうかかわからないが、たぶんいたはず。  
そんな、疑問を浮かべている時だ。

（ （ （

どこからか、ピアノの音が聞こえてくる。  
少しすると歌声も聞こえてきた。

その声の主はまさしくアレン。  
甲高い声はみんなの耳に入ってきた。

子供メンバーと頼まれたスバルは声のする部屋へ。  
扉をあけると、アレンの背中姿があり、ピアノを弾いていた。

「っ、ああ、もう朝か」

『え？』

「あれ？みんな、どうしたんです？もしかしてもう朝ご飯の準備始めちゃってるのか？」



振り向いたアレンの左目は発動状態に似ていた。  
目の周りの模様は細くなり、右目には泣いた跡。  
ぶっちゃけてしまえば、昨晚アインハルトが見た状態と同じ状態だった。

しかもさっきの発言からすると徹夜の様だ。

アインハルトは黙っているが、少し心配そうだ。しかもかなり。

「ふう、ティム。朝だよ」

頭の上で眠っているティムキャンピーを軽くつつく。

ちよっとびっくりしたか、すごい勢いでアレンの周りを飛んでいる。

「あははは、ごめんごめん。ちよっと強すぎたね」

昨日、というか少し前のアレンと何かが違った。

いつもは元気でどこにでもいそうな普通の男の子。

でも今のアレンは、どこか違う、落ち着いた雰囲気があった。  
見てない間に何があったのだろうとスバルは少し心配だった。

side out

「全員そろったね。じゃ、試合プロデューサーのノーヴェさんから  
！」

「あ、あたしですか!？」

朝食をとり、全員が集合した。

そしてフェイトの紹介？でノーヴェの挨拶。

「えー、ルールは昨日伝えた通り赤と青の7人チームに分かれたフ  
イールドマッチです。ライフポイントは今回もD S A A公式試合用  
タグで管理します。後は皆さん怪我をしないよう正々堂々頑張りま  
しょう」

『はーいつ  
』

2日目の予定は陸戦エキシビジョン。

これが一番の目的とも言っていていいだろう。

ちなみにアレンはユウが変わってくれたので人数的にはばっちりだ。  
もっと言ってしまえば赤組のティアナチームだ。

「じゃあ、赤組、元気に行くよ！」

「青組も、せーの！」

『セーット・アープー！！』

赤組

ティアナ：C G    L I F E    2 5 0 0

フェイト：G W    L I F E    2 8 0 0

ノーヴェ：F A    L I F E    3 0 0 0

キャロ：F B    L I F E    2 2 0 0

アレン：G W    L I F E    2 8 0 0

アインハルト：F A    L I F E    3 0 0 0

コロナ：W B    L I F E    2 5 0 0

青組

なのは：C G    L I F E    2 5 0 0  
スバル：F A    L I F E    3 0 0 0  
エリオ：G W    L I F E    2 8 0 0  
ヴィヴィオ：F A    L I F E    3 0 0 0  
ルーテシア：F B    L I F E    2 2 0 0  
リオ：G W    L I F E    2 8 0 0  
ジャン：F A    L I F E    3 0 0 0

『それでは』

『みんな元気に・・・』

メガーヌとユウがモニター越しで試合の合図の準備。  
後ろでガリユーとフリードがゴングを鳴らそうとしている。  
そして2人の声と同時に・・・

『『試合開始~~~~!!!!』』

ジャアアアアアンツツ!!!!!!

「ウイング・ロード!!」

「エアライナー!!」

ゴングと同時にアスレチックじゅうに魔力でできた足場が広がる。  
すぐにその足場に乗る、走り出す影が六つ。  
子供チームが先走っているのだろう。

「行くよ、リオー!ジャン!」

「オツケー！」

「了解！」

先に走り出したのはヴィヴィオ。  
それに続いてリオとジャン。

逆側からはアレンとアインハルトの年上2人に続いて年下のコロナのメンバー。ユウやなのはいわく意外にバランスが取れてるチームだそうだ。

「アインハルトはヴィヴィオを、コロナはリオをお願い」

「承りました」

「任せてください！」

ヴィヴィオvsアインハルト F A V S F A  
ジャンvsアレン F A V S G W  
リオvsコロナ G W V S W B

第23話 陸戦エキシビジョン 01（後書き）

今回からしばらくバトルメイン。  
途中挿入絵を入れるつもりです。

誤字脱字、感想あればお願いします。

第24話 陸戦エキシビジョン 02（前書き）

今回は挿入絵あります。

ああ、これで挿入絵のストックは終わりかあ・・・。

新しく描かなきゃなあ・・・。

## 第24話 陸戦エキシビジョン 02

ジャンvsアレン F A V S G W

「雷衝一幻!!」

最初に戦った時と同様、先に仕掛けたのはジャン。迫りくる斬撃と雷は、前にみたものとは比べ物にならない量。たくさん練習を積み重ねてきたことがわかる。

アレンも前と同じように、一撃で振り払おうと思った。

だが、今の左手は巨大化させることも、伸ばすこともできない。ジャンはそれがわかっていて同じことをしたのだろう。

（受け身に入った！足を止めてくれればガードしたときの着撃時に回り込んで斬れる！）

左手を構え、内側に斬ろうとするアレン。

その姿は前日のエリオとの模擬戦時に使ったガード版クロス・グレイヴそのもの。しっかりとそれを見ていたので学習済みだ。

六幻を握る手にさらに力が入る。

考えが浅い、とはこういうことを言うのだろう。

第一にアレンがいつ内側に斬る動作がガードといっただろうか。第二にアレンがクロス・グレイヴをしてくるという確証はない。もしかしたらエッジエンドや、他の技かもしれないのに。そしてアレンの行動はジャンの期待をことごとく裏切った。

確かにクロス・グレイヴではあった。

しかし、使ったのは両方。ガードと攻撃技だ。

左手を内側に斬った後、すぐに体の向きを変えて外側へ斬る。

一回目はガードで、二回目が攻撃だ。ジャンの攻撃は盾に当たり、回り込んで攻撃しようとしたジャン自身は先読みをされていたか、クロス・グレイヴの餌食に。

ジャン

L I F E 3 0 0 0 - 1 8 0 0 = 1 2 0 0

「クラウン・ベルト!!」

体制を立て直そうとしてるジャンへ追撃。

右手首から飛ばした無数の蜘蛛の糸のような鞭は、煙で前が見えていないジャンに直撃してしまう。

ジャン

L I F E 1 8 0 0 - 9 0 0 = 9 0 0

「よし、あと少し!」

『アレン、ストップ!』

「ええっ、あ、はい」

ライフが4桁を切ったジャンをさらに追撃をしようとするアレンを止めるティアナ。深追いはかえって自分のライフも削る可能性もあるし、あのライフだとジャンは一旦下がらないといけないからだ。



ちょうど、1人余る形になってしまったので、ティアナはアレンにある行動に出てもらった。

『この隙に先陣突破で斬り込んで！青組のCG、なのはさんのところに！』

「了解です!!」

side out

ヴィヴィオvsアインハルト FAVSFA

「ソニックシューター・アサルトシフト！ファイア！」

魔力弾をアインハルトへ向けて飛ばすヴィヴィオ。

アレンに対して取ったジャンと同じ作戦。アインハルトが受け身に入ったところを回り込んで攻撃するつもりだ。

迫りくる魔力弾にアインハルトはゆるりと脱力し、構える。

足を止め、少しの間目を閉じて集中する。

そして目を開き、行動に出た。

「いつ!?!」

アインハルトが取った行動は避けでもなければ防御でもない。

そう、それは受け流しだ。

その行動を見てヴィヴィオは驚きを隠せない。

これは反射でも吸収放射でもない。  
本当に受け止めて投げ返す技だ。

魔力弾の弾殻を壊さず、手のひらで受け止めているアインハルト。  
最終的にはすべての魔力弾を自分のものにしてしまった。  
そしてそのすべてを一つに集め、持ち主のヴィヴィオに押し返すと  
言わんばかりに投げ返す。

「霸王流・・・旋衝破!!」

ヴィヴィオ

L I F E 3 0 0 0 0 - 8 0 0 = 2 2 0 0

（反射技!？）

考えている余裕はない。

技を受けてライフが削られる中、さらにアインハルトの追撃が来る。

空中で地面にたたきつけられ大量に削られる。  
だがカウンターには成功した。

ヴィヴィオ

L I F E 2 2 0 0 - 1 0 0 0 = 1 2 0 0

アインハルト

L I F E 3 0 0 0 - 5 0 0 = 2 5 0 0

（あのタイミングでのカウンター・・・ヴィヴィオさんはやっぱり  
すごい）

『アインハルト、そのままヴィヴィオの足止めお願い！今、アレンがなのはさんのところに向かったから！』

「（アレンさんが？1人で大丈夫なんでしょうか）わかりました」

side out

リオvsコロナ GWvsWB

「炎龍！」

まとわりつく炎龍を物凄い音を立てながら粉碎するコロナとゴライアス。

思いつき叩きつける要領で炎龍を殴り、拳は地面にめり込んだ。

「雷龍！」

立て続けに今度は雷龍を送り出す。

地面にめり込んだ右腕を裏拳を繰り出しながら引き抜き、雷龍をかき消す。この素早いゴーレム操作は誰にも真似はできなさそうだ。

気がつけば目の前にリオの姿がない。

後ろに気配を感じ、すぐさま次の行動へ移る。

ビキビキキッ！！ゴオオッ！！

ゴライアスの上半身が徐々に動き始め、次の瞬間には回転をしてリ

才の接近と攻撃を許さず、懐に入っていたリオを殴り飛ばした。これぞ回転パンチ。目が回るだろう。現に止まった状態のゴライアスの肩でコロナは目を回していた。

「こ、このパンチは乗ったままだと危ないかも？」

『I also think so.』

（同感です）

リオ

LIFE 2800 - 1100 = 1700

瓦礫の中から炎と雷の柱を立てながら出てくるリオ。

二つの変換資質は伊達じゃない。

さすがにやられっぱなしは生にも合わない。

『Her damage is less than the expectation.』

（予想よりもダメージが少ないです）

「リオ、防御もうまいんだ」

感想はさておき、次に備える。

体制を立て直したリオは早速構え、身体強化を使いながら突っ込んでくる。

「轟雷砲！！」

操作をしているコロナ狙いかと思いきや、別の場所を狙ってくる。狙うは足と、その足場。どんな巨体でもバランスが崩れればただの

大きな人形と何ら変わらない。

見事足場の破壊に成功し、バランスを崩すゴライアス。片膝をつき、右手で全身が転ばぬよう押さえる。だがり才はその右腕を両腕で思いっきり掴み

「よいっ

しょおーっ！！！！！」

背負い投げを決めた。いや、ただの投げか？

どちらにしろ、あの巨体のゴライアスを投げ飛ばしたのだ。物凄いかいり機といえるだろう。コロナもその愛機の『ブランゼル』も驚いている。

『Your friend is very powerful.』

（マスターのお友達は力持ちでいらっやいますねえ）

「ブランゼル、そんなのんきな！」

side out

なのはvsアレン CGvsGW

現在アレンはなのはのもとへ移動中。

魔力の足場を伝って走っていくよりも、建物を飛んで移動した方が早いことに気がつく。

通信は常に怠らない。

左目で全員の大体の位置を把握できるが、声までは聞けないので通信を使う。

『ティアさん！ルーちゃんが何かたくらんでいます！』

『あの子の悪だくみは洒落にならないのよね。アレン！聞いてたわよね！向こうの作戦の要は間違いなくなのはさんよ！全力でぶち当たって止めなさい！』

「わかってますって！黒と白の道化、最後まで踊らさせてもらいますよー!!」

目に見えてくるのは栗毛のサイドポニーに白いバリアジャケット。杖を持ち、射砲支援を行っているセンターガード。

『エース・オブ・エース』高町なのはだ。

「なのはさん、手合わせお願いしますー!!」

「喜んで引き受けましょうー!!」

> i 3 0 5 2 5 — 2 0 5 4 <

## 第24話 陸戦エキシビジョン 02（後書き）

楚良「あとがきコーナー！」

アレン「おお、すつごく久しぶりなんじゃ？」

楚良「いやあ、すっかり忘れてた。とりあえずさびしいから書いところかなって思っ。あ、質問コーナーは健在なのでお便りくださいね？」

アレン「えっと、現在陸戦エキシビジョン中ですね。次回、僕のはさんとの対戦ですか」

楚良「うむ。アレンが『覚えた』と言っていたものが発揮されるぞ」

アレン「そういえば、4巻は買えたんですか？もう10月なんですよ？」

楚良「大丈夫、すでに購入済みだ。ちなみに今日は俺の誕生日」

アレン「あー、おめでとうございます（棒読み）」

楚良「みたらしの量減らそうかな」

アレン「うわあ！ごめんさいごめんなさい！」

楚良「まあ、今回はここまでにして次回予告！」

アレン「陸戦エキシビジョンも急展開！アレンがまさかあの技を！」

？ジャンがまさかのアインハルトと対決！？何が起こるかわからない！まだまだ続くぞエキシビジョン！」

楚良「誤字脱字、感想あればお願いしますね。あ、それと質問コーナーにも」

アレン「では、また次回」

楚良&アレン「「まっ たね」」



第25話 陸戦エキシビジョン 03 (前書き)

今回は予定を変更してアレンvsなのはだけ。

アインハルトvsジャンはまた今度書きたいと思います。

第25話 陸戦エキシビジョン 03

なのはV S アレン C G V S G W

「青組C G 高町なのは、各員に報告。間もなく赤組G W アレン君と接触。射砲支援が止まります。ティアナとキャロの支援攻撃に要注意！」

『了解！』

「アクセルシューター！弾幕集中」

なのはへ近づいて行くアレン。

左目が反応し、嫌な情報を与えた。

『砲撃手』『集束』『魔力【多大】』

これでもかと思うぐらい砲撃を使う人間には必要なものがてんこ盛り。

なのはのバカ魔力はまだまだ健在のようだ。

そんななのはに対して、アレンは億してない。  
むしろどう戦えば勝てるかうずうずしていた。

「新技行ってみようか！」

左手に魔力を集めた。

そして指輪に似た王冠が大量にエッジの先まで現れる。  
そこへ、なのはが弾幕用の誘導弾を放つ。

だがアレンはそんなの気にせず、左手を思いっきり振りかぶった。

「クラウン                      エッジ！！！」

それはまさしく鞭。

なのはの弾幕はすべてアレンの攻撃で相殺された。

「あら？結構な量撃つたのに一回で相殺？」

「はあっ！！」

大量の弾幕をすべて相殺し、なのはとの距離を一気に詰めた。  
インファイトを決め込み、猛攻を仕掛けるが、すぎて防がれる。  
まるですべて読まれているように。

（すっごい。こっちの手の内を読んで攻撃してきてる。左目の呪い  
って言うってたけど、頼り過ぎてない。ユウさんが教えてるだけはある）

防御と解析。

こう言うときのなのはは楽しそうだ。

だが防戦一方で、距離を取らなければ反撃は望めないだろう。

「（読まれるな・・・でも                      ）                      左手ばかりに気を  
取られすぎですよ？」

「っ！？」

基本、アレンは左手でのラッシュを使う。  
右を使うことなんてあまりない。

そして特徴的な左手に目が行くため、右はカウンターとして、とても入りやすくなっている。

アレンの言葉通り、なのはは左手しか見えてなかった。左手のエッジというトリッキーな戦い方には対処が難しい。当然、目立つものに目がいく。人としては普通の行動だ。

バキィッ！

なのはめがけて渾身の右ストレート。だが手ごたえがない。そして何か違う感触。そう、例えるなら壁を殴った感じだ。

「!？」

右手の拳に巻きつくのは魔力の鎖。しかも1本や2本じゃない。4本で器用に絡みついている。

『バインディングシールド』

なのはの接近戦闘で使う必勝戦法。捕まえた瞬間距離をとり、砲撃でたたき落とす形が出来てしまった。

「ぐっ、この！」

「エクセリオン」

砲撃の体制にはいるのは。防御。している暇はない、しても防御ごと持て行かれる。回避。捕まっているから動けない。

逃げ場は完璧につぶされた。

後は砲撃が来るのを待つことしか許されない。

「（どうする。このままじゃ・・・あ、そういえば。まだ、方法はある――！）サンダー」

逃げることに防御ができない。

なら残る選択肢はただ一つ。

そう、攻撃だ。

運よく相殺できれば、バインドも外れる。

相殺できなくとも、ダメージ軽減もできるはずだ。

アレンは左手に魔力をため、とあるものに変換させる。

バチバチと進む電気は薄い水色。はやてが氷結魔法を使うときと同じ要領で、アレンは魔力を電気に変換させていた。

「バスターー！！！！」

「レイジ！！！！」

放たれた砲撃に対し、アレンが使ったのは『サンダー・レイジ』

元はフェイトが小学生時代から使い、さらに受け継がれてエリオと変換資質で『電気』を持った2人が使っていた技。

アレンが前日に、覚えた、と言っていたのはこれのことだろう。

真正面から、右手をバインドされている状態で左手を振りかぶる。

バチバチとアレン本人でも想像以上の雷を纏った左手で、ほぼ力任せの半分以上投げやりで地面へ向けて砲撃を”そらした”

「え・・・？」

それを見ていた全員が驚いた。

あのなのは砲撃を、バインドをかけられた状態でそらしたのだ。しかもサnderレイジを使ったことから、同チームのフェイト、敵チームのエリオはみんな以上に驚いている。

「解けた！」

バインドが解けたのを確認し、横の瓦礫に向けてクラウンベルトを伸ばした。

次の攻撃の狙いを定めさせないよう、止まっては動きを繰り返す。徐々に距離を縮め、一気に跳躍。また左手に魔力を溜め始める。

「エッジ・エンド」

「ストライク・スターズ！！」

ドゴオオオンツッ！！！！

当るか当たらないかギリギリの距離で、零距离砲撃。

アレンは桜色の光にのまれ、地面へ叩きつけられた。

アレン

L I F E 2 8 0 0 - 2 7 4 0 " 6 0

ライフ100未満なため、治癒が行われるまで活動不可

ライフ2800を一撃でほとんど吹き飛ばすのは。

確実に決まったと思ったが、意外にも粘られてしまったようだ。

（最初のはうまく調整できなかった。でも運よくそらせたけど、も

しそらせなかったら・・・それに、急いで防御に回って、受け流すどころか飲み込まれた。あれが本物の砲撃か・・・次は勝てるかな？)

また新しい目標ができた。

魔力を他のものへの変換の調整。

今よりもちゃんとした強靱な防御。

そして砲撃用の対策と、なのはへのリベンジ。

「まさかエリオのサンダーレイジをコピーするなんて。びっくりだなあ」

「なのはさん！」

「？」

「お手合わせ、ありがとうございます！！！」

大の字で倒れるアレンは、右腕の拳をなのはに向けて礼を言う。  
また新しい目標を作らせてくれて、相手をしてくれて、経緯を評して今の状態で出来るお礼の仕方を取ったのだ。

「うん。またやろうね」

返事を返したなのははまた射砲支援に戻る。  
それを見届けたアレンは召喚魔法でキャロの元へ呼び寄せられた。

第25話 陸戦エキシビジョン 03（後書き）

楚良「あとがきコーナー」

アレン「あれ？なんか短くないですか？」

楚良「うん、まあ、うん。アレンとなのはの戦闘かいてたらそれだけで2000文字以上行ったからいいかなって思っ」

アレン「僕にあんな予告までさせといて、裏切ったんですね？」

楚良「ごめんなさい！！」

アレン「ま、みたら追加で手を打ちましょう。ただし僕は、ですけどね」

楚良「いやさ、最近忙しいんだよ。プリント30枚やったり、双う乳絵描いたり出さ。あ、そういえば、インターミドルに入るとようやくアレンが（容姿的な意味で）オリキャラっぽくなるぞ」

アレン「と、言いますと？」

楚良「うむ、髪型を少し変えようかと思ってな。アホ毛とかつけたりして」

アレン「まあ、とりあえずその事は後にして、次回予告お願いします」

楚良「ひどい！まあ、いいや。ごほん。白熱するエキシビジョンも



後半戦！数の均衡が崩れ、2on1に突入！まさかの異色コンビが誕生するかも！？（あくまで”かも”です）そしてついにスターライトブレイカーが放たれる・・・！！」

アレン「現在、あとがきコーナーではお便りを募集しています。まあ、質問コーナーだけなんです。コーナー案も受け付けていますので、遠慮せずにお問い合わせしますね」

楚良「誤字脱字、感想もあればお願いします！」

アレン「では、また次回」

楚良&アレン「「まっ たね」」

第26話 陸戦エキシビジョン 04（前書き）

何回も予定変更しません。

まあ、他のところを書いてないだけで、そんな予定変更ってわけじゃないですけど。

とりあえず毎回アレン君のところしか書いてないような気が・・・。  
今回もアレン君のパートだけですし。  
どうしたらいいのかな・・・。

第26話 陸戦エキシビジョン 04

リオ&ルーテシア GW&FB

VS

キャロ&アレン&アインハルト FB&GW&FA

「防護バリアで守るから、2人ともそこでじっとしててね！」

「ですが・・・」

「僕はもう戦えますよ」

現在アレンとアインハルトが治療中。

アインハルトはヴィヴィオとの1on1の時、ジャンに乱入されてライフを大ア場に削られてしまった。

まさか前中衛の2人がそろって回復中だなんて、少し情けないと反省中。

さらにこの状況で目の前には敵チームメンバーが2人。

戦えな2人がいる状態では実質キャロ1人で戦うことになっていた。

アレン 治療中

LIFE 60+1940=2000

アインハルト 治療中

LIFE 90+500=590

（なら、時間稼ぎの手伝い。それと、出来るだけアインハルトから離れるの）

（了解です！）

アレンのライフはもう十分戦えるまでに回復した。

それならばと、キャラは念話で聞かれないように頼む。

時間稼ぎ、ということは何か秘策があるのだろう。

そしてアインハルトをこの場に残して敵を遠のかせる。

時間稼ぎで何かをした後、残ったアインハルトが相手に斬り込むのだろうか。どちらにせよ、出来るだけライフは温存してもらいたい。

「黑白道化！」

そうとなったら自分もできるだけ防御に徹する。

出していなかったマントを展開させ、仮面を付けた。

この状態ではスコープが出てきてはいないが、仮面の目の部分にレンズのようになっていて、未だに発動である。

それに少し驚きながら、アレンは瓦礫にクラウンベルトを伸ばして先に移動を始めたキャラを追いかけた。

「クラウン・ベルトッー！」

「アルケミック・チェーンッー！」

場所を移動しながらの牽制攻撃。

別に当てなくてもいいから2人をあまり離れさせないで、がキャラの頼みだ。マント全体から放たれる蜘蛛の糸のような鞭は無造作にリオとルーテシアを狙う。

さらにキャロ自身も召喚魔法で無機物操作を行う。  
捕縛用の魔法『アルケミック・チェーン』

アレンと同じように大量の鎖は大まかな動きで迫った。

「当然ない、当然ないっ」

「なら、無理やりにも当てます!! クラウン」

ルーテシアのダガーやリオの炎龍と雷龍やらをかわしまくり、先ほどのなのはとのバトルのときに使った技を構えた。

爪についた王冠は徐々に数を増やし、やがては爪を飛び出す。  
だがそれでも王冠は爪の軌道に沿ってさらに増え続ける。  
そしてアレンは鞭を振るように左手を振った。

「エッジッ!!!!!!」

上空真上からの巨大鞭の一撃。

その間をやすやすとかわされるが、地面は大変なことに。  
文字通り、上空から放ったため地面には大きな爪痕が。  
まるで巨大な獣がなにかしたようだ。

「まだまだあつ!!」

さらに空中で体制を立て直しながら無数のクラウンベルトを放つ。  
それと同じタイミングで、キャロもアルケミックチェーンを使う。

「つつふふ」 当然ないよんっ」

「そりゃ、そうですよ。これらは・・・」

「当てるためじゃなくて、撃墜のための布石だもんね」

「ナイスです！キャロさん、アレン君！」

自信満々のキャロに、口元が笑ってるアレン。

そしてその言葉通り、むこう側声が聞こえてきた。

その声の主はコロナ。

さらにはコロナが乗っているゴライアスは腕を構えている。その腕はやがてはものすごい音を立てながら回転を始めた。

「ゴライアス、パージブラストツ！！ロケット          パーパンチ  
ツツ！！！！！」

ゴオオツ！！・・・ドゴオオオンツツ！！！！！！

回転しながらゴライアスの巨大な岩の拳が飛んできた。しかも考えられないスピードで。

「「へっ？」」

それを見た2人はさも当然のように不抜けた声を出す。

ほどなくして巨大岩石ロケットパンチ（アレン命名）は2人に直撃した。

「「うそーーーーっ！！！！？？」」

ルーテシア

L I F E   2 2 0 0 〓 l i f e o v e r

リオ

L I F E 1700"l i f e o v e r

「撃墜成功！」

「勝利のVッ!!」

「ふう・・・」

2人撃墜成功。

これは相手チームに打撃を与えられるはずだ。  
おかげで3人とも油断している。

だがこの油断が戦場では命取りなのだ。

・・・キイインッ!!

「っ!?!」

1人即座に近づく物体に気付いたアレンはその場を離れる。  
ほどなくして・・・

カコーンッ!

「へうーっ!?!」

ビキッ!

「!?!」

キャロ

コロナ

捕縛されたことによりバインドが解除、または破壊されるまで行動不能

二発の魔力弾の内の一発がキャロの頭をとらえてキャロは撃墜。  
コロナは”桜色”の鎖により捕縛されて身動きが取れない。  
そうこれを行ったのは

「ありやー？アレン君には気づかれちゃったか」

「な、なのはさん、いつの間に！？」

「勝ったと持った時が一番危ない時！現場での鉄則だよ！」

桜色の魔力光はなのはだ。

もちろんアレンにも撃つたのだがやはり先に感付かれて回避された。

「ブラスター１ツ！」

愛機『レイジングハート』を構えたなのは。

魔法陣を展開し、そこに魔力が集まってい

そう、彼女の得意とする集束魔法だ。

『赤組生存者一同！なのはさんを中心に広域砲を撃ちこみます！』

やばいと悟ったアレンはアインハルトの元まで離脱中。  
そこにティアナの通信が入った。



合図で離脱しろ、とのことだがそんなにやばいのだろうか。  
アレンはなのはの集束砲を見たことがないので少し疑問。  
だが本気でやばいとティアナは言うので言うことに従った。

『スターライトー！！ブレイカーー！！！！！！』

マントを消していたアレンに容赦なく放たれた集束砲。

2人の最大にして最強の一撃『SLB』こと『スターライトブレイカー』

無防備だた状態のアレンに迫るそれはまさしく恐怖。

だがアレンは立ち止り、左手を3度も振った。

「さつきは1枚でだめだったけど、3枚でどうだあ！！」

> i 3 3 4 0 7 — 2 0 5 4 <

その瞬間、陸戦上全体が光に包まれた。

## 第26話 陸戦エキシビジョン 04（後書き）

楚良「あとがきコーナー」

アレン「はい、今回は陸戦エキシビジョン第4回でしたね」

楚良「なんやかんやで他の人のパートが少ないのはお許してください」

アレン「いやー、なんか僕すつごく頑張ってないですか？クラウンエッジ使ったり、クラウンベルト使ったりで」

楚良「まあ、飛行魔法ない状態だとクラウンベルトがすごい活躍するからなあ。だがしかあし！覚えたいと言っなら主人公補正で覚えさせようじゃないか！」

アレン「いや、別に良いですから」

楚良「あ、そう？え？いいの？空飛べるんだよ？引っ張られる感じじゃなくて、飛ぶ感じだよ？」

アレン「どこぞの異世界に行くんじゃないし、要りませんよそんなの」

楚良「方舟」

アレン「え？ちょ、マジですか？」

楚良「YES インターミドルの修行編でどっかに行ってもらいます！」

アレン「な、ならやりますよ！覚えたいですよ！頼みますよ！？」

楚良「ま、ユウさんたちのを見て学んだな」

アレン「ちくしょーっ！！」

楚良「さあ、次回予告だ！」

アレン「え、あ、えっと、ごほん！次回で陸戦エキシビジョンは終了！最後に残るのは誰だ！？スターライトブレイカーの光から出てきたのは・・・！？」

楚良「えー、現在あとがきコーナーではお便りを募集しています」

アレン「質問コーナーだけです！が待ってます。コーナー案もあればお願いしますね」

楚良「誤字脱字、感想もあればお願いします」

アレン「では、また次回」

楚良&アレン「「まっ たね」」

## 第27話 陸戦エキシビジョン 05（前書き）

今回はあとがきコーナーでアンケートがあります。  
読者の皆さま、ご協力ください。

第27話 陸戦エキシビジョン 05

スターライトブレイカー着弾後。

フェイト

L I F E 0

S L B 着弾直前にエリオの攻撃により撃墜

エリオ

L I F E l i f e o v e r

S L B - P S 直撃・撃墜

コロナ

L I F E 3 0

S L B - M R をゴライアスで防御するも防ぎきれず戦闘不能

「にゅ〜」

『i t i s s a f e m a s t e r ? 』

（大丈夫ですか、マスター？）

「な、なんとかね・・・」

なのは

L I F E l i f e o v e r

S L B - P S を相殺しきれず撃墜

「あーん！やられたあゝ！！！」

ティアナ

L I F E    2 3 9 0 - 2 2 8 0 〃 1 1 0

S L B - M R をなんとか相殺

「な・・・なんとか生き残った・・・」

スターライトブレイカー

『フロントムストライク』 『マルチレイド』

激突した2つの集束砲。

陸戦場全体が光に包まれるほどの威力。

セインのコメント通り、最終戦争、と言う言葉がぴったりだ。

「残ってるのは、私とあと・・・4つ！？しかも、2つ近づいてきてる    ってこの速度は片方はスバル！？」

「じゃなくてヴィヴィオです！」

「俺はスルーですか」

ヴィヴィオ

L I F E    1 8 0 0

スバルに庇ってもらいほぼ無傷

ジャン

L I F E 1 6 0 0

回復中にS L B - P Sの余波を受けるが生還

「ウソオ！？なんで2人も無傷！？」

スバル

L I F E 6 0

S L B - P Sからヴィヴィオを庇い行動不能

ノーヴェ

L I F E l i f e o v e r

S L B着弾後ヴィヴィオの攻撃により撃墜

「みたかレスキュー魂！」

「あー、もう、ちくしょう！！」

向こう側で動けない状況のナカジマ姉妹。

2対1で勝てるかどうか不安なティアナに、ヴィヴィオとジャンが容赦なく迫る。2人も残るなんて予想外だ。

クロスミラーージュで応戦するが巧みにかわされる。だが、残り2人はどっちのチームなのだろうか。

「「行きます！」」

「来なくていいから！」

あと一步。あと一瞬で攻撃が決まるところだった。  
そう、邪魔が入らなければ、だが。

「霸王                   「クラウン                   」

「「!?!」」

「空破弾（仮）!!」「エッジ!!」

アインハルトの攻撃がヴィヴィオを。  
アレンの攻撃がジャンを直撃した。  
最後に残っていた2人はこの2人だったのだ。

ヴィヴィオ

L I F E   1 8 0 0 - 7 0 0 = 1 1 0 0

ジャン

L I F E   1 6 0 0 - 9 0 0 = 7 0 0

アインハルト

L I F E   1 3 5 0

回復中にS L B - M Rの余波を受けるが生還

アレン



L I F E 1 1 0 0

三重クロス・グレイヴガードと黑白道化のマントでなんとか防御成功

「けほっ・・・3枚目にひびが入ったときは終わったと思った・・・」

「ティアナさんはやらせません。それと、アレンさん大丈夫ですか？」

「な、なんとかね」

「2人とも・・・」

「「はい？」」

ティアナを守ることに成功した王様コンビ。  
アレンのライフがちょっと少なめだが大丈夫そうだが後ろにいるティアナに声をかけられる。

「ごめん、さっきのでもうやられちゃった」

「「ええっ？」」

ティアナ

L I F E 1 1 0 - 1 1 0 = 0

ヴィヴィオの単発ソニックシューターで撃墜

「・・・よし、僕は何も見てないぞ」

「ええ！？ア、アレンさん！？」

「そんなことより　「雷衝一幻！！」　おっと」

話している途中、むこう側からジャンの攻撃が放たれる。

アレンは最初から来るとわかっていたが、アインハルトは違う。なのでとっさにアレンはアインハルトを持ちあげて回避してしまった。

すぐには気がつかなかったが、少ししてようやくわかった。アレンがやったのは俗に言うお姫様だっこ。

左手の爪でアインハルトを傷つけないように右手で脚を持ち、左手の手のひらで背中を支えている。それに気がついたアインハルトは恥ずかしくなった。

「ア、アレンさん！？」

「あ、ごめん。攻撃が当たりそうだったからとっさで。すぐ下ろすね」

「あ・・・」

「？　どうかした？」

「い、いえ、なんでもありません」

下ろすと同時にアインハルトは少し落ち込む。なんで落ち込むのかはアレンにはわからない。

しかし、今そんなことを考える暇はなかった。

体制を立て直した相手コンビが作戦会議をしている。

そんな暇をあげるのはアレンとしてもアインハルトとしてもいただけない。そのためアレンはすでに会話モードから戦闘モードだ。

「アインハルト、ジャンをお願い。ちょっとヴィヴィオを懲らしめないといけないから」

「あの、アレンさん？ものすごい笑顔なのはどうしてですか・・・？」

「アインハルト。約束は守らないとね？」

「え、あ、はい」

「じゃ、お先！」

side out

アインハルト vs ジャン F A V S F A

「リベンジさせていただきます」

「さっきは不意打ちだったからな。今度は正々堂々と真正面から叩く切る！」

魔力の道に沿い、走りながらジャンに迫る。

黒い刀型デバイス『六幻』を黒光りさせ、ジャンはそれに備えた。

最初、ヴィヴィオと戦っていたアインハルトのライフをジャンは不意打ちで大量に削り、無理やり後退させてヴィヴィオを助けていた。その後にティアナの『クロスファイア・フルバースト』をともに喰らい、アインハルト同様に後退する羽目になった。

「六幻・災厄将来『雷衝』」

」

六幻を握る力が強くなる。

アインハルトがギリギリまで近づいてくるのを待つ。

「『一幻』！！」

ヒュッ・・・バチィイツ！！

あえてアインハルト自身を切らず、すれすれのところを斬った。そしてその斬ったところから雷が放たれ、アインハルトの腹を直撃する。

アインハルト

L I F E 1 3 5 0 - 1 2 0 0 〃 1 5 0

「ぐ、う・・・！霸王・・・断空」

「ひ、左！？」

「 拳！！」

ドゴッ！！

攻撃を耐えきり、無理やり左手で拳を突き出す。  
それはみごとに無防備だったジャンの腹部をとらえ、放たれた雷ごと殴り飛ばした。

ジャン

L I F E 7 0 0 - 1 0 0 0 " l i f e o v e r

「ハア、ハア・・・か、勝った・・・」

## 第27話 陸戦エキシビジョン 05（後書き）

楚良「あとがきコーナー」

アレン「あれ？今回でエキシビジョンを終わらせる予定じゃなかったんですか？」

楚良「まあ、良いじゃないか。次回はアレンが活躍（？）するんだからさ」

アレン「なんでそんな疑問形なんですか」

楚良「まあまあ、そんなことはどうでもいいじゃないか。そんなことよりアンケートがあるんだぜ！！」

アレン「イ、イヤな予感しかشませんが・・・」

楚良「大丈夫だ！早速アンケートの内容を発表してくれ！」

アレン「あの、僕じゃなくてあなたがやるべきじゃ・・・」

楚良「・・・うおほんっ！えー、アンケートの内容は次の通りです」

アンケート

インターミドルの修行で方舟を使ってどこの世界に行くか。

1・無難に過去。なのはGOD的な？とりあえずA・S時代

2・いやいや、過去なら古代ベルカ時代だろ！！

3・斜め上を行ってリリなのじゃない世界でDグレ、もしくは他

4・全部なしで普通にミッドで修行

楚良「こんな感じですかね」

アレン「なーんか、全部イヤな予感しかしませんね。いや、冗談抜きで」

楚良「期限は・・・インターミドルの修行編に入るまでです。まあ、期限が迫れば報告しますので今のところ細かい日付はありません」

アレン「では、続いて次回予告です」

楚良「次回でようやくエキシビジョンも終了！アレンvsヴィヴィオ！どちらが勝つか！ヴィヴィオが勝てばアインハルトとバトル！？」

アレン「今回はお便り募集とかしらないんですか？」

楚良「まあ、別にいいんじゃない・・・？今までやって一通も来てないし」

アレン「あ、落ち込んでる」

楚良「とりあえず、誤字脱字、感想あればお願いします！あ、後アンケートも」

アレ「では、また次回」

楚良&アレ「「またね」」



第28話 陸戦エキシビジョン 06

アレン vs ヴィヴィオ GWVSFA

アインハルトがジャンを撃墜したところ。

未だに戦闘を開始していない2人。

それはどうしてだろうか。理由はこれだ。

「ア、アレン君？ど、どうしてそんなに黒いオーラを出してるのかな・・・？」

「どうして？あはは、ヴィヴィオは冗談がきついな。僕との約束を破っておいてそれはないと思うよ」

「ギクリ」う・・・」

そう、アレンが黒いオーラを出しながら言葉でヴィヴィオを責めているのだ。

初日にポロッとヴィヴィオが言ってしまったのをアインハルトから聞いていた。約束をしたのにも関わらず、ヴィヴィオはその約束を破った。

アレン本人、今ではあまり気にしていないのだが、さすがに何も仕返ししないで終わるのはつまらない。

たまにはそう言うのもいいんじゃないか（普通ならダメだが）

そう思ったアレンは、ヴィヴィオと当って倒すことにした。

「あ、アインハルトの方は終わったみたい。よし、僕も早々に終わ

らせようかな」

「ま、負けないよ!」

「素直に負けてくれると嬉しいんだけどなあ。ま、いつか」

「!？」

突然アレンが消えた。

いや、姿が見えなくなつた。

目にもとまらぬスピード。またもやエリオとフフェイトが使う『ソニック・ムーヴ』をコピーしたのだ。

魔力による加速、急停止がまだできないのでクラウンベルトで無理やり止めるつもりらしい。どちらにせよ姿が見えなければ攻撃はよけられなかった。

「!？」

ブウンッ!!

不意打ち、ではないがヴィヴィオの後ろからアレンが爪を振りかぶる。

だがそれをヴィヴィオは頭を下げて避けたのだ。

（避けられた!？）

「一閃必中」

「っ!？（防御!間に合わない!）」

「アクセルスマッシュ!!」

ゴウウツ!!

アレンの顎にヴィヴィオのアップーが直撃した。

アレン

L I F E 1 1 0 0 - 1 0 0 0 " 1 0 0

空中を待っているアレンの意識は朦朧としてきた。

アップーをもろに食らいすぎたせいだろう。

かろうじて見えるヴィヴィオの姿はぼやけて見える。

非殺傷設定でも痛みはひどかった。

「あ・・・(やばい、こりや、まずったな・・・でも、1人勝ちはさせないよ)」

左手の爪は解除されていない。

まだライフも、かすかだが残っている。

相討ちに持っていく気でアレンは意識だけで左手を動かした。

「え、嘘っ!？」

「エッジ・・・エン、ド・・・!!」

落ちてくるちょうどいいタイミングで左手を構える。

そして無理やり左手を振り抜き、ヴィヴィオを攻撃する。

ヴィヴィオも、まさか空中で反撃をしてくるなんて思ってもいなか

った。

避ける前に驚きが出て、アレンの攻撃を避けられずに直撃する。

ヴィヴィオ

L I F E 1 1 0 0 - 1 5 0 0 " l i f e o v e r

ドサッ・・・

アレンが落ちると、ヴィヴィオが倒れるタイミングは同じ。  
二つの音は重なって一つとなった。

『はい、試合終了ー！』

メガーンの声が通信で聞こえる。

ああ、勝ったのかと、アレンは一安心。

そのせいで気を失ったのは言うまでもないだろう。

結果

青組 行動不能1名 撃墜6名

赤組 行動不能1名 撃墜5名（ラストはアインハルト）

試合時間23分13秒

赤組に生存者がいるため赤組の勝利

s i d e o u t

「え、二回戦・・・？」

おやつ休憩中に気がついたアレンの第一声。

アインハルトとほぼ同じ様に、疑問符を浮かべながらキョトンとした顔をしている。

「あ、あれ？戻ってる」

ようやく体の異変にも気がついた。

大人モードがついに限界を迎えたか解除されている。

一瞬やばいんじゃないか、と思うがそんなこともなく。

別に何か起きるとか、そう言うのは全く感じられもしなかった。

周りの大人メンバー。特にユウは一安心。

無事子供の姿に戻れたということで胸をなでおろしている。

ちなみに服はティムキャンピーの内部に保管しておいたスペアを引っ張り出して着ていた。2着しかなかったが、ブカブカな服を着たり、何も着ないよりはまし。

運動用の服、と言うのがいろんな意味で功を奏したようだ。

「ソニックムーヴとサンダーレイジをコピーするなんて、驚いたよ」

「む、無我夢中で。やったら出来た、みたいな感じです」

エリオと一回戦目のプチ反省会。

コピーされた本人のエリオからすれば違う意味で完敗だった。

アレン本人も少し驚いている。

雷の操作の難しさ。ソニックムーヴの急停止などを簡単にやってい

たエリオとフェイトの実力が改めて本物だと確認するほどだ。

「二回戦ではフェイトさんに少しレクチャーしてもらったら、雷の使い方」

「あ、えっと、その」

「私がどうかしたの？」

アレンが少し遠慮気味に断ろうとしたタイミングで、フェイトが話しに入ってくる。噂をすればなんとやらはまさにこのこと。

何でもないです、と言おうとしたアレンよりも先に、エリオがフェイトに話を持ちかけてしまう。これにより二回戦目の序盤はフェイトとコンビで行動することになってしまった。

まあ、中盤から後半は別行動でいいらしいが、相手チームが同じようにコンビを出してくるかだけが不安だった。

「はあ・・・ティム、頑張ろっか」

大きくため息をつくアレンと、うなずいているティムキャンピー。いろいろな意味でティムキャンピーだけがアレンの味方だった。

第28話 陸戦エキシビジョン 06（後書き）

楚良「あとがきコーナー」

アレン「いやあ、やっと終わりましたねエキシビジョン」

楚良「うむ」

アレン「どうしたんですか？」

楚良「いや、最近中々小説が書けなくてさ。今回も一週間ぐらい前から書き始めてたのに今日更新だぜ？他の作品も中々書けなくて、ため息しか出ないんだよ」

アレン「・・・な、なんていうか、あれですね。スランプってやつですね」

楚良「たぶんな」

アレン「まあ、良いじゃないですか。一週間に一回は更新出来るんですから」

楚良「前はほぼ毎日投稿だったけどなあ・・・」

アレン「う・・・こんな暗い空気は置いておいて、次回予告です！」

楚良「頼むわ」

アレン「ええ・・・あー、ごほん。」

もう少しで合宿終了。

ルーテシアの加入でインターミドル参加を決めるアレンとアインハルト。

だけどアインハルトにはデバイスがない。

インターミドルの参加条件は『クラス3以上のデバイスの所持』。  
デバイスのないアインハルトは果たして・・・」

楚良「今回は見やすいように書き方を変えてみました。どうでしょうか？」

アレン「あとがきコーナーへのお便り待ってます！といっても質問コーナーですが。それとアンケートもまだまだ募集中ですよ！」

楚良「誤字脱字、感想もあればお願いします」

アレン「あ、なんかちょっと回復しましたね」

楚良「あ、うん、たぶん。ではまた次回」

楚良&アレン「「まったね」」



## 第29話 決意する王

「う、うおお・・・う、腕があ、上がんねえ・・・!!」

「お、起きれない・・・」

合宿二日目夜。

陸戦エキシビジョン三連戦がようやく終了した。

子供チームは現在身動きとれず。

全身の痛みと戦いながらうなっていた。

「う、動けません・・・」

「ほ、ほんと・・・」

動けないでいるのはヴィヴィオ、アインハルト、リオ、コロナ、ジヤンの5人。ルーテシアとアレンだけは普通にしていた。

ぶるぶる震えながらも動こうとするみんなをルーテシアは少し笑顔で見つめる。

アレンも同じように少し笑顔で見守っていた。

そしてやはりティムキャンピーとクリスはにらみ合いの喧嘩中。

この2機のどこに喧嘩する理由があるのかは不明だ。

「限界超えて張り切る過ぎるからだよ」

「なんでルーちゃんとアレン君は平気なのー？」

「そこはそれ、年長者なりのペース配分がね」

「僕はこう言うの慣れてるからね。それと、やっぱりペース配分かな」

コロナの疑問はばつさりと切られた。

動ける2人は同じ回答。

アレンはちよつと違うがまあ、同じととらえてもいいだろう。

大分動けるようになったか、みんなワイワイと横になりながら話します。

それを見て、アレンもルーテシアと話をしていた。

「そう言えばアインハルトはこういう試合って始めてだつよね。どうだった？」

ふと何かを思ったルーテシアがアインハルトに話しかける。

起き上がりアインハルトは、勉強になった、と答えた。

それを聞いたルーテシアはまた笑顔。

スポーツとしての魔法戦競技の楽しさをわかってもらえて何よりだった。

「今日の試合が良かったんなら、この先こんなのはどうかなくって思ってね。ああ、これはアレンにも言えることだよ」

「はい？」

「デイメンジョン・スポーツ・アクティビティ・アソシエーション。通称『DASS』公式魔法戦競技会」

映し出されたモニターには競技場の映像が。

大きなリングにたくさんの観客。

前までのビデオだろうか。

たくさんの選手たちも見える。

参加可能年齢は10歳から19歳まで。

個人計測のライフポイントを使用した、より実践に近い試合。

全管理世界から集まってきた魔道師たちと競い合う魔法戦競技。

「インターミドル・チャンピオンシップ」

ドクンツ

その時だけ、なんだか心臓が確かに高鳴った。

しかもアレンとアインハルト、2人とも同時に感じた。

今日みたいなのがまたできる。

今度はチーム戦じゃなく個人戦の1対1。

自分の実力を確かめるには最高の場所だ。

他のメンバー5人とも出る予定らしい。

ルーテシア自身も、今年はある！と豪語していた。

それを聞いてお互いに顔を見合わせる2人。

「「あつ」」

なんでかすぐに顔をそむけてしまう。

今の間だけ、2人は以心伝心と言わんばかりに同じことを考えていた。

（（なんだか目を合わせるのがすごくはずかしい・・・！！）（

たぶんお互いがお互いのことを考えていたのだろう。

そこからつい顔を見ようとして目があってしまい、顔をそむけた、と言ったところだ。考えることもほぼ同じでまさしく以心伝心。

「みんなー、栄養補給の甘いドリンクだよ」

ナイスタイミングなのかわからないが、なのはとメガーヌがドリンクの入ったコップをトレイに乗せて入ってきた。

みんながそれを受け取り終わると、メガーヌがインターミドルの映像に気がつく。

「あら懐かしい。インターミドルの映像？」

「そー。アレンとアインハルトに出場の勧誘してたの」

学生時代に出場したことのあるメガーヌ。

懐かしき思い出に浸り始めてしまった。

まあ、ちゃんと周りの様子を見てやめてくれたので良しとする。

（すごいな、みんな。くたくたで疲れているのに、もう次のことを話してるよ。まだまだ先なのに、本当にすごいや）

アレンとアインハルト以外のみんなはもう先の話を始めていた。

どういう相手と当るか。うまく戦えるだろうか。

その他にも色々、たくさん。

（でも、僕も似たようなもんかな）

「？」

チラッと、アインハルトに目を向ける。

その視線に気づいたか、アインハルトはこっちを向いてくれた。それに対してアレンは笑顔で返すも、アインハルトは顔をそむけてしまい、一瞬嫌われたと思うてしまう。

（戦いたいって気持ちを止められない！！）

またもや以心伝心。

アレンとアインハルトは同じ思いを抱いていた。

だが、これは誰にもわからない。

まあ、本人たちがわかっていたら物凄い勢いで顔が赤くなるだろう。

「どう、2人とも。出たくなってきた？」

「あ、その・・・」

「出たいです！」

「っ・・・」

「アインハルト。僕は君に、公式試合のステージの上でリベンジを果たしたい！」

今思ったことを率直に述べた。

最初に出会ってからの路上バトルから一度もアインハルトと戦っていない。

だからこそ、リベンジを兼ねてもう一度戦いたいと思った。

ちゃんとみんなが見守る中、しっかりと決着をつけたかった。

「わ、私も、公式試合のステージでアインハルトさんと戦いたいです！」

ヴィヴィオもアレンの勢いに乗ってきた。

どちらが先に当るかで変わってくるが、それでもいい。戦いたい、どれだけは譲れないから。

「・・・ありがとうございます。アレンさん、ヴィヴィオさん。インターミドル、私も挑戦させていただきたいと思います」

「はい！」

うん、とうなずくアレンと返事をするヴィヴィオ。  
アインハルトに思いは通じたようで何よりだった。

「そう言えば、参加資格で『CLASS3以上のデバイスの所持と装備』は、どうしようか」

『・・・』

全員がなのは言葉に黙り込んでしまう。

いくら年齢制限をクリアしたとしても、参加資格を守らなければ出場することはできないのだから。

「デバイス、持ってないです・・・」

「あら。じゃあ、この機会に作らなきゃ」

簡単に作らなきゃ、と言うがアインハルトの場合は別だった。  
アインハルトはアレン同様術式は古代ベルカ式。

古代ベルカのデバイスは、近代ベルカのデバイスよりも作るのが難しいと言われているのだ。

だが、そんな作るのが難しい古代ベルカのデバイス。ティムキャンピーの製作者をアレンは知っていた。

と言うよりも、八神家に泊った時にユウから教えてもらったのだ。

「なら、八神家のみなさんに頼みましょうか？」

「あれ？アレン君、はやてちゃん達と知り合い？」

「えっと、少し前に母さんと一緒にお邪魔しまして」

「そうなんだ」

「あ、あの、八神家のみなさんとは・・・」

「ああ。えっと、なんていうか、家族全員がバリッバリな古代ベルカな大家族だよ」

## 第29話 決意する王（後書き）

楚良「あ、あとがきコーナー」

アレン「あれ？なんか元気ないですね」

楚良「いや、スランプが治ってないだけだ。まあ、『DOG DAY FOX』の方は全然大丈夫だが」

アレン「開始したてはたいい調子良いですもんね」

楚良「とりあえず今回は手短に済ませる！早速次回予告だ！」

アレン「はいはい。

ついに合宿も終了。ようやくミッドに帰ってきた。

アレンはある発見をし、各々が修行に移る。

全員が個別の指導を受ける中アレンは驚くべき行動にでた・・・！！」

楚良「えー、現在もアンケートは募集中です。ちなみにメッセージでも数件来ているのでメッセージでもかまいません。感想欄でもかまいません」

アレン「誤字脱字もあったらお願いしますね。感想は大歓迎！と言うかほしいと思ってるぐらい、だそうです！」

楚良「それとアンケートの終了期間を決めました。今週一杯です。日曜日の夕方5時までにしたいと思います」



アレシ「では、急ぎ気味ですが」

楚良「また次回」

楚良&アレシ「まったね」

### 第30話 王の方舟

4日間の異世界合宿がようやく終了した。  
現在ミッドの次元空港にいる。

「僕だけ手ぶらって・・・なんか、あれじゃない？」

「いや、俺に言われても・・・」

運動用の服を着たアレノ１人だけ手ぶら。

まあ、聖王教会での戦闘中のさなか、事故で次元移動してしまったのだ。準備する時間があるわけもない上に、行くつもりはなかったのだからしょうがない。

「まあ、明日からも特訓で大変だと思うけど」

4日間の合宿内で決まったインターミドル出場。

まずは地区ごとに選考会を行い、その次に予選。

そこで『ノービスクラス』と『エリートクラス』に分けられる。

ちなみに選考会で優秀だったり、過去に入賞歴がある者はエリートクラスに入ることとなるらしい。

予選は勝ち抜き。

そこで地区代表を決め、中央17区の20人+前回の都市本戦の優勝者の21名でようやく都市本戦となる。

さらに都市本戦から世界代表戦もあるのだが、それは夢のまた夢。  
それでもそこまで行き、優勝すれば『次元世界最強』となる。

しかし、ここミッド中央は激戦区。

そうやすやすと予選や都市本戦で勝ち進めるはずがない。

アインハルトがノーヴェに率直な感想を聞くと当然の言葉が返ってきた。

「アレンとアインハルト以外の4人は地区予選前半まで。ノービスならまだしも、エリートじゃ手も足も出ない」

まずは同い年4人組。

実力はないわけではないが、やはり上には上がいる。

激戦区のミッド中央で挑むのならばなおさらだ。

「アインハルトはいいとこ地区予選の真ん中辺りまで。エリートで勝ち抜くのは難しいだろうな。そしてアレンだが・・・」

アインハルトもほとんど同じ。

少し上なだけだった。

そしてアレン。

チラッとノーヴェが見てくるが、アレン自身もどうせ同じ内容だと思っていた。

「左目に頼っても地区予選はギリギリ上位。頼らなければアインハルトと同じってとこだな」

やはりほぼ同じ。

他のみんなよりも少し上。

それでも都市本戦は無理だ。

だが、あくまでこれは今の状態での話。

これから予選までの2カ月間、全力で鍛えればどうなるかわからない。

ノーヴェ自身は「あたし予想をひっくり返せ」だそうだ。

「アレン以外の他の奴らには基礎メニューを送るから、それをやること。アレンはユウさんに教えてもらおうと思うが、あたしに協力できることがあれば遠慮なく言ってくれ」

「あ、はい」

合宿中に作った基礎メニューをアレン以外のデバイスに送った。基礎トレは今まで以上の量を。そこからさらに個人の特技の徹底強化となっている。

コロナはゴーレム召喚と操作の精度向上。

リオは独自の『春光拳』と炎、雷二つの魔法の徹底強化と武器戦闘。ジャンは刀での剣術の鍛練と、雷の強化と操作精度向上。

ヴィヴィオは格闘戦技全体のスキルアップとカウンターブローの秘密特訓。

そしてアインハルトは霸王流の型を崩さないようにと、公式試合経験のあるスパ―相手を山ほどやることに。自分で必要なものをつかむのが一番らしい。

唯一残ったアレンもアインハルトと同じ。

ユウに教えてもらうところが違うが、まあ、さほど変わりはないだろう。

さらにアレンは左手は爪が邪魔で握れないため、ストライクアーツなどには向かない。

そこから考えると、アインハルトと同じで自分で何かをつかむのがいいということになった。

「母さん」

「ん？」

「次元移動の許可、ほしいんだ」

「・・・え？」

side out

（僕の考えじゃ、たぶん出来るはずだ。事故で次元移動できたんだし、自分の意志でも行けるよね）

解散後、家でゆっくりしていた。

学校にもようやく行けると連絡し、ミウラにもメールで完治したことを報告した。

ユウいわく、次元移動許可は明日にはとれるらしい。

まあ、そんなに早く取れても困るので、今はちよつとした休憩の様なもの。

疲れを取るには十分だ。

（家にピアノはないけど、大丈夫かな？というか、僕はなんでもの唄を知っていたんだ？）

アレンが考えていたのはあの白い何かと子守唄。

『騎士狩』との戦闘中、あれを使って次元移動した。

さらに1日目夜中と2日目の朝に弾いたピアノとなぜか歌うことができた子守唄。

自分の言うことを聞く、と言うことは操作ができるんじゃないか。そう思ったアレンはユウに次元移動許可をとってもらったことにしたのだ。

「……」

なんとなく、思いついたように唄を口ずさむ。  
最初の方だけを何の気なしに歌い始めると……。

「……ええ」

頭の上にいたティムキャンピーも驚き。  
アレン本人は驚きを通り越して呆けていた。  
なぜなら唄を口ずさんただけであの白い何かが出てきたのだから。

「……は、入れる……のかな？」

きよろきよろと、誰もいないことを確認。  
そーっと手を伸ばし、その手は中に入ってしまった。

「ティム……入ってみよっか」

side out

「……変わらないね」

ユウに書置きをしてから、例の白い何かの中。  
中の風景は最初に入った時と変わらず白い建物だらけ。  
何か特徴的なものもなく、静かで人気のない寂しい町のような。

ここは、方舟

「!？」

突然声が聞こえてきた。

いや、頭の中に響いてきたと言った方が良かった。

さあ、ドアノブを掴んで

どういうことかわからないが、アレンは声に従った。  
適当なドアを選びドアノブを掴む。扉はまだ開けていない。

行きたい場所を頭に思い浮かべて、開けてみなよ  
きつと、そこに行けるはずだから

キィィ・・・

静かにドアを開ける。

思い浮かべたのは八神家。

まだお礼も何も言っていなかったのを思い出したからだ。

「本当に、着いた・・・」

### 第30話 王の方舟（後書き）

楚良「あとがきコーナーっ！」

アレン「今日はいつになくハイテンションで」

楚良「いや、テスト前だけど？」

アレン「勉強しましょうよ！小説なんていつでも書けるんですから  
！」

楚良「バカ言え！テストは10分か15分前だけ本気出すもんだろ  
！」

アレン「あー、もうここにダメ人間がいますよ」

楚良「いいんだよ。赤点さえとらなければな！」

アレン「はい、もうそれでいいです」

楚良「では早速次回予告だ！」

アレン「えー、こほんっ

方舟の力を理解したアレン。

八神家のみんなにお礼を言った後、方舟に戻った。  
声の主はいつたい誰なのか。

そして、無事家に帰れるのか・・・？」

楚良「たぶん帰れんな」



アレン「ええ！？いや、ちょ！それはないです！」

楚良「大丈夫、たぶん冗談だ」

アレン「そう言っのやめてくださいよ！怖いですから！」

楚良「まあ、いいじゃんか。ではまた次回」

楚良&アレン「「まっ たね」」

### 第31話 王たちの時代へ

「で？なんか出来ちゃったから、挨拶をしに来たと」

「はい。えっと、まだお礼言ってなかったんで。左手はもう大丈夫ですよって」

現在アレンは八神家に来ていた。

幸い、はやてやザフィーラがいたため、家に入れてもうことに。ユウには、一応ティムキャンピーが使えと言わんばかりに出してきたメール機能を使って連絡済み。帰りが遅くならなければいいそうだ。

ちなみにそのメール機能。

ティムキャンピーが口を上へ向けて開け、空中投影したディスプレイを使って行うものだったらしい。

「アレン君、なんやすごい勢いでいろいろと厄介事持ってきてくれるなあ。死にかけた次はロストロギアかいな」

「あはは、す、すいません」

「まあ、別にええけどな。こう言うのは早めに言う方が得や。詳細とか教えてくれれば、教会に申請書を出しとく」

「本当、すみません。迷惑ばかりかけて」

先ほど、今までの経緯と事情説明をしたところ。ロストロギア『方舟』を使ってここまで来たこと。

完璧に治った左腕のこと。合宿に行ってきたこと、他いろいろ。

呆れられたが、同時に少し怒られた。

子供が遠慮するもんじゃない、と軽くだが言われてしまう。

遠慮するな、と言われてすぐにそうできるわけではないが、アレンは極力そうできるようにしようと思った。

「空間移動能力かぁ。確かにそれなら事故で次元移動してまうのはわからんでもないな。もしかしたら過去にも飛べるかもしれへんし」

「過去・・・ですか」

「まあ、やつちゃだめやけどな」

「わ、わかってますよ」

「ふ〜ん。なんや？なんか企んどるなな？」

アレンの顔をみたまはやての眼はきらりと光っていた。

side out

時間と場所は変わり、夕方の方舟内。

八神家から帰宅するため、再び方舟の中にアレンはいた。

ね？ちゃんと目的地に着いたでしょ

「誰ですか？姿を見せてください」

姿？うん、難しいなあ・・・

また頭の中に響いてきた声に、返事を返す。

どこかで聞いたことのあるようでない声だが、気になる。まるで自分のことを知っているかのような口ぶりだ。

まあ、そのうちわかるよ

「・・・わかりました。なら、一つ聞いていいですか？」

何かな？

「この方舟で、過去とか、いろんな世界に行くことはできますか？」

うん、行けるよ。でもアレンが行ったことのある場所じゃないと無理

返ってきた返事は、予想を斜め上に行くものだった。

行けるには行ける。だが行ったことがないと無理。

それじゃあ、行けない事と同義なため、アレンは諦めようとした。

聞きたいことも聞いたし、返ろう。

そう思い、ドアノブに手をかけた時だった。

それでも、私がいれば行けないこともないよ

「・・・また明日、来ます」

うん、待ってるよ

side out

翌日。

昨日、帰宅するとユウは夕食を作っている最中だった。

夕食中にその日の出来事を説明。

方舟のことも説明し、インターミドルへ向けて異世界で修行をしようと考えていたことも話した。

次元移動許可はそのためだったのかと納得してもらえたようだ。

さらに今日は久しぶりに学校だった。

約1カ月ほど行ってないため、クラスのみんなが忘れていないか少し不安だったが、行ったら行ったで意外に大丈夫だった。

事故にあった、と先生から言われていたらしく、みんな心配してくれていた。左目のことを言われたが、怪我が目立たないようにしたと誤魔化した。

特に問題なしかと思われたが、クラス内ではインターミドルの話が出てきていた。クラスで出場する人も何人かいるらしい。

アインハルトと、ライバルが増えた少し苦笑いした。

まあ、2人とも負ける気なんてさらさらないが。

「あと2カ月間、死ぬ気で特訓しなきゃね」

「負けられませんからね。でも、アレンさんはどうするんです?」

「ちょっとした秘策がね」

「秘策？」

「うん、秘策」

アレンの言う秘策とは方舟のことだ。

はやてに過去に行くことを止められたが、過去じゃなければOK。  
どこか異世界に行って修行する気なのだ。

そして少し前に学校が終わり、今は昨日と同じように方舟内にいる。  
先ほど入ったばかりで、中心地に見えた塔の中へ向かって歩いていた。

ちなみに格好は前の合宿時に来ていた運動用の服。  
すぐに特訓を始められるようにと準備は万端。  
ティムキャンピーもアレンの頭の上で待機していた。

じゃあ、説明するよ

「お願いします」

頭の中に響く声の主の説明が始まった。

簡潔に言つと、この声の主は方舟の管理者。

そのためさまざまな場所へ行つたことがあるらしい。

さらにこの方舟は、行つたことのある場所の過去に行くことができる。

通常なら、行つたことのない場所や、その場所の過去には行けない  
のだが、管理者権限を使いドアの向こう側を行きたい場所へつなげ

る事でいろいろな所へ行けるようになる。ぶっちゃけてしまえば、アレンが行ったことがない場所でも行けてしまうと言っただ。

「なら」

ただし、行く先は私が決める

「な!？」

方舟を使わせてあげるんだから、そのくらいはいいでしょう？修行にもなるし、なにより私の正体がわかるよ

「あなたは、方舟の管理者じゃないんですか？」

そうだけど、そうじゃない。行けば分かるって

「・・・わかりました。行先はどこなんですか？」

行先は・・・

古代ベルカ。聖王と覇王、騎士王たちがいる時代だよ



### 第31話 王たちの時代へ（後書き）

楚良「あとがきコーナー!!」

アレン「今回はずいぶんとハイテンションですね。何かいいことでも?」

楚良「先々週ぐらいだが、テストが終わった!赤点はない!ということ補修もなにもない!」

アレン「お、おお。なんか今回は頑張ったんじゃない?」

楚良「そんな話は置いといて、次回から古代ベルカ編だ!」

アレン「飛行魔法はデフォルトで覚えてるってことですか?」

楚良「さあ?過去の海鳴編では使えるんじゃない?他の人のをコピーして」

アレン「僕はすでにコピーがデフォルトなんですか!?!何でもかんでもコピーすりゃ良いってもんじゃないですよ!?!」

楚良「いいんだよ。たぶん」

アレン「たぶんで大丈夫なんですか!?!」

楚良「まあ、それはその時になってのお楽しみってやつだ。それと次回予告よろしく!」

アレン「話がかみ合っていない！・・・もう

方舟を使い、古代ベルカへ飛ぶアレン。

そこで出会うのは過去の歴戦の王たち。

そして出会うべきではない第2騎士王の2人が出会う・・・！！」

楚良「えっと・・・誤字脱字、感想あればお願いします」

アレン「もう、お便り募集はやめたんですね」

楚良「全然来ないからね。一応いつでもまっています」

アレン「そ、そうですね。では、また次回」

楚良&アレン「「まっ たね」」

### 第32話 過去の3人の王

「こ、ここは・・・」

方舟のドアを開け、見知らぬ場所に来たアレン。

管理者の行先は良く聞こえなかったため、どこなのかわからない。

空は雲で覆われ、暗い。

雨が降り出しそうだが、たぶん振らないだろう。

さらに周りに見えるのは草むら。

だがどこからか煙のおいがする。

ティムキャンピーもどこかに行ってしまったていない。

はつきり言ってイヤな予感しかなかった。

「っ！？うわ！？」

「外したか。不意打ちだったのに、意外にすばしっこいな」

「・・・」

突然攻撃が仕掛けられた。

放たれた斬撃を間一髪のところでは避け、顔を確認するが誰かわからない。

さらにはいつ発動させたかもわからないが、黒白道化が発動している。

目の前にいるのは白いアレンとは対照的な黒い剣士。いや、騎士。手に持つ剣も黒く、漆黒という言葉がぴったりだった。

「ネア？ いや、違うな。ネアはそんなに小さくない。貴様、何者だ」

「何のことですか？」

「白を切るつもりか。まあ、いい。貴様はここで倒す！」

ガキッ！！

左手と黒い剣がぶつかる。

「貴様、その左腕は何だ？」

「僕のレアスキル『黒白道化<sup>クラウン</sup>』です。というか、いきなり攻撃を仕掛けてくるって言うのは非常識なんじゃないですか？」

「はっ、戦場でそんな甘ったれたことを言うとは！ 騎士ですらないな！」

鏑迫り合いをやめ、距離をとる。

左目が発動しているが全く読めない。

この騎士の強さは確実にシグナム以上だとわかった。

そんなことを考えていると、相手は居合の構えに入った。

鞘に納めてはいないが、魔力が溜まっていくのがわかる。

そしてその巨大な一撃は放たれた。

「サンダー・・・レイジ！！」

フェイトに教わった雷撃変換を使い迎撃する。

相殺、とまでは行かなかったが、威力を弱めることには成功。

一瞬のうちにソニックムーヴで回避した。

「甘いな」

「!？」

ザシュッ

アレンの右腕に痛みが走った。

急いでかわしたが、少し深めに掠ってしまったのだろう。

爪のついた左手で押さえながら、アレンは逃げ出した。

今の自分では勝てない。

それを認めるしかないアレンが生き延びるにはこれしかなかったのだ。だがそれ以前に驚いたことがある。

相手は殺傷設定で闘っていた。

通常、非殺傷設定なら攻撃を受けても黒白道化の袖が破れる程度だ。怪我を負わせるとまでは絶対に行かない。

だが殺傷設定ならばどうだろう。いとも簡単に相手を傷つけることができる。

「逃がさん！」

黒い騎士は、アレンが逃げた森の中まで追ってきた。

まるで狙った獲物は必ず逃がさない狩人だ。

騎士狩を思い出してしょうがない。

そんなことはどうでもよかった。

タイムキャンピーのいない今、アレンはセottoアップできない。

デバイスがあるのとないのでは結構違うのだ。

「はっ！」

「うぁー！！」

放たれた斬撃が、アレンの左脚をとらえる。

森を抜け、開けた場所に出てきたが、これは失敗だった。

左足も負傷し、逃げることも不可能。

ここでアレンは死を覚悟した。

「おやめなさい、クロ」

「オリヴィエ様」

「あなたは子供を手にかけるのですか？」

「い、いえ。ですが、怪しいものでしたので」

「第1騎士王の名が聞いてあきれますね。あなたはどう思いますか、ネア」

「そうですね。こんな、子供に手をかける・・・なんて・・・」

「ネア？」

「・・・」

アレンは、出てきた人物たちを見て、名を聞いて驚愕した。

古代ベルカの文献や、ルーテシアの家で見た本を見て知ったその顔。友達の、母の、そして何よりも自分の祖先。

第1騎士王『クロ』

第2騎士王『ネア』

そして聖王『オリヴィエ』

目の前にはその3人が立っている。  
言葉も出ず、啞然とするしかなかった。

対して、第2騎士王ネアも驚いていた。  
自分と同じ容姿、自分と同じ左手、自分と同じ呪い。  
全てが同じで、怖いくらいだ。

はつきり言っで、少し気持ち悪かった。  
だが、こんな子供が殺されるのは見たくない。  
その思いから、ネアはある行動に出た。

（君、名前は？）

（っ！？ア、アレンです！）

（そう。じゃあアレン、話を合わせて）

（は、はい・・・）

アレンを助けよう。  
誤魔化し方も、すでに考えてある。  
そしてすぐさま実行した。

「クロ！あんた、なに人の弟殺そうとしちゃってくれてんのよー！」

「な、はあ！？お、弟！？お、お前にか！？」

「そうよ！この前、こっちに来るようにゴーレムで手紙送ったの！  
そしたらタイミングの悪いことに戦が入って、このざま！この子、  
巻き込まれただけよ！」

「な、何イ！？うう・・・す、すまん。ネアの弟だとはいわず知らず、命を奪おうとしてしまって・・・って、おい！大丈夫か！？」

気がつくと、アレンは倒れていた。

いや、先ほどから倒れてはいたのだが、上半身だけは起こしていた。  
そして今はぐったり、力なく倒れている。

クロとネアが心配するが返事は返ってこない。

一瞬だけアレンが見たのは、曇った空の隙間から見えた太陽だった。



### 第32話 過去の3人の王（後書き）

楚良「あとがきコーナー」

アレン「いやあー、ついに古代ベルカ編、開始ですね」

楚良「おう。ちなみにこの時代で闇の書の主とヴォルケンズを出そうか迷っているところ」

アレン「あー、なんだか微妙ですね。A・S編でシグナムさんを師匠にしようって言うのに、この時代でも会って・・・」

楚良「まあ、そこら辺は後々決めようと思う。今はどのタイミングで『黒白道化』から『神の道化』にパワーアップさせるか迷っているんだ」

アレン「迷いすぎですね。人生迷子だらけなんじゃ？」

楚良「俺は常に迷子さ！（キリッ）」

アレン「自信満々に言われても・・・」

楚良「さあ、次回予告だ！」

アレン「最近僕しかやってない気が・・・

目が覚めたアレンが見たのは、古代ベルカの土地。

さらに同じ第2騎士王であるネア。

そしてアレンはかつての霸王『クラウス』に出会う・・・！」

楚良「ちなみに後数話でアレンが（容姿的な意味で）ようやくオリキャラっぽくなります」

アレン「どういう意味ですか、それ!？」

楚良「そのうち乗せるであろう挿入絵が力ギだ。読者の皆さんはお楽しみに」

アレン「気になるんですけど!教えてください!」

楚良「誤字脱字、感想あればお願いします。では、また次回」

アレン「まったね・・・って、なんで今回だけ僕なんですか!」

楚良「イヤ、なんとなく」

### 第33話 霸王クラウド（前書き）

今回は子守唄が出ます。

やっぱり歌詞の部分は「~~~~」となりますね。

なので十四番目の子守唄を脳内再生でお願いします。

### 第33話 霸王クラウド

目が覚めると、そこは知らない場所だった。  
アレンは気を失う前の事を思い出した。

古代ベルカの3人の王と出会った。  
そのうちの一人には殺されかけた。  
ネアに助けられたけど、その後が覚えてない。

「起きたみたいね」

ドアが開けられ、起きたアレンを見たネアが声をかける。  
それに少しばかり驚きながらアレンも返事をした。

「さ、いろいろ説明してもらっわよ。助けてあげたんだから、その  
くらいいいでしょ？」

「・・・わかりました」

説明をするしかない。

だがその前にここがどこだか聞いた。  
どうせわかってた。ここがどこなのか知っていたが、聞く必要が  
あったのだ。

「ベルカ。まさかわからないとでもいうつもり？」

「いえ、知ってます。ただ、僕からすれば古代の土地ですけど」

「どういう意味？」

「簡単に言うと、僕ははるか先の未来から来た者です」

side out

少し長く、ゆっくりとアレンはネアに説明した。

自分の正体、どこから来たか。

どうやってきたか、どうしてあそこにいたか。

全部話した。

逆にネアからもいろいろ聞いた。

何とアレンとここまでの経緯が同じだそうだ。

ビックリを通り越して呆れてしまう。

そして先ほど、アレンの方舟を使って戻ろうとした時だった。

頭の中で唄の歌詞を唱えても、ゲートが出てこないのだ。

ネアの方舟では、ミッドに行ったことがないから無理。

そもそも、方舟には未来に行く能力はないのだ。

未来から過去に来て、未来に戻るは出来ても、過去から未来に行くというのは無理。つまりは帰るすべがなくなってしまったのだ。

「これからどうしたらいいかなあ・・・」

「そうね」

「話は聞かせてもらったぞ、ネア」

「「え？」」

いつも間にか部屋にいた男性が声を出した。  
その人物をアレンは見たときにまた驚愕した。

碧銀の髪。

紫と青のオッドアイ。

本で見た見た目とほぼ同じ。

霸王『クラウド』その人だった。

「ク、クラウド様！？」

「様は付けるなど毎回言っているだろう。それと、アレン」

「は、はいっ！」

「そう身構えなくてもいい。聞けば方舟のゲートが開かないそうだな」

「はい。頭の中で歌っても、出てきませんでした」

「ふむ。では、声に出して歌ってみるといい。それとピアノも必要だな。では、行くとしよう」

「あ、クラウド様                    じゃなくて、クラウド。いったい何をする気？」

「いいや、なにも。ただ試せることは試すに越したことはないだろう？ なあ、アレン」

「・・・そうですね。やれることはやりましょう」

早速部屋から出て、クラウドの後をついていくアレン。ネアもその後続き、ピアノのある部屋へと向かった。

途中、クラウドと話をした。

本で見た感じとは全然違い、とても優しい。

最初はお堅い人の様な想像をしていたアレンにとっては、驚きだった。古代ベルカの大地に覇を成したから、もっと戦いが大好きな人だと思っていた。

だが、そんなことはなかった。

優しく、誰にでも笑顔で。

厳しい時もあるが、しっかりと見ている。

まるでどこにでもいる父親だ。

そう思ったアレンはネアはつくづく同じかもしれない。

ネアもクラウドを最初に見たときそう思ったのだから。

話を戻し、ようやく到着。

扉を開くと、白いピアノがぼつりと一つ。

まるで最初にピアノを弾いた時と同じだ。

「あ、ティム！」

最初に気付いたのは、アレンだった。

ピアノの上に羽をおろしているゴーレムを見て、すぐに自分のデバイスだと確認する。金色のゴーレムなんてティムキャンピーしか見ていないのだから。

他の色と言えば黒色ぐらいだろう。

名前を呼ばれたティムキャンピーは、すぐにアレン元へ飛んだ。  
頭の上にちょこんととまり、また羽をおろしている。

よっぽど寂しかったのだろうか、小さい腕でアレンの髪の毛を掴んでいた。

「さあ、アレン」

「あ、はい」

クラウドに言われ、ピアノの前に立つ。

頭に浮かんできた楽譜で、ゆっくりとピアノを弾いた。

「~~~~~」

唄を歌う。

ピアノを弾く。

どうしてその二つだけで涙が出るのか。

その二つがそろると、なんでか涙があふれ出してしまうがなかった。

優しい歌なのに、涙が出るなんて間違ってる。

別に嬉しくて泣いているわけじゃない。

かなしくて泣いてるわけじゃない。

ただ泣いているだけなんだ。

「出てきて、方舟・・・」

寂しくそう呟いた時だった。

目の前を、ピアノを挟んでゲートが出てきた。

アレンの言葉に反応してできたのだ。



「ええー」

「うまくいったようだな」

「みたいですネ・・・」

「では、一度戻ると良い」

「え？」

「強くなりたいのだろう？ならば準備をしてくるんだ。私とネアが稽古を付けよう」

「・・・はいつ！」

side out

過去の古代ベルカから未来のミッドに戻ると、すでに夕方だった。今更思い出せば古代ベルカの方でも夕方だった気がする。そう思いながらも、家に入った。

「あ、お帰り。特訓、どうだった？」

「えっと、いったん戻ってきただけで、すぐまた行って来るよ。忘れ物があつてね」

家にはやはりユウがいた。

古代ベルカに行っていた、なんて言えるはずもなく。

適当にごまかし、自分の部屋へ向かう。  
ちなみに夕食はまだ作っていないようだ。

準備、といっても明日の準備だ。

どうせ夜までやるんだろうと思ったアレンは、今のうちに明日の学校の準備を済ませてから行こうと思った。毎日出発する前にしているが、たまにはこういうのも良いかもしれない。

「そうだ、夕食どうするの？」

「ああ、そっか。まあ、自分で何とかするよ」

「そう……。怪我しないようにね」

「うん。行ってきます」

「行っくらっしゃい」

### 第33話 霸王クラウド（後書き）

今回はパソコンが使えず、携帯からなのであとがきはなしです。

次回は本格的に特訓開始。

クラウドさんはなにを教えるのかな？

誤字脱字、感想あればお願いします。

### 第34話 騎士王の変化（前書き）

前回のあとがきで書いた予告とは違って予定変更。  
今回は珍しく学校の話。

インターミドルに出るオリキャラが数人出ます。

後、久々に挿入絵あります。

あの黒くて大きな槌を使うキャラも・・・。

### 第34話 騎士王の変化

「アインハルト、おはよう」

「おはようございます」

異世界合宿から帰ってきて早1週間。

インターミドルへ向けての特訓はみな順調。

今日もいつも通り学校だ。

「うん、一時限目は体育か。また後でになるね」

「そうですね。では、失礼します」

「うん」

アレンの言葉通り、体育なので女子は更衣室へ移動。

男子はそのままクラス内で着替えることになっている。

女子が全員クラスから出るのを確認し、男子達は着替えを始めた。

アレンも早めに着替えようと、服を脱ぎ始める。

その時、声をかけられた。

「お前、結構ストラトスと仲いいけど、何かあった？」

「別に、なにもありませんよ」

話しかけてきたのは、クラスーのお調子者（？）ラビ・ウエズリーだった。

名字からしてリオの兄。兄弟そろって炎雷変換を持っていて、インターミドルに出場予定。こんなお調子者なのに記憶力が半端なくすごいと言う特技がある。

「嘘付けやい。ストラトス、お前と話してるときめちゃ楽しそうだし。絶対なんかあっただろ」

「いい加減にしないとインターミドルに出る前にたたきつぶしますよ？」

「おお、怖い。というかさー、その敬語やめね？ 同い年なんだし、もっと気軽にいこうぜ」

「・・・面倒なので嫌です」

「なんで！？ ストラトスとは普通に喋って、俺らとは敬語っておかしくね！？」

「早く行かないと授業に遅れますよ？」

「全面スルーはもっとひどいさあ！..」

side out

場所は変わって外。

現在中等科1年の体育の授業中。

授業、といっても基本自由。

好きなことをやって体を動かせだそうだ。

「インターミドル組でなにをやるか。悩みどころさあ」

1人腕を組み、うんうんと悩むラビ。

別に何かしないといけないと言う訳でもないのに、悩む必要はあるのか。

しかし、なにもせずぼーっと過ごすのもつまらない。  
はつきり言ってしまうえば、優柔不断な状況なのだ。

「なんでラビはあんなに悩んでんの？」

「さあ。たぶん、仕切りたいんですよ。ああいうキャラだから」

「ああ、なるほど」

「そこお！聞こえてんぞお！」

「あ、地獄耳みたいね」

「そのようで」

「スルーだけはやめてって言ってるさあ！！」

今のところ、なにもしていないのはインターミドル組の4人のみ。  
ラビ、アインハルト、アレンにもう1人。

先ほどアレンと話していた少女 エミリア・ストリーミング。愛称はエミィ。お菓子作りが得意だと言う自己紹介がアレンの中にはあった。

外見からだと言えそう、それ以外想像できないと言ったら殴られるだろう。

「まったく。で、何やるか決まったの？」

「もち。とりあえず全員で乱戦でもしようぜ」

「……」

ラビがバカ発言したため、全員が固まる。

学校でそんなことしたら校舎が壊れるだろ。

ましてや外だ。他の生徒の迷惑にもなるし、クレーターを作りかねない。

しかもそんなことになったら先生からのお叱りだけでは済まず、親も呼び出されるだろう。そうしたら家に帰った後もお叱り決定だ。3人の考えがなにも言わずとも一致し、ラビを置いてすたすた歩く。後ろで何か言っているが、これ以上付き合ったら限がないのでスルーすることにした。

「あれ、いない？」

「いじめてどこかに行ってしまったたのでしょうか」

「まあ、変なことされるよりはましだと思つよ」

「そうでしょうか」

「そつだよ」



しかし、結局はまたなにもせず。

しょうがないのでアインハルトとエミーは組み手を。  
アレンは1人でトレーニングをする事になっていた。

だがさすがにずっと同じことをしていると飽きる。

そう思いながら、なにをしようか迷っている時だった。

「おーい、許可もらってきたさー！」

「「「え」「」」

「ということだからやるぞ！」

「いやいやいや！どうやったの！？そんな許可、普通は出ないわよ！？」

「バカ言え。先生たちの弱みぐらい、既にここの中にしまっているのださー！」

そう言いながら自分の頭を指さす。

ラビの特技は言わずもがな超記憶能力。

例えばちょっとしたことで頭の中にとめておくことができるのだ。  
その記憶の中に先生たちの弱みが入っているのだろう。

それを使って無理やり許可を貰ったのだ。

口を開け、呆けているエミーだったが、2人は違った。

アレンはやっぱりかぁ、と言いたげな表情で頭を抱え、アインハルトは少しばかりどうすればいいかわからずおどおどしていた。

「だから、まずはアレン！お前からだ！」

「ええっ・・・むう、仕方ないですね。ティム」

「やる気になったなあ。行くぞルナ！」

『yes.』

アレンとラビはバリアジャケット姿になり、構える。

ラビは黒いハンマー型のアームデバイス。

バリアジャケットは同じようにクロメインのものだ。

対してアレンは、前の団服の様な姿ではなく、薄いスピード重視なバリアジャケットに変更され、その上から黒白道化のマントで防御を高めるようになっていた。

しかも大人モードも使ってない。これら全ては古代ベルカでネアとクラウドに言われてやったことだ。

「怖！なにその左腕と左目！怖！」

「・・・（やっぱり、そうなるよね・・・）」

「でも、かっこいいな！」

「そうだよね、やっぱり怖」

え？

「いや、かっこいいって！エミーやみんなもそう思うだろ？」

「そうね。結構いいと思うわ。それに髪型変わるあたりもまた」

「・・・そっか。じゃあ、ラビ」

「おう。かかって来い！」

「なら、早速」

「へ？」

ブウンッ！

すごい勢いで、風を斬る音が聞こえた。

それと同時にアレンの姿は消え、全員が驚く。

そしてきよろきよろと探そうとしている時だった。

ガッ、ドシャッ！！

いきなりアレンがラビの後ろに現れ、首根っこを掴んだまま地面に倒れていた。

いや、それよりもみななに起きたかわかっていない。

唯一理解できたのはアインハルトとエミーぐらいだ。

「ソニックムーヴ。もう完璧に使えるようになったんですね」

「うん。とある人にいろいろ教えてもらってね」

「そんなことよりさ。早くどいてくんね。動けねえんだけど」

「ああ、すいません。忘れてました」

「お前絶対わざとだあ！！」

この後、先ほどの予定通り乱戦になった。

結果は見事アレンとアインハルトの一騎打ちで終了。  
アレンいわく、公式試合でリベンジしたいからだそうだ。

ちなみにお互いが最速で残った2人を倒したおかげで被害は最小限。  
校舎はおろか、クレーターもなにも出来ていない。

まあ、不意打ちだったので当然と言えば当然だが。  
授業が終わった後、2人は先生たちにお礼を言われたとか何とか。

side out

翌日。

昨日も学校から帰った後は方舟を使い、古代ベルカへ行き、ネアと  
クラウドス、クロヤオリヴィエ達に酷いぐらいまでしごかれた。

おかげで毎朝、疲れがたまっている状態。

授業中、ちよくちよく寝て体力回復しているので大丈夫だが、これ  
以上ひどくなるのはあまり良くないだろう。

アレンは起床し、眼をこすりながら洗面所を経向かう。

そして鏡を見た瞬間、一気に目が覚めた。

「な、なんじゃこりゃー！！！！！！」

### 第34話 騎士王の変化（後書き）

楚良「あとがきコーナー」

アレン「前は、どうしてできなかったんですか？」

楚良「親と共同で使ってるから、使えなかったのだ」

アレン「そうですか。まあ、挿入絵を描く時間が取れたからよかったじゃないですか」

楚良「ああ、おかげで数枚ぐらいストックが溜まった」

アレン「で、今回の最後のあれですが」

楚良「髪、めっちゃ長いだろう？」

アレン「長すぎですよ！なんであんなに長いんですか！？」

楚良「ネアとの区別。胸があるかないとでは何か微妙だから、いっそのこと長くしちゃえてなったのだ」

アレン「理不尽ですよ！」

楚良「いいんだよ。俺がルールだ！ってね」

アレン「王様つながりでも駄目ですよ！」

楚良「ちっ、ならさっさと次回予告しろよ」

アレン「なんでそんなめんどくさそうなんですか！？まあ、いいです。」

突如髪が異様に長くなってしまったアレン。

それは古代ベルカ of 先祖、ネアの陰謀だった。

他の王も笑って過ごす中、1人疑問を抱く人が・・・。  
その人物はいつたい誰なのか・・・。」

楚良「いや、知らん」

アレン「あなたが書くんだからあなたが知らなくてどうするんです！」

楚良「大丈夫だ。あ、後、次回も挿入絵ありかもです」

アレン「話を逸らされた・・・」

楚良「誤字脱字、感想もあればお願いします」

アレン「うわぁー、今度は全面スルーだぁー」

楚良「おい、いじけるなって。みたらしやるから」

アレン「わかりました。では、また次回」

楚良&アレン「「まっ たね」」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0590v/>

---

魔法少女リリカルなのはvivid 銀の左手

2011年12月25日12時48分発行